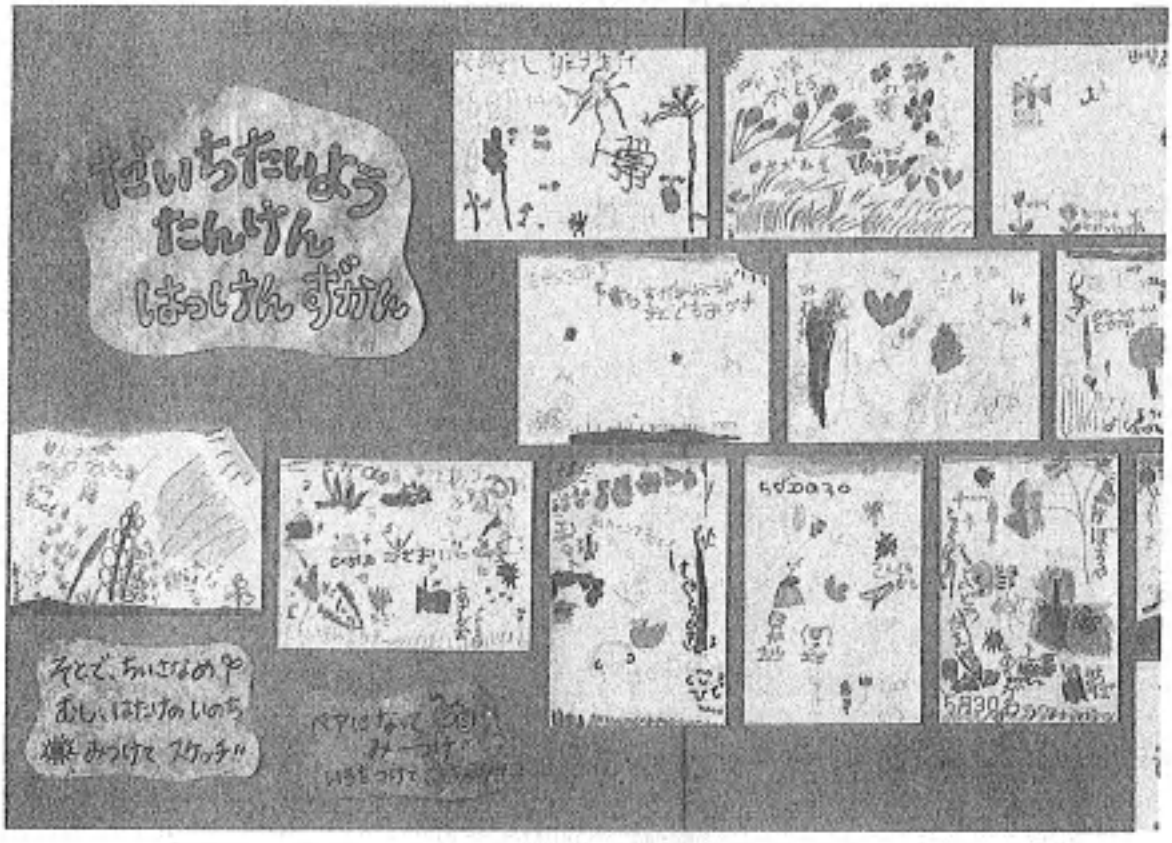
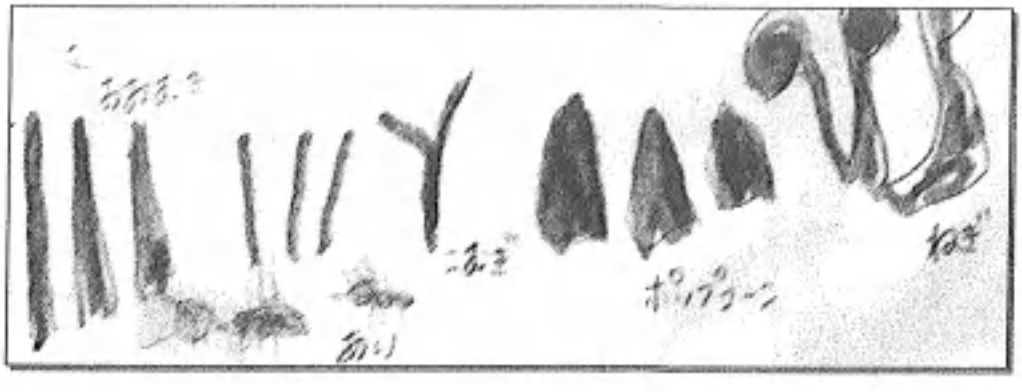
提言　幼稚園・特別支援



「そとで、見つけたこと教えてね」
自然の中で見つける小さな命。
「先生、あのね…」
紙に描かれたたくさんの「発見！」
しっかり受けとめる大人がいる。
描くって楽しい、描くってコミュニケーション。

子どもの絵は「大きく、のびのび、いきいきと」？
先入観で見ている限りは何もわからない。



提言：幼稚園　　三浦　真奈美

研究テーマ

「なになに」「わくわく」の遊びを通して育てたいこと

提言の概略

幼児教育では、遊びを通した指導によりねらいを達成することが求められます。中でも「幼児の**自発的な活動としての遊び**は心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である（幼稚園教育要領）」とされています。また、幼稚園教育要領の「表現」領域の指導の留意点として「表現する**過程を大切にして**自己表現を楽しめるように工夫すること。」という言葉が新しく加えられました。**自発的な活動としての表現遊びを通して、結果ではなく過程を重視しながら**幼児の育ちを支える保育のあり方についての提言です。いしかりの研究の構造図の「題材との出会い」「受信」「環境」などの具体的な実践事例となります。

1　「表現」で大切にしたいこと

幼稚園教育要領には、「健康」「人間関係」「環境」「表現」「言葉」の５つの領域についてのねらい及び内容が示され、これらはそれぞれが独立して指導されるのではなく、総合的に指導されるものとされています。中でも本提言では感性と表現に関する領域「表現」のねらい及び内容から特に幼児に育てたいと願うことについて取り上げます。これを本研究に即して再構成してみました。

感じとる	生活の中で様々な色、形、手触り、動きなどに気付き、感動したことを友達と伝え合う楽しさを味わう
広げる	いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
つなげる	かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりすることにつなげる
楽しむ	生活の中でイメージを豊かにし、イメージしたことを表現して遊ぶ楽しさを味わう。
使う	友達と刺激しあいながら、一緒につくる楽しさを味わう

2　自発的な活動としての遊びとは

9：00	登園、自由な遊び	これは札幌市の公立幼稚園の一日の流れです。主に**自由な遊びの時間に、自発的な活動としての遊び**が展開されます。自由な遊びの時間には、様々な遊びの環境の中から幼児が自分でしたい遊びを選択して遊びます。
10：30	片付け	
11：00	一斉活動	
11：40	昼食	
12：20	自由な遊び	
13：20	片付け、帰りの会	
14：00	降園	

3　「なになに」「わくわく」の心が起きる「遊び（題材）との出会い」

では、どんな遊びでも、幼児が自分で選択して遊びに取り組み、「あ～楽しかった。」で終わり、でよいのでしょうか。決してそうではありません。教師は、幼児の発達段階や興味に応じて、計画的に環境を構成し、幼児一人一人が調和のとれた発達ができるよう援助をします。この時、大切にしていることは幼児の中に「なになに」「わくわく」の心が沸き起こるようにするということです。教師は意図的に環境を用意して、**経験させたい遊び**に「なになに」と興味をもたせ、「わくわく」と思わず手を伸ばして**幼児が自発的に取り組むように**仕掛けていくことです。

「なになに」「わくわく」できることが見つからなかったとき

４歳の４月に入園してきたＹ君は、体を動かすのが大好きで初めての集団生活にもすぐに慣れているように見えました。しかし、入園から１ヶ月ほど過ぎると、Ｙ君の抱える課題が明らかになってきました。「みんなで今から鬼ごっこをしましょう。」などという一斉活動の時間はとてものびのびと遊ぶ一方で、自由な遊びの時間には、何をするでもなく園内を歩き回るばかりなのです。ルールのある遊びや、「～の時間」などの決まったことにはすんなりと取り組めても、自分でしたいことを選んで取り組むことは苦手なのだと感じました。それは、描画や制作活動においても同じで、教師がひとつひとつ手順を教える折り紙のようなことは上手にできても、真っ白の画用紙を目の前にすると手が止まってしまうのです。

私はＹ君にはまだ**「なになに」「わくわく」できることが見つからない**のだと思いました。Ｙ君にとって必要なのは、上手な描き方や作り方を教わることではなく、たくさんの「なになに」「わくわく」を味わい、**心が揺り動かされる**経験なのではないかと考えたのです。それから私は、Ｙ君と一緒にたくさんの物に触れました。砂、水、草、虫などの自然物、菓子の空き箱、ペットボトルなどの廃材などＹ君がこれまで触れたことのないものをたくさん遊びに取り入れました。２年たって修了する頃には、廃材を自在に組み合わせて好きなキャラクターのベルトや武器を作ったり、砂場でたくさんの塩ビ管をつなぎ合わせて長い水路を組み立てたりして遊ぶことができるようになりました。小学校との交流で１年生と雪遊びをした後は、「楽しかった。友達ができた。」と言って何枚も絵に描いて話をしてくれました。

4　「なになに」「わくわく」の遊びを通して育てたいこと

Ｙ君のように「なになに」「わくわく」できることが見つからない幼児は珍しくありません。このような幼児に共通して感じる課題は次の通りです。

- 自由な遊びの時間にしたいことが見つからない
- 遊びのために物を運んだり作ったりすることを面倒がる
- 泥や糊、絵の具などの汚れを嫌い、虫にも触れられない
- 友達とのコミュニケーションが希薄である

これらの課題から自発的な活動としての遊びを通して育てたいことを考えました。

5「なになに」「わくわく」を引き出す５つの視点

①感動した（感じとった）ことを友達と伝えあう～砂水遊びを通して

一人の幼児の発見がたくさんの幼児の遊びに広がった事例です。塩ビ管に水を流して遊んでいた幼児が、水の勢いで砂がえぐれていくことに気が付きました。教師は、この発見を遊びにつなげられると考え、意図的に大きな声で反応し周囲の幼児の気を引きました。

また、水を汲む道具を増やすなどしてみんながこの遊びの仲間になれるようにしました。仲間同士でいろいろな考えを出し合ったり、協力したりして水で砂を流す面白い遊び方を見つけました。みんなで一斉に水を流した時には、歓声が砂場に響き渡りました。感じとることの喜びが歓声にあらわれています。

「水の勢いで砂がえぐれていくよ！」
「どこどこ？」「わー本当だ。」

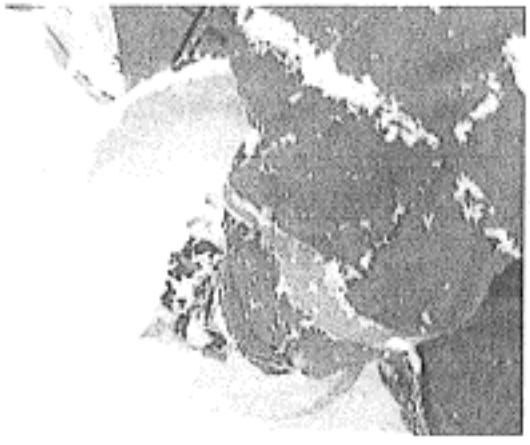
「じゃあ、砂を固めたらどうなる？」
「もっとたくさん水を流そうよ。」

～教師の援助～
幼児同士の仲立ち
幼児の思いに応じた道具の提示

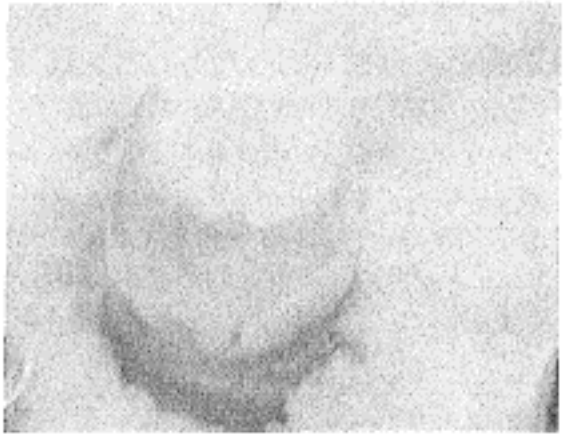
「おもしろいね！」「こうしたらどうなる？」「できた！」「次はこうしよう！」

②いろいろな素材に触れ、工夫して遊ぶ～雪遊びを通して

雪山に色水で色をつけ、自分たちの基地を飾り立てている幼児がいました。色水と雪という素材にもっと触れて、工夫をして遊びを楽しめないかと、単に雪山に色水をかけるという方法ではなく、一人一人が自分のバケツの中で雪と色水を混ぜて、できたものを雪山に貼り付ける方法を提案しました。すると、白い雪がゆっくりと色水に染まっていく様子に気付く姿や、白い雪と色のついた雪を２層に重ねたものを作る方法に気付く姿がありました。工夫を重ねて完成した雪の塊には特別の愛着がわき、それらを雪山に貼り付けて満足げな幼児の笑顔が見られました。いろいろな素材や遊びにふれることが、子ども達の豊かな「発想力」を育てていきます。



「雪にだんだん色が染みていくよ。」



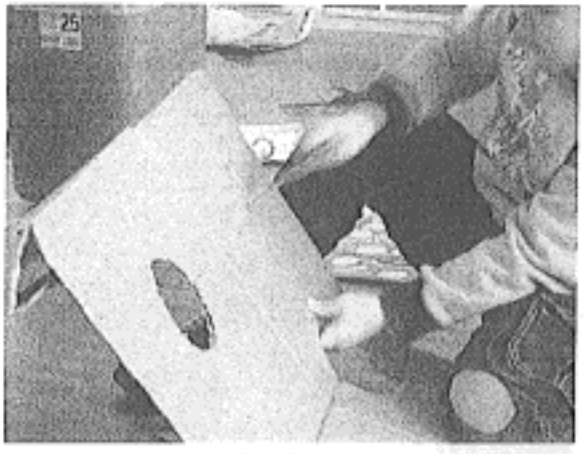
「白い雪と色の雪をバケツに詰めて作ったよ。」

～教師の援助～
幼児がしている遊びを生かしながら素材の面白さに気付かせる
工夫を引き出す遊び方や道具を提示する

「不思議だな。おもしろいな。」「こんなことも試してみよう。」
「一生懸命作った宝物だよ。」

③つくることを楽しみ遊びにつなげる～おばけやしきごっこを通して

年長になった子供たちが、昨年の年長児がしていたお化け屋敷作りを思い出し自分たちもやってみようということになりました。昨年はお客さんで驚かされる一方だったのが、今度は驚かす側とあって、どうしたらより怖くなるかと大張り切りです。子供たちは自分のイメージするお化けや驚かす為の仕掛けを次々に提案します。教師は、幼児の思いを聞き取りながら入り口から出口までの見取り図を描くことで、目標とするお化け屋敷の全体像を具体的にしました。そして、一人一人が作りたいものに応じて、適した材料や道具を幼児と一緒に考えました。年長児ともなると、今までの遊びの経験から自分の作りたいものに合った材料を思い浮かべられるようになってきます。出来上がったお化け屋敷でお客さんが「キャー」と悲鳴上げるのを様子に、満足気でした。あまりの楽しさに「明日もやりたい。」と言い、保育室には１週間お化け屋敷の環境が残されました。



「穴から手を出して驚かすには…」

「大きな目玉をぶらさげたいな…」
「以前にこうやって人形を作ったことがあったぞ。思い出してやってみよう。」

～教師の援助～

出来上がりの「見通し」をもたせ、意欲的に取り組めるようにする
　様々な道具や素材に触れる経験を積み重ねさせる～「使う」積み重ね
　幼児が自分で考える場面を設け、主体的な活動を促す～「選び決める」

「だんだんできてきた。わくわくするなあ。」「あの時もこんな風に作ったよね。」
「思ったとおりのものができた！」「自分で頑張ったよ。」

④自分のイメージを表現する楽しさを味わう～踊りの小道具作りを通して

子供たちは普段からいろいろな踊りを踊って楽しんでいます。年長の女児が好きなアイドルの踊りを踊ることになりました。踊ると言ってもただ踊るだけではなく、衣装や小道具まで憧れのアイドルのように作ってアイドルそのものになりきるのが、この遊びの楽しさです。幼児がどのようなイメージをもっているのかを探りながら、イメージにい合ったヘアバンドを作ることを提案しました。星やハートなどの飾りは、幼児が考え友達同士で作り方を教え合って作ったものです。子どもが「つくりたいものをつくる」ことはとっても楽しいことです。また、実際にアイドルのＶＴＲを観ながら踊ることで、幼児同士がイメージを共有できるようにしました。振り付けを覚え、衣装や小道具を完成させると、たくさんの人に見せたくなり、ステージでコンサートを開いたり、全園児での誕生会の催しとして披露したりしました。

「アイドルみたいな
ヘアバンドを作りたいな。」

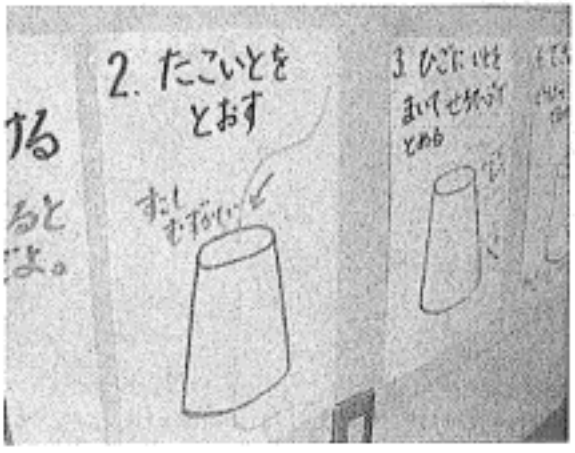
「おそろいのヘアバンド。
アイドルみたいに踊れているかな。」

～教師の援助～
幼児の作りたいもののイメージをしっかり把握する
仲間同士でイメージを共有できるよう仲立ちする
表現したことを友達や教師から認められる場面をつくる

「こんな飾りをつけてみたいな。」「いいね、私も同じのをつけたいな。」
「みんなに誉められた。嬉しいな。またやりたいな。」

⑤友達と刺激しあいながら作る楽しさを味わう～おもちゃ作りを通して

紙コップに通したたこ糸を水で濡らし、指で摩擦すると音が鳴るおもちゃを作りました。興味をもった幼児がいつでも自由に作れるよう、ホールの一角に環境を用意し、手順を分かりやすく掲示しました。最初は興味をもっていなかった幼児も、友達が完成したおもちゃで遊ぶ様子を見て、「ぼくも。」と次々に製作の場に足を運びました。幼児だけで作れるように環境を設定したことで、幼児自ら問題解決をしたり、友達同士で教えあったりする姿が見られました。教師は何個も繰り返し作り上手になったK君を認め、周囲の幼児にも、「この人はとても上手な先生だよ。」と紹介しました。K君は毎日製作の場に来ては、困っている友達に得意げに教えてあげていました。
いろいろな技を「使う」ことはおもしろいこと。技は教師が教えるだけではなく、仲間と学び合うことからも生まれてきます。



「次はどうするのかな？」

「教えてあげようか。」

～教師の援助～
幼児同士が刺激し合えるような環境を構成する
幼児の得意なことを周囲の幼児に知らせる

「どうしたらいいかな。」「こうすると上手くいくよ。」
「ありがとう。～君はすごいね。」

5　今後に向けて

本提言では「表現」の領域において、幼児の自発的な活動としての遊びを通して育てたいことを挙げました。「なになに」「わくわく」を基盤に、発見、感動、伝え合いなど幼児の気持ちを重視しながら「楽しむ／つなげる／広げる／使う／感じとる」力を育む実践を紹介させていただきました。

これらのことは子どもの思いを確かに「受信」してこそできることだと思います。確かな援助をしていくためにも私たちの受信力を高めることもますます大事にしていきたいと思います。

さらに、年長ともなれば手順や作り方を意識した「見通し」を持つことや、技法を理解して表現したりできるようなことも取り入れたいと考えています。また自発的な活動としての遊びと、学級全員で取り組む一斉活動の両方をバランスよく組み立てながら、今後は以下のことを深めていきたいと考えています。

＜今後深めたいこと＞

- 教師が描画材料や素材などの特性や特徴について深く知り、幼児に提示する。
- 幼児の発達段階に合った計画的な活動を組み立てる。
- 造形的な面から「きれい」「おもしろい」と感じられるような活動も取り入れる。

一斉活動で初めてクレヨンを使いました。はらぺこあおむしに色を付けてあげよう。

園庭いっぱいに広げたロール紙に泥水で絵を描いています。描画に苦手意識を持っている幼児も夢中です。

おみこし作り。みんなが大好きな絵本を題材にしました。描く、切る、貼るなどの中から一人一人が得意な役割を選び、協力し合っています。

研究テーマ

大きな絵を描いて絆を深めよう（交流学習を通じて）
～この出会いを大切に～

提言の概要

特別支援の図工授業となると、どうしても労作的な作業になり、「はみださず、むらがないように色を塗ること」「正確に形がとれること」「長い時間集中して作業する」などが要求される。
それでは造形活動を楽しんでいるとはいえないと考え、児童自身が絵を描くこと色を塗ることを楽しめる、自由に表現することの喜びを知る授業を模索してきた。

また、交流学習となるとどうしても普通学級の児童の指示する通りに動いたり、手伝ってもらったりすることが多い上、なかなか互いの良さに気づけないということも気になっていたことだった。

表現することをどちらも楽しめ、かつ互いの良さに気づけるような題材はないものか・・・と。

この提言が何かの参考になれば幸いである。

Ⅰ 6年生交流の絵とその展示場所

北栄小は現在、３１名の特別支援児童をかかえ７名の指導者、３名のヘルパーで教育活動を行っている。

４０名の大所帯は管内１であり、こうなるともう静かにじっくりと対個人で学習するということは難しくなってくる。また北栄小は、普通学級１０クラスの中規模校で、職員の約半数が特学指導者ということは、学校運営上かなりの比重で分掌や行事にかかわることとなる。

そのような状況が、普通学級と特別支援学級の児童の理解を深める上でも重要な要素を占めていると思われる。

【題材について】

毎年総合の時間に、各学年とたんぽぽ児童全員とで4時間ずつの交流時間を持っている。

それぞれの発達段階に応じてゲームをしたり楽器演奏したりしているが、6年生とはここ数年一緒に大きな絵を描き、それを校内に展示し交流の成果を効果的に利用している。

前回はギャラリーに展示し、今回は廊下と階段に飾った。とてもダンボールとは思えない出来ばえは、殺風景な校舎内を明るくする効果もあり、かかわった子ども達は満足そうだった。

制作中は6年生もたんぽぽ児童も、絵の具を体で使うことを心から喜んでいるふうで、「絵の具はすべて使いきっていいよ。」と伝えたとたんに、画面にしぶきをかけたり、足形や手形をつけたりして絵の具の感触を楽しんでいる様子は見ていて気持ちが良かった。

またあるたんぽぽ児童は、それまでは手を汚すことを極端に嫌い、制作の途中でも手を洗いに行くほどだったが、今回は6年生が手形や足形をつけているのを見て、自分も同じことをした。指導者が指示したのではなく、自分で気づき選択したのだ。これこそが、交流学習の目的であり効果といえる。

【育みたい力】

関心・意欲・態度

・ **楽しむ**ー自由に形を描いたり彩色したりすることを楽しむ。
絵の具の感触を手や足や指で直に感じることを楽しむ。

つくりあげる力

・ 選び・決めるー混色した色をおく場所を考え、美しい配置になるよう彩色する。
（主に６年生）

・ ﾊﾞﾗﾝｽをとるー離れてみたり他のグループの作品を見たりして、全体的に調和のとれた作品にする。
（主に６年生）

・ **使う**ー絵の具を混色して好きな色を作ったり、手形や足形をつけたり、しぶきをとばしたりという様々な使い方で表現する。

鑑賞の力

・ **感じとる**ー絵の具の色や、筆で描いた形の美しさや面白さを感じとる。

・ **他者理解**ー友達の作品や６年生のお友達の作品の良さや美しさを感じる。

【児童の観察】

Ｙくんー・算数プリントをやったり、平仮名を呼んだり書いたりするが、会話はできない。

・アイロンビーズのような作業的なことは、すすんでおこなっていた。
休み時間の準備の時から、指導者のそばで授業の始まるのを心待ちにしているようだった。教室から逃げ出すことがある児童なので、初めは心配したが、どうやら早く始めたくて来ていたようだった。

・担任曰く「なにをしても怒られないからじゃないか？ああしろこうしろとも言われないし。」ということだった。

Ｋくんー・平仮名を読むが、筆圧が弱くしっかりした文字を書くことは難しい。「はち」「にんじん」「パン」などという単語は話すが、会話はできない。

・○や△を鼻歌混じりで描くことを楽しんでいた。ほとんどすすんで作業にかかわることが少ない児童であるが、階段にダンボールを貼る作業もすすんで手伝っていた。

6年生の感想

「抽象画というものを初めて知ったが、自分の思うように描くということがこれほ楽しいとは思わなかった。」

「たんぽぽの人と一緒に絵が描けて楽しかった。」

「片づけが大変だった。」

「相談してこれを描こうということになっていたのに、ふと見るとそれが真っ白に塗りつぶされていて、困ったこともあった。でも、何かを描かなくてもいいと知って良かったと思った。」

【３時間目】

１，今日の活動を知る。

・前年度の絵を見ながらどのように彩色すると効果的かを考えさせる。

・色は各グループ４色とする。

２，　自由に混色しながら彩色する。

・△，□や○、線、点など、好きな形を自由に描く。

・手で振りかけたり、手形足形をつけたり、しぶきをとばしたりする。

支援

・絵の具を使い切るように伝える。

・赤・橙・黄

・青・紫・赤

・緑・橙・黄

にそれぞれ白を加えた４色を各グループに渡し、その中で自由に混色して良い。

他のグループとは混色しない。

３，　次回に行うことを知る。

○事前に決めた場所に展示することを知る。

裸足になり、絵の上にのって夢中で絵の具を塗る６年生。

手が汚れることも気にせず、手形をつけるたんぽぽ児童。

【４時間目】

１，　本時にやることを知る。

○展示場所への展示方法を知る。

支援

・布ガムテープ

・カッター

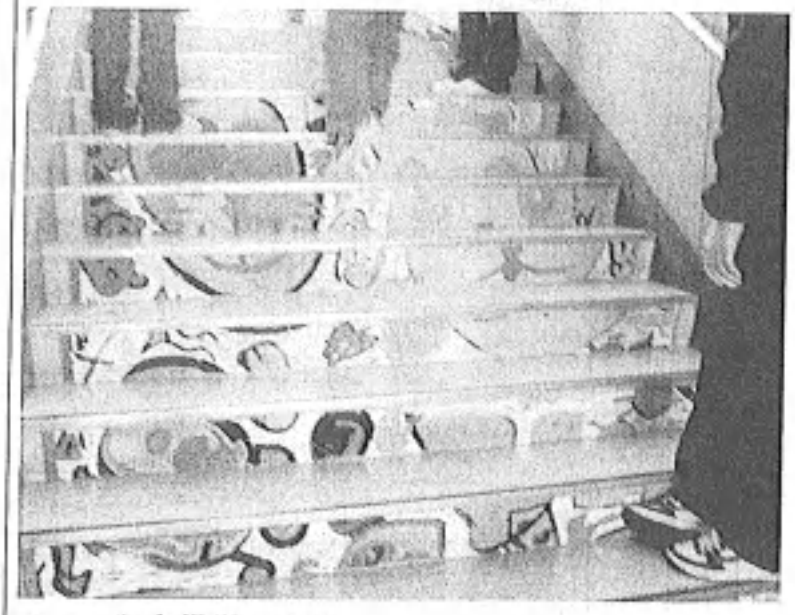
・大きなカッター板の準備

２，展示場所への効果的な置き方を考える。

○階段には１５センチ幅でカットする。

○壁は、そのままとりつける。

○布ガムテープを丸めて張り付ける。



４，　記念撮影をする。

○自分たちの作品と一緒に写真を撮る。

５，　感想を述べる。

○それぞれ、交流して感じたことを発表する。

1年・たんぽぽ交流感想

ぼくをむかえにきた
そこすがあります
はずかしいのだけど
たんぽぽのせんせすごく
絵がうまいです
みうとさとのいらいす
がんばってました。
はじめていっしょにぬり絵
がうまいのは楽しかったです。

6年 組 大谷 脩哉

1年・たんぽぽ交流感想

今までの6年間 たんぽぽさんと
一緒に交流をして楽しかったです。
とくに、今回やった抽象画が楽しかった
です。中学校へいっても、いろんな学校
に入るんがいきが、いっしょに
絵をかいたり、物を作ったりしたい
です。6年間の交流、楽しい
楽しかったです。

6年1組 有藤[illegible]

1年・たんぽぽ交流感想

たんぽぽさんといろんなはなしができました。
なにをしようと言ったら元気よくおねがいしますとかいてくれた
ときはすごくうれしかったです。たんぽぽさんと
楽しく絵を書けました。どんどんより上手に書け
たらいいです。たんぽぽさんと交流して、楽し
い思い出ができました。

6年 1組 水野[illegible]

1年・たんぽぽ交流感想

はじめは、たんぽぽさんのおせわ
できるかなぁ？と思ってたけど
たかひろくんを見て、あういう
ふうにやればいいんだなー！
思ってがんばろうと思った。
たんぽぽさんも私も自由にかけてよかったです。とても楽し
かったです。

6年 1組 田村玲奈

1年・たんぽぽ交流感想

たんぽぽのみなさんと絵を
かいたりして楽しかったです。
ふだん絵を書くことたんて
したことなかったし楽しく絵を
かいたことはやまりなかったけど
今回はものすごく楽しかった
です。
いっしょに絵を書いてくれて
ありがとうございました。

1年 1組 [illegible] 俊也

1年・たんぽぽ交流感想

6年生と たんぽぽ との
交流事業をやって
絵を書くことがとて
も楽しくなりました。
初めて抽象画を
書くと抽象画はリアル
に書くといいからとて
も楽しく絵を書く
ことができました。

6年1組 平林 大

1年・たんぽぽ交流感想

最初は、たんぽぽさんは、いうこと
を聞いてくれなかったけれど
ちゅうしゃうがをいっしょに書いて
いるうちにだんだんいうことを
聞いてくれるようになりました。
たんぽぽさんといっしょにちゅうしゃうが
をかけて楽しかったです。
もう一回交流したいです。

6年 1組 [illegible]弘

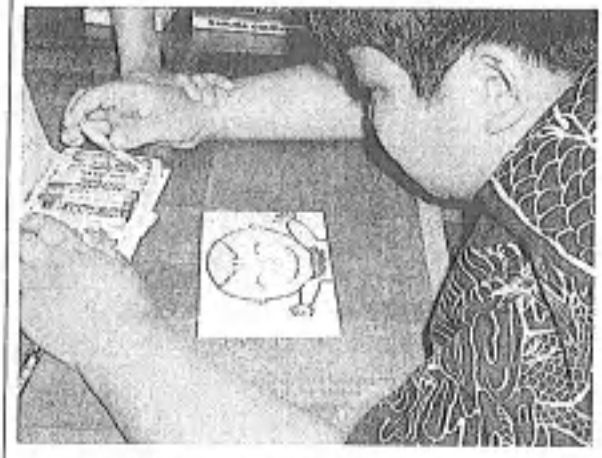
1年・たんぽぽ交流感想

はじめていっしょに抽象画を
かいてとても楽しかったです。
たんぽぽと絵をかいてと
ても楽しかったし、たんぽぽ
の男女かんけいなくおもしろい
所がいっぱいわかりました。
もうこうりゅうはないけど、もう一
度こんなこうりゅうをしたいと思いました。

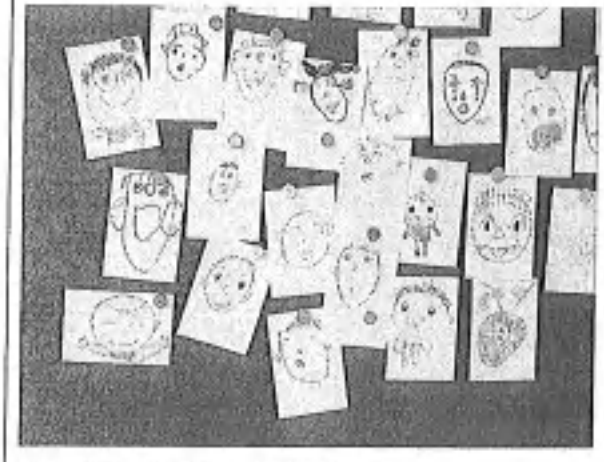
6年 1組 [illegible]

Ⅲ 誰かのために描く絵・・・心をこめて

選んでもらおうと真剣な表情



髪の毛を金髪にするのは、どうしてだろうか？



様々な作品が出来上がった。

たんぽぽの子どもたちが人物を描く場合、たいていはかなりの感情移入がある。

まず自分がいて、自分に近い人が大きく描かれ、さまざまな物体や活動が象徴的形式的に描かれることが多い。

自分の思ったとおりに描くので、他人と上手下手を比べたり、お友達の真似をすることが少なく、十人十色の作品が出来上がり大変面白い。

今回は、次の日から『産休に入る教師の生まれてくるであろう赤ちゃんの顔を想像して描こう。』をテーマに描いてもらった。

出来上がったら黒板に張り、「こんな赤ちゃんだったらいいな・・」と教師に選んでもらう。

子どもたちは、自分の作品を選んでもらえるようがんばって描いていた。

「赤ちゃんだから丸裸」
「赤ちゃんは泣くから、泣き顔を」
「さくらんぼの中に入っている赤ちゃん」
「大きくなった姿を後ろに描いた」
「涎掛けをかけて」
「なぜか青い目」
「なぜか金髪」

コンテストとはいっても、客観的な上手下手ではなく、選ぶ側の好みで選ばれる。だから誰にでも選ばれる可能性がある。

多分、一般的には他の作品が選ばれると思うが、今回は「金髪笑顔」の作品と、名前を書いていないにもかかわらず引き当てた前担任児童の作品と、さくらんぼの中に入ったあかちゃんの３作品が選ばれた。

子ども達は「先生は、金髪で青い目の赤ちゃんが欲しいんだなあ・・・」と納得したようだった、さらに、どんなに風変わりな絵でも、「先生はいつでも君を見ているし、君を理解しているよ」のメッセージを送った前担任としての気持ちに感動した授業だった。

授業者　下垣麻美

【育みたい力】

関心・意欲・態度

・つなげる一自分の想像する力を使って赤ちゃんの絵を描く。

発想・構想の力

・深める一赤ちゃんとはどんなものか・・・を考え、絵に表現する。

鑑賞の力

・感じ取る一赤ちゃんを産もうとする先生がどんな赤ちゃんだったらうれしいか気持ちをくんで絵を描く。

・他者理解一友達の作品をみて、その良さを感じ取る。先生がよろこぶ赤ちゃんはどんなふうなのかを理解する。

【指導の流れ】

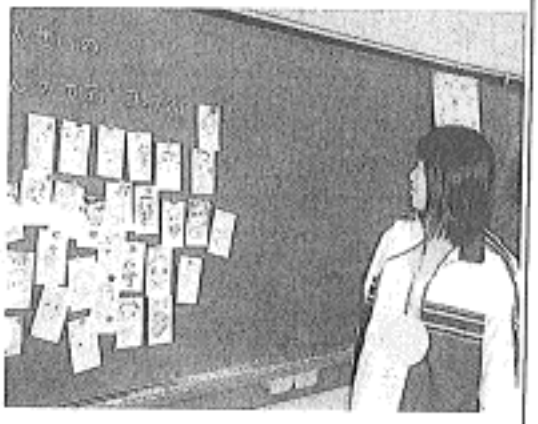
1，本時にやることを知る。

○産休に入る先生の、生まれてくる赤ちゃんを想像して描くことを知る。

2，材料を受け取る。

◎紙に大きく描くことを伝える。

・Ｂ６に切った画用紙
・細字黒いブロッキー
・色鉛筆



3、自分なりに赤ちゃんを想像して、描く。

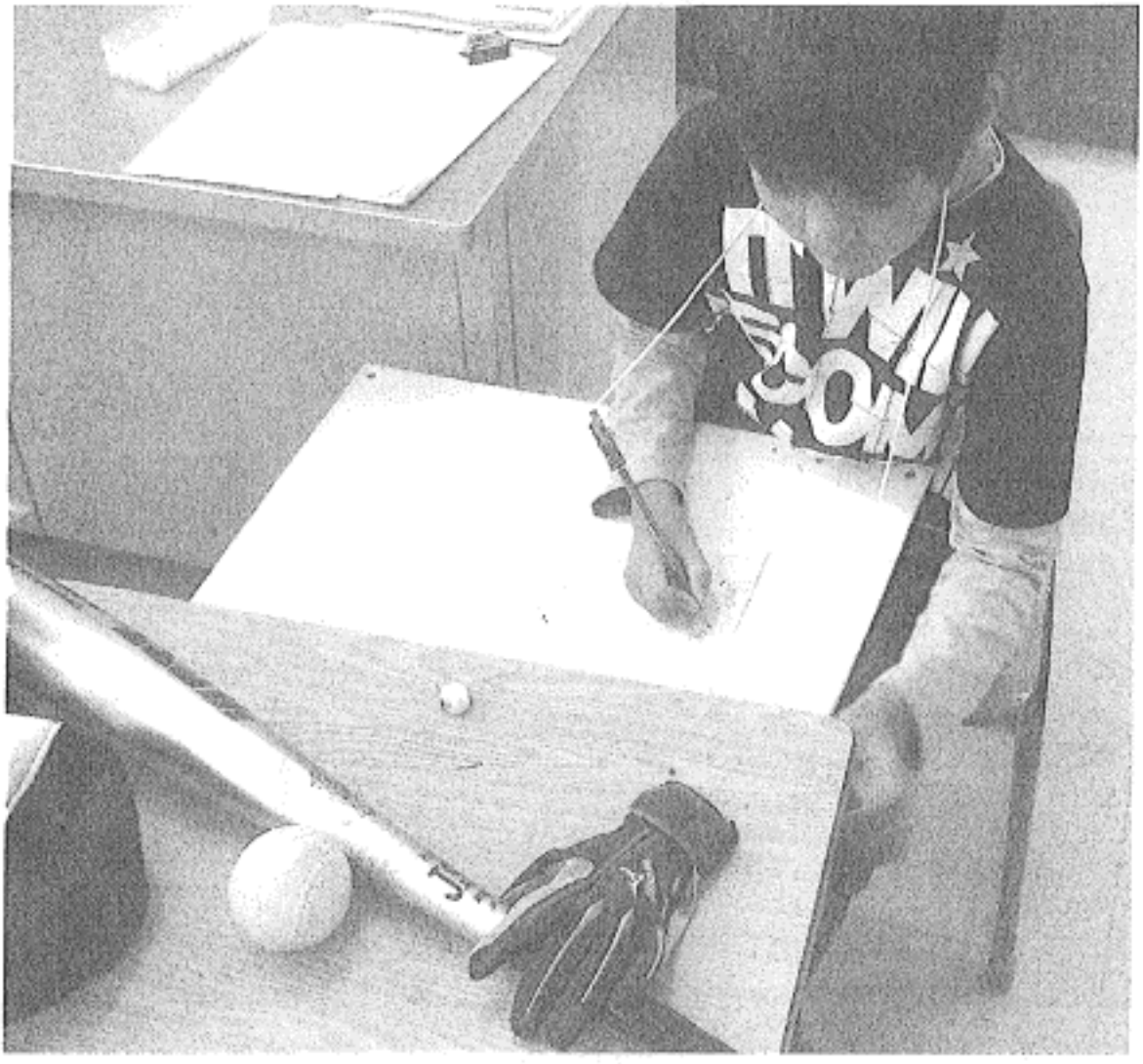
○細字黒ブロッキーで下書き

・赤ちゃんはどんなふうかな？考えてみよう。
・どんな赤ちゃんだったら、先生は喜ぶかな？
・こんな赤ちゃんだったらいいなあ・・と思うような絵にしてね。
・描き終わったら、先生に気に入った絵を選んでもらうことを伝える。
・できたら、どんどん黒板にはっていく。

4，　コンテスト

◎先生登場
◎先生が選ぶ赤ちゃんの絵をみる。
◎コメントを述べながら好きな絵を３枚選ぶ。
◎コメントを言いながらメダルを渡す。
・黒板に張れるようマグネットを用意。
・画用紙のメダル３枚
○選ばれた子は金メダルをもらう
○選にもれた子も、一言いいながら先生に絵を渡す。
○お礼の言葉をきく。

提言　小学校



上の写真に見える真剣なまなざしの６年生、
野球用具の絵を描いているじゃなくて、卒業記念に自分自身を描いている。

図工は難しいなんて言っていた先生が、授業づくりのポイントを語った。
「最初にこどもに「こうしたい！」って強く思わせたら成功ですよね！
子どもが本気になったら、すごい！共同研究っていいですね。」

提言：小学校　平山　一弥

研究テーマ

こんなことから始めてみませんか
～ささやかな提案～

提言の概要

普段図工の授業をする時に困ることがあります。教科書を見てもどのように指導していいのかわからない、もっといい題材はないのか。さらに完成した作品をどのように掲示したらよいのか、作品ラベルはどうすればよいのか・・・・。こうしたことで頭を悩ませることがあります。しかしこうした悩みは、多くの現場の先生がかかえる共通した問題でもあります。

私も図工・美術が専門ではありません。今から１０年ほど前の、全道造形教育研究大会（千歳）で授業者となったことを機会に、多くの先生方からアドバイスを受けながら実践を重ねてきました。

今回の提言では、そうした先生方から学んだことを中心に紹介させていただきます。色々悩みはありますが、まずはこんなことから始めてみませんか、というささやかな提案をさせていただきます。

Ⅰ　図画工作の日常実践の悩み・疑問点など

教職員に対するアンケート調査から

① 教科書を見ても、作品をどうやって作ったらいいのか、描いたらいいのかよくわからない。教科書がわかりにくく、指導する際に悩んでしまう。

② 教科書に掲載されている題材がわかりにくく、また魅力がない。以前はもっといい題材もあり、指導しやすかった。

③ 作品としてよくわからないものが教科書に多く掲載されている。造形遊びでも、こんなことはできない、あまりやりたくないという題材もある。子どもたちにとって教科書の魅力が不足していると感じる。

④ 広い机、広い空間で描かせたい。過密な教室、指導者不足で困っている。

⑤ 地域性のある題材を取り入れたい。例えば、アイヌ模様とか氷雪をテーマにしたものなど。反対に石油化学製品など、燃えないゴミの出る題材や、ペットボトルやアルミ缶など、今後社会から減らしていくものを材料として家庭から持ち寄る工作はやめるべきだと思う。

⑥ 個人差、図工を苦手としている子ども、何も手がつけられずに困っている子どもへの指導をどうするか。指導と押しつけの境界が難しい。最近の図工は、あまりに自由になりすぎて、楽しくできればそれでいいのかと疑問に思う。特に作品の評価基準をどのようにするか迷う。

⑦ 図工の時間が少なくなっていて、なかなか作品が完成しないことが多い。そうした際に、休み時間や放課後などを活用して取り組ませていることが多い。また、絵などの描く際に、どの学年でどのような技法を指導したらよいのか、そうした系統性のようなものがよくわからない。

Ⅲ 石教研の研究組織

石教研の研究組織と造形連盟、そして日常実践

石狩管内には、石教研という研究組織があります。教職員がそれぞれ教科部会に所属し、研究主題のもと市町村単位で研究実践が進められています。

年に１度、１日日程で管内規模の集会（二次集会）が各教科部会ごとに開催され、そこで各市町村の取り組みや、個人の日常実践が交流されます。

また、石教研という組織で管内の教育課程が作成されています。各学校は、それをもとに教育課程を編成しています。もちろん各学校で特色ある教育活動が進められていることも事実ですが、こうすることで、管内の小中学校では、ある程度共通した実践が進められていくことになります。

図工・美術部会でも、各市町村ごとに研究授業や作品交流、実技研などを実施し、研究内容などについて検証を進めています。そのことが二次集会で発表され、成果や課題、そして次年度以降の研究の方向性が決められていきます。この図工美術部会には、造形連盟の会員も多く所属し、研究主題についても石教研のそれと関連づけることを重視しています。「育みたい力」については、前回の千歳大会で造形連盟が提唱したことですが、それが石教研の研究にも現在盛り込まれています。

二次集会のもう一つの大きな利点は、図工美術の作品を持ち寄り交流し合う活動にあります。ここで新たな題材開発をした作品が紹介されたり、あるいは日常実践上の悩みなども知ることができます。授業を見ることも大切ですが、完成した作品を通して語り合うことも非常に有意義な活動となっています。

この際、作品と同時にその実践をレポートとして持ち寄ります。そのレポート集を１冊にまとめ、毎年研究集録として残しています。

一方造形連盟では、管内の美術展を開催し、様々な学校の子どもたちの作品を展示し、子どもたちの表現意欲を高める活動をしています。また、そこに展示された作品について教職員で語り合う場なども設けています。

造形教育連盟の活動は、さらに幼稚園や高校、そして石狩管内以外の先生方にもご協力をいただいているという点です。こうした幅広い研究を進めている造形連盟の活動は、今後も大切にしていかなくてはなりません。

以下、こうした研究活動を通して、様々な先生方から学んだことを実紹介していきます。

Ⅲ ミロの実践：蓑島裕二先生の実践に学ぶ
石教研二次集会作品交流を通して

石教研の二次集会の作品交流の中で、北広島の西部小学校の蓑島先生がされた「ミロの絵」の実践が目に留まりました。当時、「気分はピカソ」という題材があり、ピカソや著名な画家の絵を鑑賞し、例えばピカソ風の絵を描いてみようとする内容でした。しかし実際にやってみると、それは子どもにとって難しい内容であり、なぜピカソの絵を描かなくてはならないのかという子どもにとって必然性に欠けるものでした。

このミロの実践は、ミロの絵の一部だけを提示して、そこから各自がその続きをイメージするという画期的な内容でした。以下は、その題材の大まかな指導計画です。

（１）ミロの絵の一部（カラー美術全集）を子どもたちに提示する。

（２）ミロの絵の一部を見た感想について発表する。

（３）この絵の続きがどうなっているのかを考え、想像してこれから絵を描くことを、子どもたちに知らせる。

（４）ミロの絵の一部分をコピーして子どもたちに配布する。配布されたコピーを画用紙にトレースする。

（５）トレースした一部から、その続きを想像して絵に表現していく。色や形などにも注意する。鉛筆で下書きする。

（６）絵の具で彩色する。細かな線などは、サインペンなどを使う。バックについては、彩色する前に、ボカシの技法を使って、薄く色をつけておく。

（７）作品が完成した段階で、実際のミロの絵の全体を提示して、自分が想像した絵と比較する。自分が感じたことを作品ラベルに記入する。また友だちの絵のよいところを見つける。教師のコメントも入れる。

Ⅵ 子どもたちの取り組みの様子や作品の記録化

岩崎愛彦先生の実践に学ぶ

シャボン玉から生まれた世界

名前

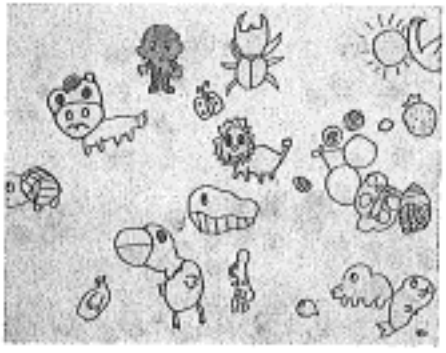
作品のタイトル

作品のしょうかい

うまくできたところ、くふうしたところ、くろうしたところ

友だちから

より



子どもちの授業に取り組む様子、そして完成した作品をデジカメで記録し、自分の今回の図工の取り組みの様子を振り返ったり（自己評価）、友だちからのメッセージ（相互評価）などを記入する。ポートフォリオ的な使い方としても有効である。

Ⅴ 題材提示の方法や具体的な指導の仕方
「テープカッターを作ろう」の実践から

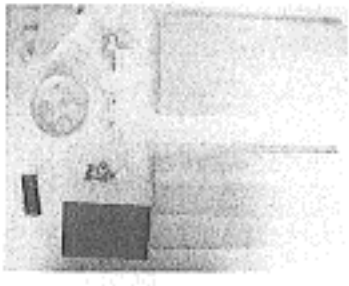
『テープカッターを作ろう』（教科書題材）では、次の点に重点を置いて指導してみました。

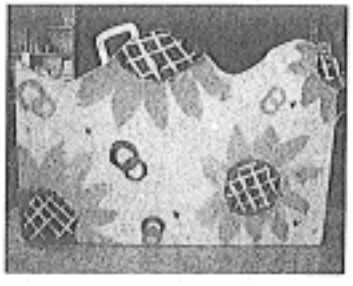
①題材提示の方法として、実際に教師が作った完成品を提示した。と同時に、その製作過程をビデオに収録し、作り方の手順を説明する際に活用した。子どもたちも、目途や見通しを持って作品づくりに取り組むことができた。
②実際に教師が作ることで、子どもたちのつまづきを予想することが可能になり、ワークシートやきめ細かなアドバイスなど、具体的な指導が可能になった。

指導計画

（1）事前に教師が参考作品として、テープカッターを作成し、その製作過程をビデオに収録する。その際に、子どもたちがつまづきそうな箇所を把握し、ワークシート・手順を図式化したもの、接着や金具の取り付け上の注意事項などを準備しておく。
（2）テープカッターの完成品を提示し、これからテープカッターを作ることを知らせる（題材の提示）。どんな材料を使うのか、必要な材料を紙に貼って提示する。
（3）テープカッターの作り方の手順を示したビデオを見る。必要な箇所で一時停止し、解説を加える。ビデオには音声は入っていない。
（4）ワークシートを配布し、側面部分のデザインを考える。テープの位置を点線で示し、糸鋸で切った際に、テープ部分がなるべく見えないようにする。下書きが終わったら、色鉛筆でワークシートに彩色する。その際、色の組み合わせを考えるようにさせる。２枚のが向き合うので、その形に注意させる。
（5）ワークシート絵を、カーボン紙を使って板に写す。
（6）糸鋸を使って、板を切る。
（7）釘やボンドで接着する前に、絵の具で彩色する。
（8）必要な部品などを取り付けたら、ボンドや釘を使って組み立てていく。
（9）最後にニスを塗って完成させる。
（10）作品を卒業作品展に展示する。

市販のセット教材


使う部品を提示する

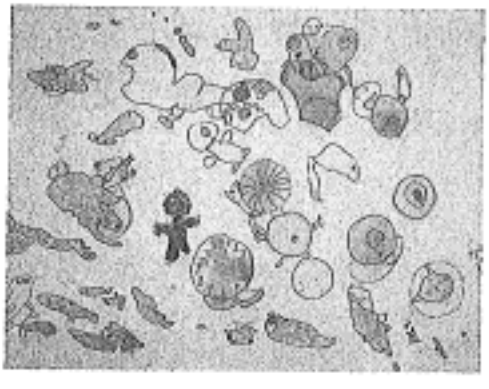

完成した作品

Ⅳ シャボン玉の実践

石教図工部会北広島実技研修会から学ぶ

紙コップの中に洗剤を入れる

シャボン玉を紙の上に置く



模様から想像を膨らませる

○活動の様子、完成した作品については、Ⅶ「作品の記録化」を参照してください。

昨年北広島の図工美術部会で実技研修会を実施しました。講師にペンテルの会社の方を招いて、クレヨンや絵の具の特性などについて説明していただきました。その中で、絵の具に台所用洗剤を混ぜて、シャボン玉にして模様をつけるという技法が紹介されました。

今回は、その技法を使って、小学校３年生を対象に新たな題材開発という視点で取り組んでみました。ちなみに教科書題材は、ぐるぐると描いた線から発想を膨らませるという内容でした。子どもたちにとっても、教師にとってもそれは魅力ある題材ではなく、思い切ってペンテルで学んだ技法を使ってみました。以下は、大まかな指導計画です。

（１）紙コップとストローを準備させる。この時は、子どもたちに内容を知らせない。何をするのかという期待感を持たせる。

（２）持ち寄った紙コップの中に水と絵の具を入れる。分量については、教師の方で指示する。紙コップの中に、洗剤を入れる。特にストローで吸い込まない等の安全面の指導を徹底する。

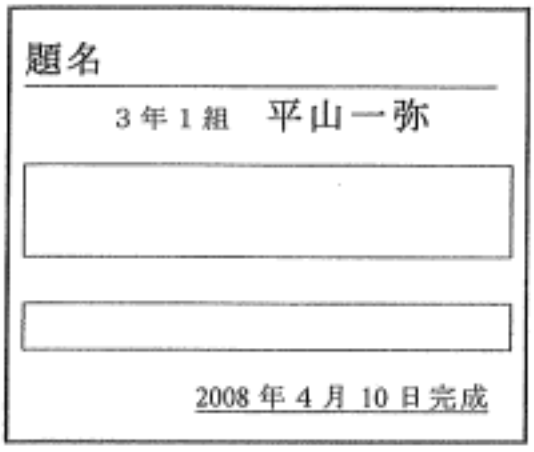
（３）シャボン玉で模様を作る方法を示し、いらない紙を使って練習する。新たな発見なども取り入れるようにする。

（４）画用紙にシャボン玉の模様を作る。１色だけではなく３色程度使う。

（５）できた模様から、想像を膨らませ、サインペンを使って、想像した世界と、そこにいる自分を描く。偶然できた模様を、ある形に見立て、上手に活用する。

（６）完成した作品をデジタルカメラとプロジェクターを使って大きく映し出す。作品の説明と、友だちの作品のよいところを見つけ合う。（鑑賞）

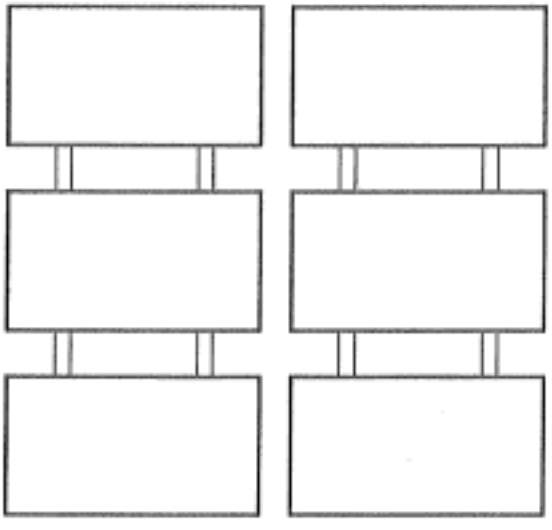
Ⅶ 作品ラベル・完成した作品の扱い
より効果的な展示の方法



□作品ラベルも、作品の一部として考える。

作品にラベルが乱雑に貼られていることがある。児童名についても、あらかじめラベルに入れておき、数枚用意しておく。ラベルは色上質紙などを使う。上段の枠の中には、「苦労したところ、うまくできたところ」などを子どもが記入する。下段には、教師のコメント、または友だちのコメントを入れる。作品ラベルを貼るスペースを事前に考慮しておく。

■完成した作品は、白い画用紙（台紙）に貼る。白い台紙に貼ることで、作品がより美しく見え、画鋲などで作品に穴が開くことを防ぐこともできる。作品ラベルを貼るスペースも確保する。作品やラベルは、面倒でも教師の手ではる。水糊を使用し、乾くまで重しをのせる。台紙になる画用紙は、できるだけ安価なものを用意する。貼る位置を決める紙を１枚用意しておく。



□作品を貼るスペースがない場合は、細長い画用紙を用意してつなぎ合わせる。同じ子の作品をつなぎ合わせてもよい。１年間の子どもたちの成長が見られるという利点もある。床のタイルの線などを利用すると、簡単に真っ直ぐにつなぐことができる。同じ色合いの作品がつながらないように配慮することも時には必要。

■１週間交代で、子どもたちの作品を１枚ずつ額に入れてあげることも、子どもの励みになる。また、額ではなくイーゼルを使って絵を立てかけておくことでも、随分と教室の雰囲気も変わる。作品を貼る場合は、凧糸などを使うと速く真っ直ぐに貼れる。

○作品ラベルや掲示した作品、イーゼルは実際に見ていただきます。

Ⅷ こんなことから始めてみませんか

終わりに・・・・

新学期、図画工作の最初はオリエンテーションから始まります。図工美術の時間が削減され、実際に作品づくりを始めても時間不足に悩むことも現実です。逆に言うと、それだけ１時間１時間が貴重になっています。

そこでオリエンテーションの時間を使って、学年の最初の図工の時間に実践しているのが、絵と文による「春と新たな決意」の作品です。時間は２時間程度。まず白い画用紙に３色程度、絵の具を使ってボカシを入れます。これもシャボン玉と同じように、意外性があり美しく仕上がります。続いて「春のイメージ」を絵で表現します。タンポポ、チューリップ、メダカ、入学式・・・・。ボカシの色との組み合わせを考えて、絵に彩色していきます。

最後に、文を入れていきます。子どもなりに、文字を入れる場所などを考え、サインペンや割り箸ペンで書いていきます。新しい学年になり、頑張りたいことを入れ、絵手紙風の作品が完成します。参観日に合わせて掲示することもタイムリーです。子どもたちの思いが絵と文を通して強く伝わってきます。３年生でも今年取り組んでみました。

最初に紹介しましたが、現場の先生方は様々なことで悩みを抱えています。しかし大切なことは、まずやってみることだと思います。色々な先生方の実践を、実際に自分でやってみることではないでしょうか。そこから何かが生まれてくるはずです。

たまには、自分で実際に作ってみる、描いてみることも大切です。子どもの視点で物を見ることができるようになり、簡単なようなことも意外に難しいということがわかります。

作品の掲示の仕方一つでも、作品は違って見えてきます。無造作に２カ所程度貼られているものと、きちんと４隅がとめられているもの。殴り書きしたような文字で書かれた、今にも落ちそうなラベル。額に作品を入れるのに要する時間は１分程度。何気ないことですが、こんなことから始めてみることが大切ではないでしょうか。

最後になりましたが、是非参考作品を保管することをお勧めします。たった１枚の作品でも子どもたちのイメージを膨らませたり、こんな作品を描いてみたいという目標になります。

提言：小学校　山　口　　浩

研究テーマ

「身近なものを見つめて（思いを込めて）」の実践から

提言の概要

６年生になって半年が過ぎ、小学校生活も残り少なくなってきた。自分の小学校生活をふり返ってみた時、楽しかったこと、うれしかったこと、がんばったことなど子ども達一人ひとりにいろいろな想いがある。「ぼくは６年間、ランドセルを使ったんだ。」「３年生のときの学芸会では、木琴をがんばったんだ。」というような、自分の想いを表現できる身近な「もの」を絵に描かせてみた。

出来上がった作品は、小学校生活の思い出になるような作品にしてあげたいということと、作品交流を通して、子ども達の心の交流が深まり、より深く友達の想いを理解し、お互いの成長を確かめ合いながら卒業の日を迎えさせたいという思いでこの題材に取り組んだ。

また、この実践は、昨年度の石教研二次集会で公開したものであり、題材を決める段階から指導案まで、多くの先生方で何度も話し合い、作り上げた題材でもある。

Ⅰ　題材との出会い

・・・・・鑑賞で導入（児童の作品を使って）

「これは、あなたたちと同じ６年生が描いたものです。」と伝え、数枚の絵を黒板に張り出す。そして、１枚ずつ見た感想を発表してもらう。はじめのうちは、「上手だ。」「本物そっくりだ。」「ていねいに描いている。」というような感想が出てきた。

発表がひと段落したところで、「なぜ、この絵をかいたのだろう。」と聞いてみる。「この人は、きっと６年間ランドセルを使ったんじゃないかな。」「音楽が好きだったんじゃないかな。」「この人は、この鉢植えの水やりをしていたのかな。」などなど、表面的なものから作者の想いに目が向き始める。そして、作者のコメントを読んで聞かせる。

そこで、「実は、これらの作品はすべて一つのテーマをもとに描かれたんだけど、どんなテーマだと思う？」と投げかけてみる。すぐに手が挙がる。「一番好きなこと。」「楽しかったこと。」「頑張ったこと。」などが出てくる。一人の子からの「思い出かなあ。」という発言がきっかけとなり、「小学校生活をふり返ってみた時に、自分にとって宝物となるもの」だということに気づく。そして、それが今回みんなの描く絵のテーマであることを伝える。

Ⅱ　対　話

・・・・・子どもの想いを受けとめる

やることがわかったら、次は何を描くかである。すぐに決まる子もいれば、迷っていて「どうしよう。」と悩んでいる子もいる。そこで、「描き始めるのは２週間後だから、それまでに考えて、決まった人は教えてください。決まらなくて困っている人は相談に来てください。」と話す。また、背景については、自分の描くものにふさわしい背景を自分で考え、決めること。想像して描いてもいいし、必要がなければ描かなくてもいいということを伝える。

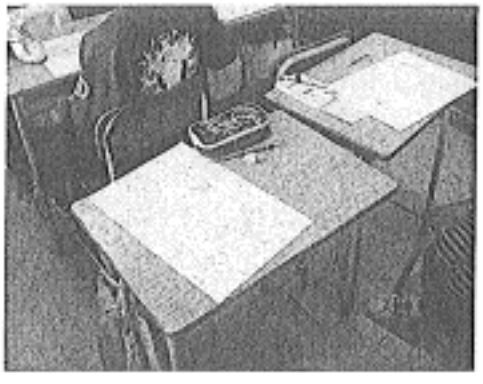
決まった子は、すぐに報告に来る。「グローブにする。」「ランドセル」。一人ひとりの話を聞きながら、「どうしてそれにしたの？」とか、「そうだね。毎日野球の練習がんばってたよね。」など、思い出話に花を咲かせる。なかなか決まらない子には、私の方から声をかけて、楽しかった行事のことや頑張ってきたことなど思い返させて、「じゃあ、これにしようかな。」とか、「あの時頑張ったからこれにする。」という感じで決まっていった。

こうやって子ども達と対話をすることにより、ものに対する想いが明確になり、作品づくりの意欲につながっていった。

Ⅲ　スペシャル・スペシャル

・・・・・特別なんだよ

描くものが決まった子ども達は、「早く描きたい。」と楽しみにしているようだった。そして、待ちに待った図工の時間が来た。私は、「これから皆さんが描く絵は、一人ひとりの想いがいっぱいつまった特別な絵です。ですから、今回は特別な紙を用意しました。」といって、みんなに紙をわたす。わたした紙は『マーメイド紙（八つ切）』。水彩に適しているかどうかは私の知識ではわからないが、画用紙よりこしがあり、表面のざらざらもあって高級そうな感じの紙である。紙を手にした瞬間、子ども達からは「わあー。」という歓声が上がる。モチベーションも上昇。



でも、そこで終わらない。今度は、「えんぴつも用意しました。１本１５０円します。」「高い！」「しかも外国製です。」「えーっ。」という雰囲気の中、青いステッドラーの２Ｂのえんぴつもわたす。「すげー！」子ども達のテンションは最高潮である。

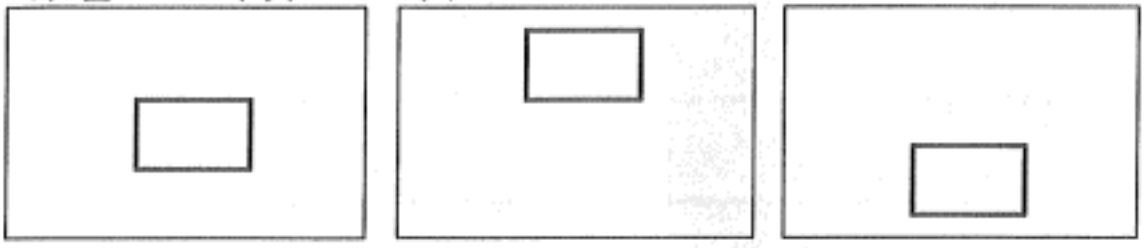
実は、公開研をするということで、図工美術部会から材料費をいただいた。そのお金ですべての用意ができた。ありがたいことです。もし予算がつかなければ、学級費では無理ですし、自腹になってしまいますね。お金のかかるサプライズは、毎度というわけにはいきません。

Ⅳ　描き始める、その前に

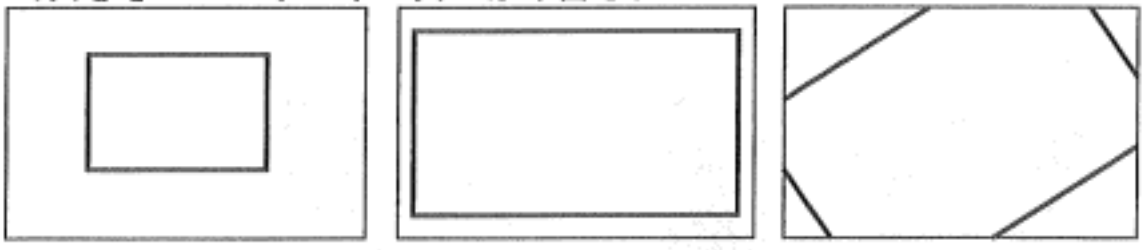
・・・・・構図について

描きたくてしょうがない子ども達を前にして、「特別な絵だから、ただ描くのではなくて、効果的に表現できるように考えて描こう。」と話す。そして、紙に描く位置、大きさ、向きを変えることにより見え方がちがうことを体験させる。それから、「自分の描こうとするものが、一番かっこよく見える構図を考えよう」と話し、構図を考えるところから始める。

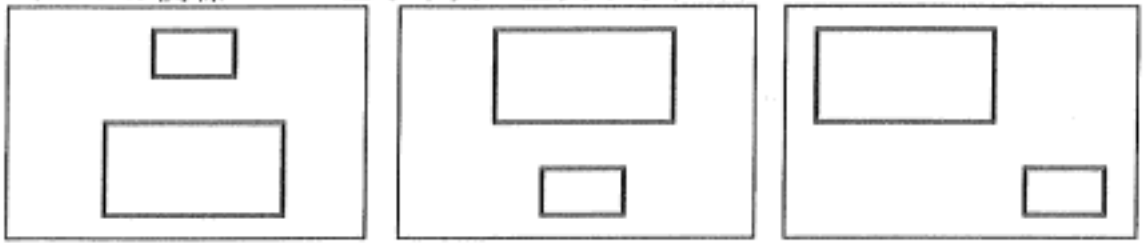
＜位置・・・中央・上・下＞



＜大きさ・・・小・中・大・はみ出し＞



＜二つの関係・・・上小下大・上大下小…＞



子ども達の反応は、位置については、「上にあるものが変、バランス悪い。」

大きさについては、紙いっぱいに描くのはきゅうくつ。はみだした方が大きく感じる。

二つの関係については、遠近感がある・安定している・バランスが悪いなどなど。

いろいろ感じてくれました。

Ⅴ　えんぴつ描き

・・・・・想いを込めて描きましょう

それでは、「想いを込めて最高の絵を描きましょう。」ということで、描き始める。バットとグローブを描く子は、二つをどう置いたらよいかいろいろ試している。リレーの鉢巻を描く子は、布の重なりやねじれをどう出すか工夫している。思い思いの場所でみんな集中して描いている。えんぴつ描き２時間目が公開授業だったので、早く終わってしまったらどうしようとちょっと心配した。

Ⅵ　見える色を描く…

・・・・・白いものは白くない

色をつける前に、「えんぴつ描きは間違ったら消して直せるけど、絵の具で描いたものは消して直すことができないからね。」と前置きしてから、２つのことを指導する。一つは『光と影』。白いタオルは白くない。教室の電気を消して、窓からの自然光の中でタオルを無造作につかんで見せる。白く光っているところ、影になって黒っぽく見えるところ、色の変わる境目など、真っ白ではないことに気づく。そのものの色を描くのではなくて、見える色を描くんだよと伝えた。

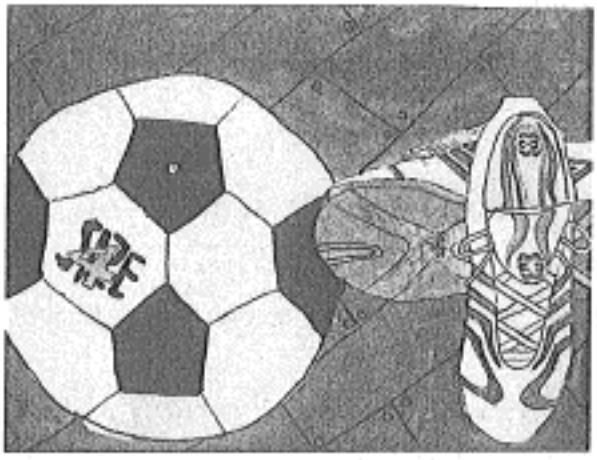
二つ目は、『水』。色を作る時、絵の具を混ぜていくと色がどんどん濁っていくから気をつけること。それと、水を加えることによって一つの色でも変化を出すことができるということを伝え、水の使い方も工夫してみようと話した。

Ⅶ 作品です

・・・・・どんな想いを感じますか。

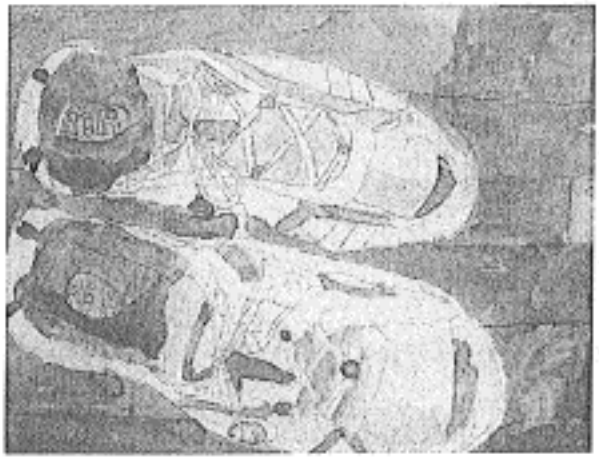
題名：相棒

これはぼくの自信作です。・・・・小学校生活６年間いっしょに学校に通ってきたので「相棒」という題名にしました。工夫したところは、光の具合、色の濃さ、立体感です。たとえば、・・・・・・・・



題名：サッカーシューズとボール

ぼくはなぜこの絵をかいたかというと、サッカーを習っていたし、友達とのボール遊びでもよく使っていたし、毎日、上靴として使っていたからです。



題名：うわぐつ

ぼくは体育の授業が好きなので、うわぐつをかきました。なので、体育館の床をバックにしてかきました。工夫したところは、うわぐつのよごれなどをかきました。

Ⅷ　自己理解・他者理解

・・・・・作品鑑賞会

今回の授業は、私の担任する６年１組だけではなく、２組も私の方で進めさせてもらった。鑑賞については、一人ひとりの想いをみんなの前で発表させたいと思い、まとめて最後にするのではなく、毎時間４～５名ずつ発表させることにした。授業の始めか終わりの１０分程度を相互鑑賞の時間にした。ところが、これは、作業時間が少なくなること、始めのうちはちゃんと聞いていても５人目の時には飽きてしまったり、毎時間やるのでマンネリ化してしまったりと大失敗だった。

そこで、２組では、全員が完成してから、まとめて行うことにした。はじめに、３人前に出て、自分の作品について発表してもらう。その発表を聞いた子は、感想を述べる。次に、グループ内で一人ずつ発表し、全員が感想をいう。最後に、全員の作品を並べ、付箋を２枚持たせて、感想を書いて貼らせた。

感想の内容は技能的なことよりも共感的な内容のものが多く、作者のコメントを読んで「へー、そうなんだ。」とつぶやくなど、友達の新たな一面に気づいたようであった。

Ⅸ　おわりに

・・・・・共同研究っていいな

今回の実践は、題材を決める段階から、教材研究、指導検討とたくさんの先生方にアイディアを出してもらい、完成したものです。自分ひとりのこれまでの実践や知識では、子ども達が満足するような実践にはならなかったと思います。

共同研究のよさは、一人ひとりの実践を共有することができるところです。私のように、実践の少ない美術が専門でない教師にとって、共同研究は多くの先生方の実践の中からエキスを吸収できる最高のチャンスでもあります。そして、普通の教科書題材を『心を育てる題材』にすることができるのです。

前にこんなのやったことあるよ。

影を意識させるといいよ。

教室の電気を消してみてごらん。

やっぱり、青いステッドラーだよね。

鉛筆は2Bがいいでしょう。

台紙は白、作品ラベルも工夫するといいよ。

図画工作科学習指導案

日　時　平成１９年１０月１９日
児　童　千歳市立末広小学校
　　６年１組　２８名
指導者　山　口　　浩

１．　題材名　「身近なものを見つめて」（絵）
　　日文５・６下１２・１３ページ

２．　題材観

６年生になって半年が過ぎ、小学校生活も残りわずかとなってきた。自分の小学校生活を振り返ってみたとき、楽しかったこと、うれしかったこと、がんばったことなど子ども達一人ひとりにいろいろな想いがあることだろう。「ぼくは６年間、ランドセルを使ったんだ。」「３年生の学芸会では、大変だったけど器楽の練習をがんばったんだ。」というような、自分の一番の想いを表現できる「もの」を絵に描いてみる。

線描きの段階では、想いを込めて一本一本の線を大切にかくよう指導する。彩色の段階では、線を生かしながら、彩色するようにさせたい。背景については、そのものに対する自分の想いが表れるように表現させたい。

そして、作品をお互い鑑賞し合い、作品への想いを交流しながら自分たちの成長を喜び合いたい。

３．　児童の実態

６年生とはいえ、幼さの残る子どもたちである。休み時間などは、みんな素直に自分の感情を表現して騒いでいるが、授業では積極的に発表する子は少なく、特に自分の考えや感想を発表することを苦手としている子は多い。

絵を描いたりものをつくったりすることが好きな子は多いが、急ぐあまり丁寧さを欠く子、大雑把な子、細かいところにこだわりすぎてなかなか作品が仕上がらない子など様々である。

この題材では、完成までの見通しを持たせながら、小学校生活の思い出になるような作品にしてあげたい。また、交流の場面では、多数の子が自分の想いや感想を発表できるよう支援していきたい。

4.　　題材の目標

○ 学校生活を振り返り、自分の想いを表現しようとする。（関心・意欲・態度）
○ 表現しようとするもののよさや魅力が伝わるように構図や色のくみあわせを工夫する。（発想や構想の能力）
○ 線をていねいにかき、線を生かすように彩色する。（創造的技能）
○ 自他の作品を鑑賞し合い、作品への想いや表現のよさなどを話し合う。（鑑賞の能力）

5.　　研究との関わり

（1）　基礎基本に基づく「題材で育てたい力」

〔関心・意欲・態度〕　…　追求する
〔発想・構想の能力〕　…　深める・見通す
〔創造的な技能〕　…　比べる・バランスをとる
〔鑑賞の能力〕　…　自己理解・他者理解

（2）　「確かな表現」に結びつく指導過程の工夫

小学校生活を振り返り自分自身を見つめなおすために、１学期に「思い出の学校」、２学期は本題材、３学期に「自分を見つめて（自画像）」というように、題材を配置した。

振り返りカードを活用して、毎時間自分のめあてを確認することや友達との交流を通して、意欲を持続させるようにした。

（3）　鑑賞活動と表現活動をどのようにかかわらせたか。

表現活動の合間に交流の時間を毎回設定し、ひとり１回は自分の作品について発表する機会を設け、自分の想いを友達に伝えることができるようにする。また、友達の発表を聞き、友達の想いを受け止めることにより、自分を見つめ直し、よりよい作品にしようとする気持ちがもてるようにする。

6.　　観点別評価の視点

＜関心・意欲・態度＞　自分の学校生活を振り返り、表現しようとする。
＜発想や構想の能力＞　表現したものの魅力が伝わるように画面構成を工夫している。
＜創造的な技能＞　線をていねいにかき、線を生かすように彩色している。
＜鑑賞の能力＞　作品を見せ合い、作品への想いや表現のよさなどについて話し合っている。

7.　　題材の指導計画（６時間扱い）

段　　階	学習活動	関連する基礎基本事項	評　　価
発想・構想 （１時間）	・小学校生活を振り返り、楽しかったことやうれしかったこと、がんばったことなどの交流をする。 ・その交流を通して、一番心に残っていることを考え、その想いを伝えるために描く「もの」を決めていく。	〔関心意欲態度〕 ・追求する	○学校生活を振り返り、表現するものを決めようとしている。
休み時間などを利用して、教師と子どもが対話しながら表現するものを決定していく。			
表　　現 ＜下描き＞ （２時間） 本時	・自分の想いが伝わるような構図を考える。 ・想いを込めて、ていねいに線描きする。 ・自分の思いが一番表れる背景を考えてかく。 ◎線描きの苦労や工夫、自分の思いなどを交流する。	〔発想・構想の能力〕 ・深める・見通す 〔創造的な技能〕 ・比べる ・バランスをとる 〔鑑賞の能力〕 ・自己理解・他者理解	○自分の想いが伝わるように画面構成を工夫している。 ○想いを込めてていねいに描こうとしている。 ○作品を見せ合い、作品への想いや表現のよさなどについて話し合っている。
＜彩色＞ （２時間）	・線を生かすように、彩色する。 ◎彩色の苦労や工夫、自分の想い　などを交流する。	〔創造的な技能〕 ・比べる ・バランスをとる 〔鑑賞の能力〕 ・自己理解・他者理解	○線描きを生かすように彩色している。 ○作品を見せ合い、作品への想いや表現のよさなどについて話し合っている。
鑑　　賞 （１時間）	・作品票に自分の想いや工夫を記入する。 ◎自分の作品について語り、感想を交流する。	〔鑑賞の能力〕 ・自己理解・他者理解	○作品を見せ合い、作品への想いや表現のよさなどについて話し合っている。

8.　　本時の展開（3／6時間目）

(ア)　本時の目標

○ 想いを込めて、ていねいにかくことができる。

○ 線描きの苦労や工夫、自分の想いなどを交流することができる。

(イ)　本時の展開

段階	活動の内容	教師の働きかけ	留意点
つかむ	1．前時の学習を振り返る。 2．本時の学習内容を確認する。 想いを込めて、かきあげよう。 ・自分のめあてを確かめる。	○前時の活動を振り返らせる。 ・描くものをきめたこと ・構図を決めたこと。 ・ていねいに描くこと。 ○学習のめあてを発表させる。（2～3名発表）	・本時も前時と同じように描くこと、そして、線描きの完成を目指すことを意識づける。 ・振り返りカードの活用
あらわす	3．完成をめざして、線描きを進める。	○作品に込めた想いを意識させる。 ・よく見て、ていねいに ・背景もかきこませる。	C：雑にならないようゆっくりかくようにさせる。
まとめる	4．交流をする。 ・自分の作品について発表（3～4名） ・発表を聞いての感想 5．今日の学習を振り返る 6．次時学習内容を知る	○作品交流 ・作品にこめた想い ・構図について ・表現の工夫 ・伝わってきたこと ・応援メッセージ ○振り返りカードに記入させる。 ・今日のよかったこと ・次、がんばること ○彩色することを伝える。	・振り返りカードの活用

9.　　本時の評価

○ 想いを込めてかくことができたか。

○ 自分（相手）の想いを伝える（感じる）ことができたか。

提言：小学校　　宮田　珠世

研究テーマ

「もっとこうしたい！」
～子どもの追求する姿が生まれる授業づくり～

提言の概要

「もっと～したい」という言葉は、子どもの中に「こだわり」があるからこそ生まれる言葉である。自分のイメージをこの色や形で表現したい、自分の作品を通してもっとイメージを伝えたい、どうしてもこの動きを表したい・・・そのような「こだわり」は自分らしいやり方でつくりだそうとする追求の姿を生むと共に、子どもの造形活動をより創造的なものへと高める原動力となる。また、試行錯誤を繰り返しながら追求する姿があってこそ、子どもの造形的な能力が高められると共に、自己実現の満足感や安心感、よさや美しさなどの価値に気づく感覚や感性も高められていくと考える。

では、どのようにすると子どもの中に「こだわり」や追求が生まれるのか。本提言では表現と鑑賞、２つの題材を取り上げながら考察していきたい。

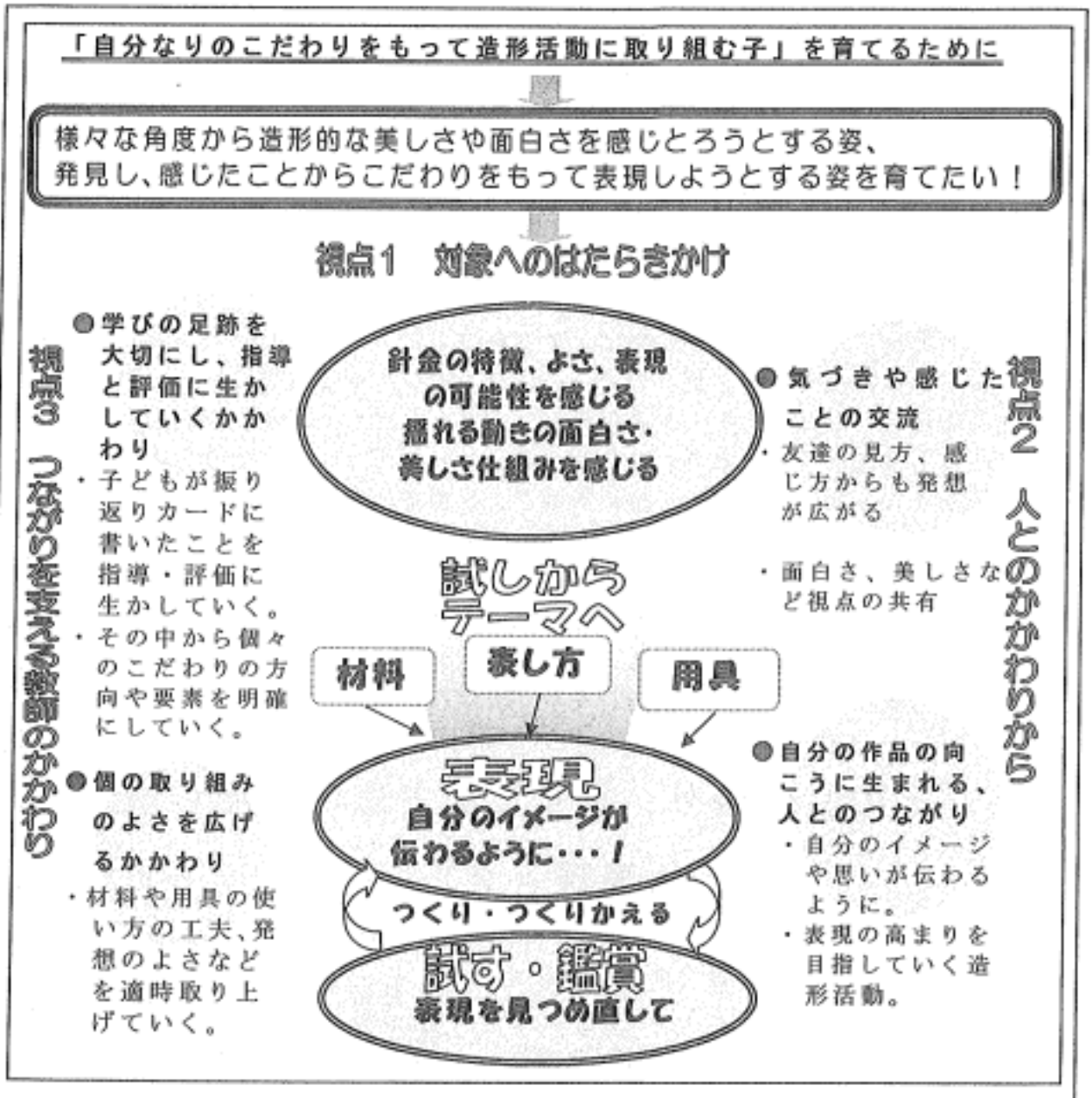
１．「もの」に浸り、試すことで思いを膨らます
～Ａ表現（２）「オットット」～

本題材は、台上で支持点（足）を支えにしてゆらゆら揺れる仕組みからイメージを広げ、思いついたものをもとに材料や形などを工夫して楽しいおもちゃをつくる活動である。

一本の針金と支点になるもの。仕組みそのものはとても簡単だが、揺れ方、揺れるものの表し方、それにあった支えの形や材料の工夫など、子どもの発想や工夫の仕方によって様々な表現が期待できる題材といえる。自由自在に変形可能な針金という素材も子どもの意欲を刺激するに十分であろう。

子どもの中にこだわりを生むためには、まず子どもの心を揺らし、動かすことが必要と考える。子どもの感性が十分に働いている時、そこには多くの気付きや感動が生

針金を何度も動かしながら見つめる目は真剣、かつ楽しさいっぱい。



まれれ、つぶやきや友達への語りかけ、真剣なまなざしとなって表れてくる。

そこで本題材の１時間目に針金を使って動きを試す活動を取り入れた。１本の針金を少し変形させペットボトルのキャップにのせてみる。ほんの少し手を加えるだけで、予想外の動きをみせる針金。子どもたちの顔が輝く一瞬。「ここを曲げると今度はどう動くかな？」「もっとゆらゆらさせてみたいな」「君のおもしろいね！」・・・針金の揺れる動きに面白さや楽しさを感じ始めると共に、形や動きに対する子どもの感性がはたらき始める。さらに針金を変形させてみたり、支点になるものを変えてみたり・・・そのうちに針金の動きを何かの動きに見立てながら意図的に変形させる子どもの姿や、複数の針金を組み合わせ動きを何度も試してみる姿など、思い思いに活動を広げる姿や追求する姿が見られ始めた。

ひげの動きがおもしろい作品。

その様にじっくりと「もの」に浸り、対話しながら様々なことを試していく内に、子どもの活動に少しずつ方向性が生まれ、表したいイメージやこだわりへとつながっていく。発想・構想の過程で苦手意識が表れやすい小学校高学年だからこそ、時数的に難しい面もあるが、このように思いのままに「もの」にひたり、感性が揺さぶられるような題材との出会いを大事にしたいと考える。

また、試すことは鑑賞と一体となって、題材との出会いだけではなく、自分の表現をつくり上げるまで軸となる活動でもある。特に本題材のような動きのおもしろさや楽しさをキーワードとするような造形活動では、自分のイメージしている動きを表していくために何度も試しながらその動きを見つめ、次の活動へとつなげていくことになる。また、その繰り返しこそが「もっと～したい」という子どものこだわりをもっと強くし、なおかつ「育みたい力」を育んでいくために大切な過程であると考える。

特に本題材で見られたのは１３の「育みたい力」のうち、「つなげる」「広げる」「深める」「比べる」「選び、決める」「バランスをとる」「使う」「感じ取る」「自己理解」「他者理解」である。自分のイメージやこだわりを表現するために、その都度材料や道具を自分で試しながら選択する姿、少しはなれた視点から何度も動きを見つめなおす姿、動きの中から美しさやおもしろさを感じとっている姿など、一人ひとりが力を発揮しているのを感じることができた。中には自分の「技」をつくりだす場面にも立ち会うことができた。子どもと「もの」との距離をより近くすることで「あのね、もっとこうしたいから、～しているんだ」という言葉が全員の子どもから聞くことができたと感じている。

①渦巻状の針金が回る動きの美しさから「竜巻」を表現しようとしたHさん。

②ペンチや指先の使い方に一工夫

③2種類の色・大きさの異なる針金を組み合わせた。

④最後まで青い針金の小さな動きにこだわり続け完成した作品。

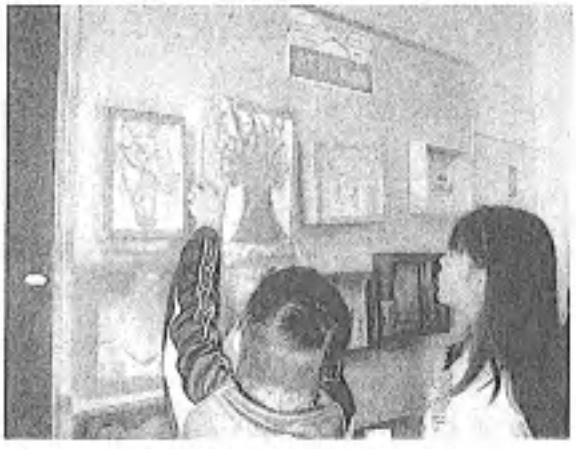
2．鑑賞を通して「こだわり」をもたせる！

～Ａ表現・Ｂ鑑賞「芸術家の心を感じて」～

	学習活動と予想される子どもの反応・考え方	留意点
1 2	美術館の学芸員さんと一緒に色々な作品を見てみよう！ それぞれの作品からどんなことを感じるだろう？ 一つの作品の中にストーリーがあるなんて面白いな。 色と様子から季節がよくわかるよ。 同じ季節でも表現が異なって面白いな。 隠れているものを探すのが面白いよ！ 色が少ないのに作品がこんなに目立つのは・・？ 作者はどんな思いを伝えたかったの？ このイメージや表現が好きだなあ。 それぞれの作品に作った人の思いやイメージがあるし、表現の仕方も色々あって面白いな！もっと色々な作品を見てみたいな！	＊教室での鑑賞。 ・作品から感じたこと ・素敵、面白いなと思う表現 ・作品が表している季節など を話し合いながらそのテーマや表現のよさ、特徴を感じさせていく。
3 4	美術館の「Born in Hokkaido 展」で本物の作品を見てみよう！ 抽象的な絵を友達と見ると色々な見方があって面白いね。 ぼくもこんな表し方をしてみたいなあ・・・ 丸い形をいくつも重ねるだけでこんなに面白いよ！ お気に入りの作品や表現を集めて「My Collection Book」が作れ	＊美術館での鑑賞。 様々な作品を自由に見ながら、自分のお気に入りの表現や作品を見つけさせる。 気に入った作品をデジカメで撮影し、それを使って、「My Collection Book」をまとめさせていく。
5 6 ～ 9	自分たちが表したい『北海道』ってどんなものがあるか考えよう！ 鑑賞したことを生かして、自分たちの「アートな四季」を表すには？ 線や形 イメージに合った線は・・・。 材料・用具 描画材を工夫したり、他の材料も合わせて 色 冬でも色々な色があるよ テーマ テーマが見る人に伝わるように・・・。 試す・つくる 自分のアートな『四季』に向かって みる（鑑賞） 箱の中に作品を入れてみたらとても素敵な感じにみえるね。 もう一度お気に入りの作品を見て表し方を参考に！ 作品を一度飾ってみてもらおう！友達はどう感じてくれるかな？ 自分のイメージする「アートな四季」をすてきに表現することができたよ！	＊これまでの経験と鑑賞したことを生かして表現を行わせていく。描画材などの材料は限定せず、一人一人の思いにあわせて必要な材料を選択できるようにしていく。 ＊表現活動の過程で友達同士の交流を促していく。その中で感じたことや気づいたことを互いに伝え合うことで友達の表し方に共感したり見方を広げていけるようにしていく。
10	自分の完成した作品も入れて「My Collection Book」を完成させよう！	＊「My Collection Book」に自分のイメージや表し方の発想・構想なども記録させながら、子どもの工夫を造形的な要素とつなげて考えていけるようにアドバイスを行う。

美術館での鑑賞

お気に入りの表現を試して比べる

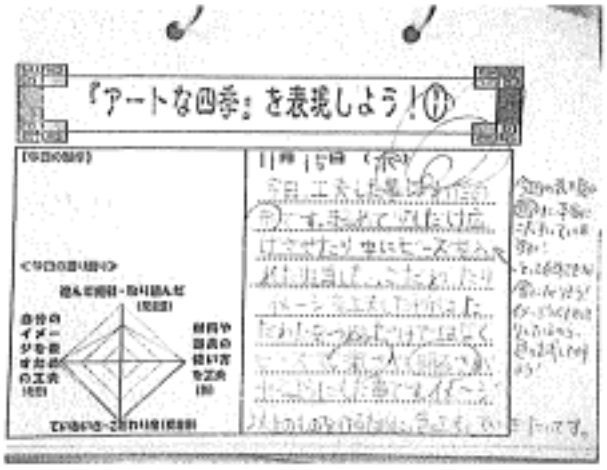


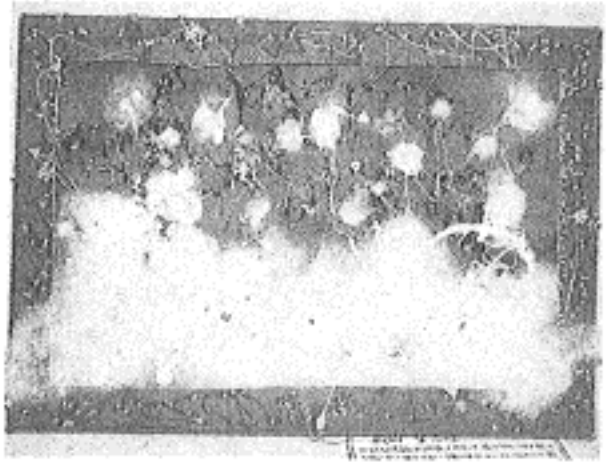
おためし美術館での交流（上・下）

本題材は昨年、北海道立近代美術館で開催された「Ｂｏｒｎ　ｉｎ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ～大地に実る、人とアート～」展との連携授業である。美術館を訪れ、多くの作品に自分の目と心で直接触れるという活動は子供たちのインスピレーションを刺激し、感性をより豊かに育む機会となった。何より、自分の作品も一緒に展示されることで、自分も一人の小さな芸術家としてこだわりをもって表現しながら、自分と美術とのつながりを感じさせていきたいという願いをもって本題材に取り組んでみた。

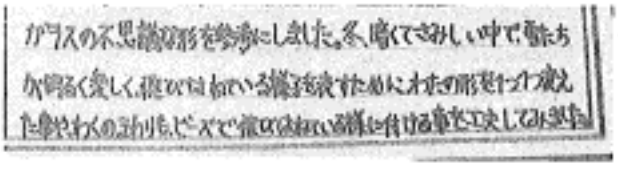
この学習は多くの作品を鑑賞し感じたことから発想を広げて自分の表現につなげていく。そのためスタートとなる鑑賞活動をどのように行わせていくかが重要である。そこで、多くの作品の中から好きな表現や作品を集めて「マイ・コレクション」をつくるというテーマを設定し、子供が能動的に鑑賞を行えるようにしていった。子供は自分の感性を発揮して色々な表現を比べたり、作家の思いや意図を感じて作品と語り合ったりしながら、デジカメでお気に入りの作品を撮影しまとめていく。多くの作品の中からなぜ自分はその作品を選んだのか、どのような表現に心惹かれたのかを考えさせていくことで、テーマや色彩、形の面白さなど自分なりの視点を明確にさせ、自分の表現へつないでいく糸口としていくことができた。

また、自分の好きな季節がどのようなイメージか、ということによって表現の仕方も個々に異なってくる。そこで描画材や材料、表現の方法を自分で選択し取り組んでいくようにする。どのようにしたら自分のイメージを表すことができるか、これまでの図工の学習で経験してきたことを生かし色々な表現を試してみることも大切だと考える。その過程を通して自分なりのこだわりがある表現を作り出せるようにしていくことが大事である。





Mさんの「マイ・コレクション・ノート」から。
鑑賞して感じたガラスの美しさや神秘さを自分の表現にいかそうというこだわりをもち続けて取り組んだ。



自分が鑑賞者となって作品を見た後は、自分の作品を制作し展示する活動へと移っていく。つまり、今度は自分の作品を多くの鑑賞者に見てもらうことになる。そこで、作品を見てくれる人に自分のイメージやメッセージが伝わるか、ということを意識させながら表現活動に向かえるようにしていきたい。そのために、表現活動を行っている途中で友達に作品を見てもらいながら感想を聞いてみたり、時には少し距離を置いて自分で作品を見たりしながら、自分の表現を見つめなおし、より明確なこだわりをもって表現の高まりを目指していけるようにしたいと考えた。

そこで図工室に「おためし美術館コーナー」を設け、自由に互いの作品を展示し見合う場とした。その場をライトで照らすことによって、本物の美術館とまではいかなくとも十分な臨場感を演出することができる。はじめは躊躇していた子どもたちだったが、次第に作品を通して進んで語り合うようになり、互いにアドバイスしあう姿も見られるようになった。そのような「ひと」とのかかわりの中で、「もっとイメージがしっかりと伝わるようにしたい！」と子どもたちのこだわりが強くなっていったのも十分に感じられた。

子どもたちもこの学習自体を「個性的でアートな四季美術館」と名づけ、どの子も自分が小さな芸術家になった気分で取り組み、出来上がった作品にかなり満足感を覚えていたようだ。

提言：小学校　岩崎愛彦

研究テーマ

題材、素材、人との出会いを大切にした授業づくり
～子ども一人一人の思いを引き出し、受信するための取組～

提言の概要

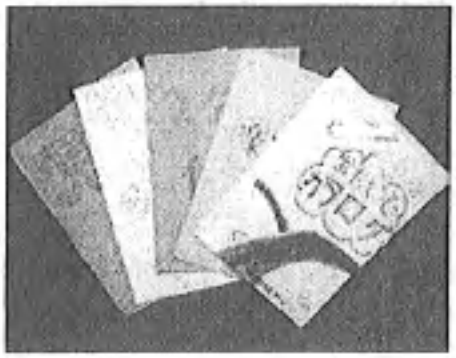
題材との出会いはとても大切である。ゆえに、私たち教師は導入を工夫し、題材のよさを実感できるような授業を目指して取り組んでいるところである。

本提言は、題材の振り返り活動を中心に以下の３つの活動の在り方を考察する。

(1) 導入時の工夫：素材に対する既往のイメージの破壊や素材体験による知的好奇心をゆさぶる活動や場の設定。

(2) 「相互鑑賞活動」：一人一人が作品をとおして、素材の魅力に迫ったり、仲間と語り合ったりする活動。自他や作品のよさに改めて気づいていく場としての授業の在り方を考える。

(3) 「作品カタログ」：題材や一年間の学びを振り返り、そこに込められた想いを教師としていかに受信するかを模索した具体的な実践。



以上の点について、多くの方々に様々な視点からご意見をいただき、ともに深めていきたい。また、参加された皆さんの明日からの授業実践のために、少しでも参考になれば幸いと考える。

Ⅰ　導入の工夫

……どんな演出をする？（小・中学校の実践から）

【小学校での実践】

左の写真は、小学校３年生「ねん土でお話」の導入場面である。これまで他の題材で使用してきた油粘土ではなく、初めて土粘土を扱った。その際、まず油粘土の触感やイメージを十分に想起させ、焦らすことにより、土粘土に初めて触れた瞬間の実感（感触・気持ち）を強調した。

見て・さわって・感動して　～自分の感覚を信じて（五感を働かせて）～

初めて触った手触りだけでなく、握ったり丸めたりと一応の作業をする中で、堅さ、色、温度、触感、臭いなどの感覚を働かせて、素材としての土粘土を徐々に身近なものにしていく。それによって、子どもが持つ作品へのイメージ、構想の広がりや主題への想いの強まりが進み、制作の基盤となっていく。

さわった感触について、子どもたちは持てる限りの言葉で表現する。同じような感覚であっても、個々に話す言葉が微妙に異なり、相互に享受する意識が感動体験の共感を生む。感動体験をした子どもたちは、どんな無口な子でも、語らずにはいられなくなる。思い思いの言葉でいっぱいのひとときとなる。

【中学校での実践】

中学校１年生ドライポイント「自我像（自分の内面を表現）」の導入で、古い版を利用した「刷り」の体験をした。小学校で経験した「木版画」とは、逆となる凹版画のイメージを実感できる。拭き取ったはずのインクが刷り紙に印刷される不思議さが知的好奇心をくすぐる。プレス機を通った後の絵を見た瞬間の感動の声はとても印象的であった。

感動体験を大切に（制作への意欲化）

数名が同時に行うことで、互いの瞬間の気持ちを自然に表すことができ、共感する場をつくることができた。気持ちをあまり表面に出したがらない子どもであっても、周囲の仲間も同じような反応をしていることで、安心して感動を態度に表すことができた。感動を共感することにより、感動が強まる面もある。

子どもたちの心を揺さぶる実体験（感動体験）は、制作のイメージを持ちやすくし、見通しを持った計画的な制作ができた。そしてさらに、自分の作品で同じ感動をしたいという意欲も高まる。

制作過程を説明するよりも、実体験からのイメージができた方が、刷りを意識した版づくりができ、でき上がりを楽しみにした制作が進められた。

【育みたい力】とのかかわり

図工の導入で最も大切にするのは、興味・関心・意欲である。題材に対してどれだけの関心を抱き、制作したいという欲求を強めるかは、子どもたちの**「楽しむ」**気持ちや**「追求する」**意識をもたらす大切なものである。制作活動や交流活動が、子どもたちにとって意味あるものとするには、**「見通し」**を持ち、一人一人の「つくりたい」「交流したい」という欲求なしにはあり得ない。したがって、導入の効果的な仕掛けがとても大切であることは当然である。作品の主題が自分自身を見つめるものであれば、自己反省や自己陶酔できる時間を十分に保障する。また、想像力を働かせるのであれば、イメージを広げるウォーミングアップ的な活動を取り入れることもできる。感動体験する場合は焦らしたり、逆に全く自由に素材をさわってみたりと個々の題材や素材、子どもたちと題材との距離によって出会い方を工夫することができる。そして、それまで学んできたことを**「つなげる」**ために重要な時間として大切にすることができる。

Ⅲ 相互鑑賞活動

～ワークショップ、構成的グループエンカウンター的活動の導入～

一見「絵を見る」よりも「友達と交流する（かかわる）」ことを目的としたものに見える。交流の中に作品が時折見え隠れする程度ではあるが、子どもの心には作品が徐々に大きな存在となるように仕掛けていく。この活動は、題材終了時の相互鑑賞として行うことが主であるが、制作過程で効果的に取り入れることもできる。子どもたち一人一人の「早くつくりたい」「もっとつくりたい」気持ちを抑えてでも、取り入れる価値があると考える。結果的に自ら作品をよりよくしようという作品づくりと作品鑑賞の価値基準の向上に役立ち、かつ他者を理解し、自分自身を見つめる意識を高めることができる。

1．じゃんけんインタビュー

じゃんけんに勝ったら相手にインタビューができるという活動である。ここでは、質問する方が何について問うのかが重要になる。作品の中心（主題）に迫れるように、また、題材によっては、色、形、あるいは想像したもの、発想したきっかけなどの観点について、活動前に全体で十分確認することも必要である。

2．ざいりょうビンゴ

３×３のマスに題材にかかわる造形要素を記入し、ビンゴゲームを行う。観点をしぼって行うことができ、題材の目標がより明確になる。じゃんけんで勝つと質問でき、ゲーム感覚で楽しさも強まるし、自然に子ども同士や作品とのつながりが深まるようになる。質問の後に、必ず作品を見て話す機会を取り入れる。

3．なりきりプレゼンテーション

友達の作品の作者になって、その魅力を語る活動である。突然割り当てられた作品について、その場で考え、作者になりきって発表する。自信のない子も堂々と話すことができ、本当の作者も聴衆に入ることになっている。さらに、後半の質問タイムでは、よさについて確かめ合うことができる。本人の意図していなかった主題、見方などを再発見でき、予想外にほめられることで自分の作品に自信を持つこともできる。

4．不思議な生き物動物園

小学校３年生、紙版画でのコラージュ作品「広がれ生き物ワールド」での鑑賞場面である。体育館の思い思いの場に作品を展示し、描き表した生き物の生活の仕方や存在感を強調する。跳び箱の中に入れて、「危険な動物なので注意してください。」と言ったり、「空を飛ぶので高いところに展示したい。」と言ったり、一人一人の作品のイメージをさらに広げることができた。互いにコメントカードでよさに気づいたことをコメントしたり、感謝をカードで表したりという交流もできた。

5．いいとこよせがき

どの題材でも実施が可能である。机の上に作品とＡ３の紙を置き、中央には作品のタイトルと作者の名前を書く。１５～２０分間で、できるだけ多くの作品を回り、よい点を見つけて寄せ書きするようにコメントを記述する。その際、隣の席の人に最初に書いてから始め、コメントした人数を自慢するなどのルールを設定すると、全員がコメントをもらって、楽しく、期待も膨らむ活動とすることができる。

6．おもしろゲーム屋さん

小学校４年生「コロコロコロガラート」での実践である。ゲームを作成したことから、ゲーム屋さんを開き、お客さんを招く。各班で１名が店を、他は客として動き回る。学級内で使えるお金をつくり、時間内で思う存分楽しむことができる。さらに、３の「なりきりプレゼンテーション」的に実施することで、ゲームのおもしろさや工夫を語り合うこともでき、作品のよさをより強く確かめることができた。

7．千小Ｆ１グランプリ

小学校３年生「風パワー全開！」で風の力で動く車を制作し、その車を体育館で走らせる。一定の距離で速さを比べたり、細かなレース内容を子どもたちに企画させたりすることもできる。教師が見本につくった車と優勝児童との決勝戦という企画も大いに盛り上がった。なぜ走るのか、どこを工夫すればよく走るのかについて、改めて考えることができた。

8．作品テレパシーゲーム

どの題材でも実施が可能である。作品の特徴を確認した後、ペアを組む。じゃんけんでテレパシーを送る側と受け取る側とに分かれて背中合わせになる。まず送り手が１分間その特徴を思い浮かべ、背中越しに思ったことを送ろうとする。同時に受け手はどんなイメージが送られたかを想像しながら受け止めようとする。この活動の中で、相手の趣向や考え方などを深く考え、とらえようとすることで相互理解が深まる。結果的に作品のよさについても考えることができ、受容する集団の雰囲気の中で相互鑑賞活動をつくりあげることができる。

9．発見自慢大会

どの題材でも実施可能である。制作の中間交流で用いるのが効果的である。じゃんけんで勝った子が、相手の作品のところへ行き、その作品のよさを一定時間自慢し続けるというものである。たくさんほめる点を見つけようとすることで、制作上の大切なポイントを見つけたり、自分の作品に生かすべき方法を見つけたりすることができる。基本的にほめ合う活動なので、互いに気分がよく、意欲化にもつながる。

【育みたい力】とのかかわり

上記の活動において最も重視されるのは、**「楽しむ」**ことである。作品とかかわる「活動が楽しい」という気持ちの積み重ねが、いつしか「作品にふれることが楽しい」に変化するのである。そして、題材によっては、表現の工夫や構想面にかかわる部分で、考えやイメージを**「広げ」**たり、**「深め」**たりすることにつながる。また、題材の中心的な価値を発見・獲得することにより、他の題材のよさにつなげることも可能となる。作品のよさを感じ取り、それにかかわった自分を見つめることで**「自己理解」**が可能となり、この活動でかかわり合った友達に対しては**「他者理解」**を強めることができる。さらにこれらの活動をとおして、制作過程や価値葛藤の様子を頭の中で再現し、**「使った」**技法や**「比べて」**発見したことなどを再認識することができる。鑑賞の活動のはずが、子どもたちの頭の中では表現過程が再現され、想いや心境の変化なども改めて**「感じる」**ことができるというものである。

Ⅲ 作品カタログづくり

～想いを実感……教師の受信～

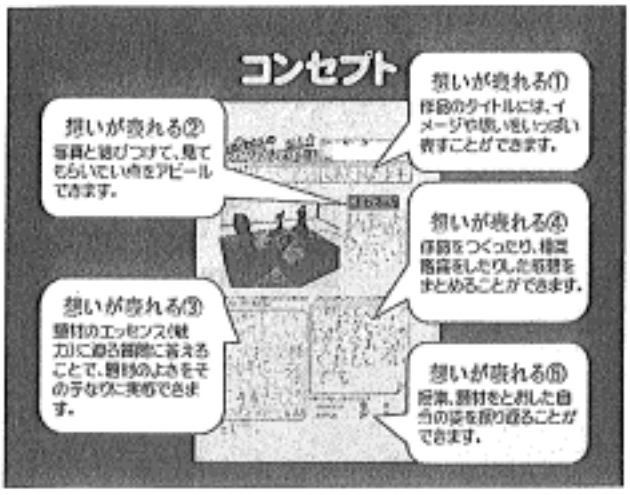
1．ねらい

作品への愛着をさらに強めていって欲しいという教師の願いと、一生懸命つくった作品をいつまでも残してあげたいという気持ちから、次の４つのねらいをもって、作品カタログの作成を計画した。

・子どもたちの作品を写真で残し、題材、そして一年間を振り返る。
・子どもたちの制作への想いを記録し、作品の価値を再確認する。
・完成後（鑑賞後）に子どもたちが感じたことを記録する。
・作品には作者の想いがこもっていることを発見・自覚し、一層愛着をもつ。

頑張るから愛着が持てる。だから次の題材でも愛着を持てるように頑張るという相乗効果があると考えられる。一生懸命頑張れる教科だから「好き」になれるということである。

2．レイアウト＆コンセプト



「授業に役立つ技法ＤＶＤ」より

記述内容を考える際、教師としてはできるだけたくさん書いて欲しいという願いはある。しかし、授業の中で、短時間で書くことには限界があるため、観点をしぼって記述しやすいものにした。レイアウトに関するコンセプトは以下の５点である。

①タイトル
②作品アピール
③題材の魅力と作者の想い
④感想
⑤自己評価

また記述する際には、相互鑑賞の充実した活動を生かすことも大切である。

3．記述内容の詳細

(1) タイトル

タイトルを考えることを楽しむ中で、自分の作品のイメージや制作意図などを振り返ることができる。自分のこれまでの活動を振り返ることで、作品に込められた「想い」を自覚し、作品のよさを再確認することができる。

タイトルによって、作品の中にある構成要素を生き生きとさせ、表現の楽しさを実感できる。

(2) 作品アピール

作品の写真と結びつけて、どこをどのように見てほしいのか、どの点を楽しんでほしいのかという作者の想いを受け止めることができる。取組の初めは「全部を見て下さい。」と記述する子もいるが、繰り返す中で、見る点が具体化されてくる。「どこを」から「どのように」と変化していく点がとても興味深い。

(3) 題材の魅力と作者の想い

題材のエッセンス（魅力）は何なのかを授業者が自覚できる大切なポイントと考える。この質問項目はぜひ吟味して行いたい。例えば「色の不思議」にこだわるものなのか、「素材の楽しさ」にこだわるものなのかなど、より具体的に、かつ絞り込んでおくことができる。その結果、教師が題材の指導の重点を再確認でき、子どもたちの学習も焦点化されることになる。

子どもたちは、制作の中での工夫や考えたことなど、題材に触れた経験をそのまま文字に表すことができる。何をしたのか、そしてそれがどのような効果をもたらしたのかなど、記述内容が作品の「よさ」に直接結びつくものとなる。そして、各題材での「学び」を実感することとなり、いわゆる「確かな学び」への手助けとなる。

(4) 感想		制作を終えて、また鑑賞活動を終えての率直な感想を記述する。このことにより、題材の魅力と子どもの情意面とがどのように結びついたのか、また題材に触れた「感動」が、どの程度のものであったのかを見取ることができる。 制作した意図と異なる点を相互鑑賞で指摘された場合でも、自分にとっての新たな発見として受け止め、作品への愛着を強めた記述も少なくない。
(5) 自己評価		題材における学習事項がしぼられることにより、「わかった・できた」を実感しやすくなる。その結果、自己評価として「わかった・できた」を振り返ることができる。「題材のエッセンス」とのつながりを大切にし、情意面を受け止めてあげたい事項である。 満足感は、表現にとってとても大切である。しかし、限られた時間の中での制作ではうまくいかない場合も少なくない。しかし、相互鑑賞活動でよい点を指摘してもらうことにより、失敗した（うまくいかなかった）と思っている作品に対しても、「よさ」を感じ、愛着をもつことができる。満足感と作品への愛着とは密接に結びついていることがわかる。
4．記述する順序から受信できること	(1) タイトルから書く子ども	作品の主題（中心）が明確なため、それを一言で簡単にまとめることができる。導入段階からイメージが一貫している子に多い。
	(2) 作品アピールから書く子ども	自分の作品に大方満足しており、多くの人に見て欲しいという欲求が高まっている。作品への愛着も高まっている。
	(3) 題材のエッセンスの部分から書く子ども	題材をとおしての学習を振り返ることができ、学びの自覚がなされている。制作過程での熱心な工夫、他児童との交流からの発見、学び取った実感を持った子に多い。
	(4) 感想から書く子ども	制作、あるいは相互鑑賞をとおして満足感、充実感を持つことができている。またさらに表現したいという欲求が高まっている。作品をじっくりと見つめる意識が高まり、他の児童のよさをも発見できる子に多い。
	(5) 自己評価から書く子ども	細かい事は色々あるが、まとめていうと満足（不満）あるいはできた・わかった（できなかった、わからなかった）と簡潔に言える。物事の印象に左右される子に多く、表現段階と相互鑑賞活動との気持ちの比較をするとどの段階で満足できたかをとらえることができる。

5．展示・冊子　一年間一生懸命頑張ってきた子どもたちにとって、年度末に図工に対する自分の意識を振り返る機会は大切である。その際、どんな作品をつくったのか、その時はどのような想いをこめていたのかなどを思い返したり、制作時のエピソードなどを語り合ったりとじっくり振り返ることができる。そこで、一人一人がすべての題材のカタログをまとめ、さらに色画用紙で表紙をつけて冊子をつくる活動を取り入れる。

粘土や工作など、長期間の保存が難しい作品であっても、写真でしっかりと残せるため、大小関係なくすべての作品を残すことができる。そして、この冊子そのものが思い出の品となる。

できあがった冊子は家庭に持ち帰る。その際、保護者の方から喜びの声を多数いただいた。子どもたちが喜ぶことは、保護者にとっても喜びである。作品を上手下手でしか見ることができない大人が多い中、自分の子どもがこれだけの想いでつくったのかということに気づき、少しずつ見方を変えていってもらえたらと考えている。

6．教師のコメント

子どもたちの頑張りに対して、題材ごとにコメントをしてあげたい。しかし、題材ごとに、全員にコメントを記述することは、全教科を担当する小学校の担任としてはかなり厳しい状況である。そこで、一年を通じて、特に目立った（頑張っていた）題材を中心にコメントをまとめ、カタログをまとめる際に、添付するようにした。

子どもたちにとって、先生がどのような見方をしてくれたのかということはとても気になるし、励みにもなる。授業の中でのＫＲはとても大切であるし、作品交流に教師が積極的に参加することも大切である。何より日常的に作品や頑張りについて子ども同士、子どもと教師とが自然に語り合うことができる関係をつくることも大切であろう。次の題材、学年が楽しみになる基盤づくりとして、コメントが一役を担うように工夫したい。

7．授業における展開例（1時間）

段	学習活動の内容	教師の働きかけや支援	留意点・備考
つかむ	1　お話や作品をつくる中で気づいたことや苦労したこと、工夫したことなどを発表することができる。 ・お話について ・ねん土の制作について	1　苦労したり工夫したりしたことを発表して、作品を観るポイントを見つけよう。 ・おもしろかったこと、うまくいったこと、友達のまねをしたことなど自分がやってみたことを大切にする。	・お話のイメージの広がりや展開のおもしろさなどにも着目できるようにする。
	友達の作品からねん土のおもしろさやお話のおもしろさを見つけよう。		
かんじる・あらわす	2　友達になりきってねん土作品について、そのよさや工夫したこと、お話にかかわらせて大切なところなどを自分の考えから発表することができる。 ・○○のような主人公が……のようなことをするお話。特にその気持ちを表しているのがこの△△なところです。 ・主人公がはっきりとわかるように大きくつくることができた。 ・ねん土べらでなでるとつるつるしたよ。 ・お話に合わせて主人公が作品の中で移動できるようにしてみたよ。 ・ふたをしたので見えないけど、中には○○がかくれているんだよ。	2　友達になりきって、その作品のよさやお話についてみんなに言ってみよう。 ＜発表の観点＞ ○表したお話 ○つくりたいお話の場面や様子を表した部分 ○お話を表すためにねん土で工夫できたと思うところ ○お話に合わせて特に気をつけたところ ・形をつくるときに特に苦労したところ・工夫したところ ・ねん土作品でおもしろいと思ったところ ＜聞く側の観点＞ ・お話の中にある驚きや感動、人をひきつける魅力 ・自分の考えの様かに、どんなよいところがあるのか ・自分の考えと同じところ、ちがうところはどこなのか ● 自分の作品について、新しい見方を聞きだそう。（本当の作者）	 ・班で1名の発表者。聴衆は作品や人数の配置を見て聞きたいところへ移動する。 ・本当の作者は、聴衆に紛れ、強制的に質問するように指示する。 ・発表は1分、質問タイムを2分とする。 ・各班4～5名のため、プレゼン実施は5回とする。

相互鑑賞活動「なりきりプレゼンテーション」
（20～25分程度）

○発表のために作品をよく見る（よい点を探すことが友達への思いやり・優しさへ）。
○臆れることなく、自由に思ったことを語る（言語による表現の楽しさ、「わかる」ことの実感）。
○本当の作者が聴衆の一人として質問することにより、作品への想いを再確認する（他者理解と自分の見方への自信）。
● 自分で気づいていなかったよさについて再発見（新しい見方、制作への意欲化）。

見つめる	3　特にお話を聞きながら、作品を見てみたいと思うものを1点選ぶことができる。 4　友達のお話を、作品の特徴と対照させながら、しっかりと聞くことができる。	3　全体の中で特にお話を聞きながら作品を見たいものをあげてみよう。 4　お話を聞いてみよう。	・作品の角度を変えながら、見る人を意識して発表できるようにする。 ・カタログシート（作品写真つき）を配付する。
まとめる	5　友達から得た情報や学んだことをもとに、気づいたことや考えたことを記入して、自分の「ねん土でお話」作品カタログを完成させることができる。	5　作品カタログをつくろう。	・気づいたこと、わかったことなどをできるだけ詳しく書けるように促す。
	6　「ねん土でお話」を終えてみて、おもしろかったこと、勉強になったことなどの感想を述べることができる。	6　「ねん土でお話」の終わりに、おもしろかったことや勉強になったことなどの感想を聞かせてください。	・カタログの♂1名、♀1名を作成する。

「作品カタログ」づくり
（10～15分程度）

○満足感が言葉に（充実した子は書きたくなる）。
○楽しく語り合いながら記述する（教師との対話による言葉の引き出しも可能）。

【育みたい力】とのかかわり

(1) 「カタログをつくる活動」で最も中心となるのは、**「自己理解」**である。作品をしっかりと見つめ、自分の取組を振り返ることで、自分自身を見つめ直すことになる。また、そのことが、作品の中に題材の魅力を**「感じとる」**経験となる。そして、自らが発見した作品の「よさ」に一層自信をもつことができる。記入しながら、子どもたちは、自らの制作過程を頭の中で再現する。具体的には、

①自分がどのように素材と出会ったのか。
②どのような想いでつくり始めたのか。
③制作しながらどのように悩み、工夫したのか。
④他の友達からどのような刺激を受けたのか。
⑤どのように見せようと作品をまとめたのか。

これは、単純に「振り返る」というよりも、表現行為そのものに近いのではないか。この振り返りの中で、「もう一度つくるなら、この点をもっとこうしたい」、「こんな主題でつくりたい」など、関心を強め、意欲を増すことがある。この気持ちは、題材に対してとても前向きな気持ちであることから、「うまくいかなかった」という後悔の気持ちとは確実に区別することができる。まさに、「鑑賞は表現（創造）行為である」ことの表れであると言えるだろう。それは、この時子どもたちの中で、**「発想・構想の力（広げる・深める・見通す）」**が沸き起こっていることは間違いないからである。

(2) 「カタログを見る（活用する）活動」は、作品カタログを展示し、自由に交流することである。これにより、**「他者理解」**を深めることができる。友達がどのような想いを作品にこめていたのか、完成してどのような感想を持ったのかなどを、作品そのものとあわせて理解することで、優しく受け止められるようになる。また、次の題材の制作時に、自分が以前どのようなものをつくったのかを参考にして、新しい作品に生かすこともできる。これは、学びを**「つなげる」**ことにも役立つと言える。

Ⅳ まとめ

今回の研究は、「導入」、中間交流を含めた「相互鑑賞活動」、そしてよさを自覚し、教師が受信するための「作品カタログづくり」の３点について進めることができた。制作に関する指導はまだまだ不十分ではあるが、子どもたちの満足感や表現を楽しむ気持ち、作品への愛着にとっては、これらがとても重要であることがわかった。事実、この取組を行ってきて３年目になるが、かかわった子どもたちのほとんどが「図工が好きだ」と答えるようになった。「絵に対して苦手意識が強く、嫌でしょうがなかった」という子でも、好きな要素を見つけている。そして何よりもうれしかったことは、「友だちの作品を見る事ってこんなに楽しいんだね。」という多くの子どもたちの声を聞けたことである。子どもたちにとって、楽しみな時間の一つになっていくことに、教師として大きな喜びを感じるとともに、期待に応えなければならないという大きなプレッシャーも感じる今日この頃である。

提言：小学校　湯　浅　大　吾

研究テーマ

語りを促し、表現を高める
～１年生の１学期の鑑賞～

提言の概要

昨年、道立近代美術館の３０周年記念の企画に参加する機会を得た。学芸員と鑑賞学習プログラムを創造する仕事は私にとってとても刺激的で、中学年の子供たちが鑑賞を通して、これほど資質能力を発揮するものかと驚かされた。

新学習指導要領では、「美術館などと連携して」という鑑賞教育に対して１歩踏み込んだ内容が示された。その中では、１年生の鑑賞の対象は「友達の作品」と示されている。しかし、低学年では美術鑑賞がどのような教育的な効果があるのか、効果を上げるためにはどうあるべきなのかを検証したく、本実践に取り組んだ。

初等教育初心者の子供と対話による鑑賞教育初心者の実践である。参会者の意見を聞きながらどうあるべきだったのか、実践を再構築していく中で低学年の鑑賞教育の可能性が見え、参会者の中で共有化されることを期待する。

Ⅰ　下準備①・・・「質問絵本」

「質問絵本」　五味太郎
1991 ブロンズ新社

奥村調査官や鑑賞教育第一人者の上野教授らと彫刻美術館で鑑賞教育の実践を積み重ねている、札幌三角山小の森實先生に相談したところ、「質問絵本」を紹介していただいた。国語の時数を使い、毎日読み聞かせをした。

この本は、質問に答えるために挿絵をよく見なくてはいけない。挿絵をよく見て答える中で、読者が意味付けをしていくという内容である。例えば、全１５問で構成される第１問目はこうである。「ここに女の子が１４人います。さて一番早く結婚しそうなのはどの子だと思います？そのわけは？」子供たちが選択した理由は、「髪型がお姉さんぽいから」「服装がお母さんぽいから」というものだった。その背景には、「結婚＝大人」という見方や感じ方が働いていると考える。

質問８くらいに入ると「この人は今、一番必要なのよね、と思っているものはどれだと思います？」という質問に対して、昨日の質問に出てきた男の人と結婚するから「指輪」などと答える子が出てきた。描かれているものを関連付けて見られるようになったのである。しかし、感じたことを言葉で表現できない子、直感的に答えるがわけを言えない子など実態は様々であった。

Ⅲ 下準備②・・・絵の選定

「フライフトクール」 竹内 健
1936

渡会 純价
『音の旅人』ロベルト-シューマン
「子供の情景」から「鬼ごっこ」
1987

絵の選定については、

① いつか本物を見る機会を大切にしたいので、道立近代美術館の作品から選定する

② 子供が意味付けしやすいように、家族や友達など人と人と関わりが描かれているもの

③ 同様の理由で表情や動きや向きが見て取れるよう、あまり抽象的でない作品

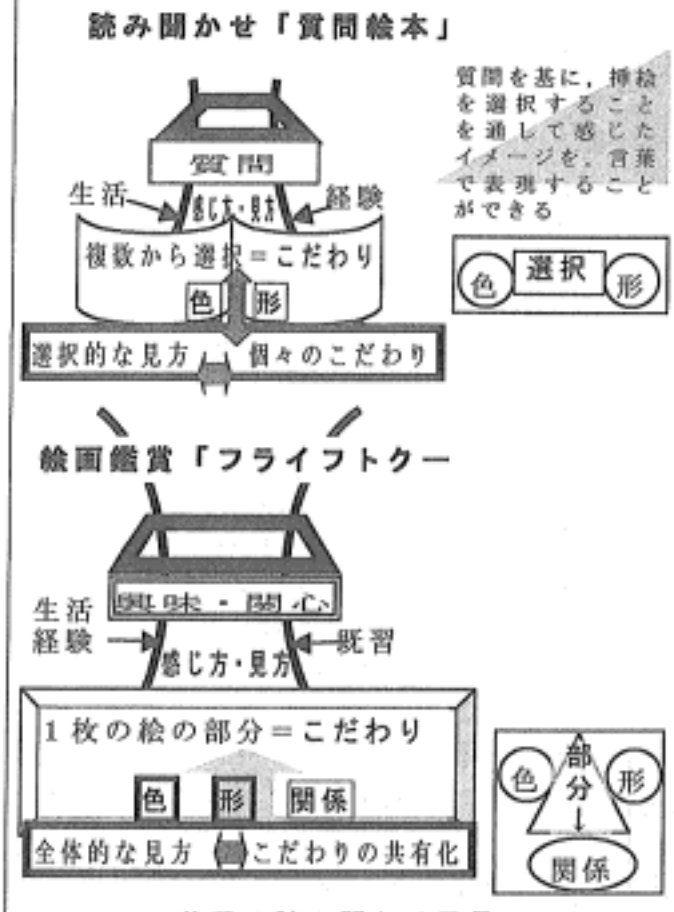
以上のことを伝えて、道立近代美術館の学芸員浅川さんが注文通りに選定してくださったのが、下の作品である。

Ⅳの中で詳細に触れるが、鑑賞の後に絵を描く活動を組むことにしたので、色彩の豊かさが必要と考え、美術館所蔵の全作品の中から私が選定したのが、左の作品である。これについても、参会者の意見をいただきたい。

それにしても、無数の作品の中から選定するのは骨の折れる作業で、学芸員さんってすごいと実感した。

森田 沙伊 上から 「馬」「納屋余情」「慕情」 1977

Ⅲ 対話による鑑賞①・・・「フライフトクール」



普段の読み聞かせ風景

初めての絵画鑑賞

子どものことを考えると、４５分間を通して絵を見続けることは実態に合っていない。そこで、前半はいつもの『質問絵本』でウォーミングアップをしてから、初めての絵画鑑賞に向かうこととした。

絵本の質問の内容は、「洋服店の前をやや早足で歩いている子がいます。彼は今どこへ行こうといているのでしょう。今水曜日の午後４時少し前です。」というものである。今までは、複数の人や物の中から選択していくという内容であった。しかし、今回は町並みが描かれている挿絵に対して意味付けをしていくという内容なのである。必然的に描かれているものを関係付けて見る活動が生まれ、それを絵画鑑賞につなげたいと考えた。

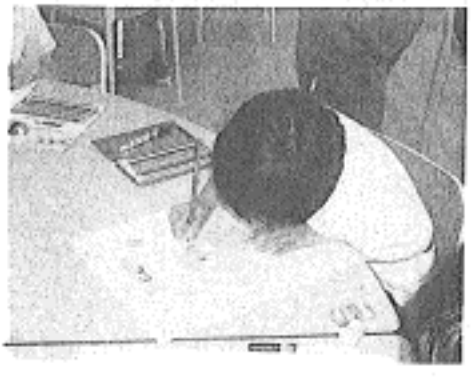
例えば、「男の子の鞄には勉強道具が入っていてこれから塾に行くところ」「お腹かすいたのでハンバーガー屋さんにいくところ」「バス停でバスに乗ってお婆ちゃんの家へ行くところ」など、描かれていることと自分の生活経験を結びつけて意味付けをしていた。

その後、視聴覚室でホワイトボードにプロジェクターで『フライクトクール』の画像を投影して対話による鑑賞がスタートした。最初は周りの花に着目する子が多く色や形から「あの花じゃないかこの花じゃないか」というところから交流がスタートした。次第に中心に描かれている人物に着目しだし、「二人は双子だ」など関係を考え出した。「山羊は遊ぼうと言っているけど、女の子は目が細く寝ぼけた感じなので断っている」など、山羊との関係に話は及んだ。「ベッドの端に赤いところがあり、錆じゃないか」という意見も出た。「花畑の中にベッドがあって外で寝るなんて、気持ちよさそう、やってみたい」という意見が出たところで盛り上がり、初めての絵画鑑賞は終わった。

Ⅳ 対話による鑑賞②・・・「鬼ごっこ」

絵に見入る子供

お話の聞こえる絵



前時と同じ理由から、前半を絵画鑑賞とし、後半を絵を描く表現活動とした。鑑賞を通して、絵からいろいろなお話が聞こえてきたおもしろさを生かして、自分たちもお話の聞こえてくるような絵を描こうという活動を構成した。

詳細は後述するが、これが子どもの意識とかけ離れたものとなってしまった。

「鬼ごっこ」の絵を子どもがどう見るか、シュミレーションしてみた。私には描かれている人物の多くが真ん中の鳥に目を向けているように感じ、鳥を板書の真ん中に位置付けようと考えた。そして、子どもが見つけたものと鳥を矢印でつないで、関係を位置付けようと考えた。また、画面いっぱいに描かれている木との関係から意味付けが始まることも考えられたので、木を真ん中の下に板書し、そこから始まる円で全体をくくりまとめようと考えていた。

ところが授業では、いつもすばらしい着眼点で意味付けをしていた子が、帽子をかぶったオレンジ色の人は、裸だと意味付けをし出した。そこから、子どもたちの見方は鳥ではなくオレンジ色の人物との関係で語りが進んだ。

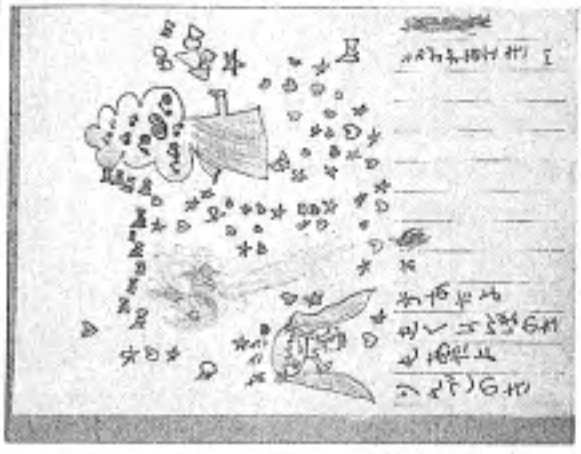
鳥との関係からファンタジーなまとめに向かい、その思いを生かしながら「絵から聞こえるお話」という、自分物語の想像画につなげようとした構想は、違う展開で終わってしまった。

そのため、絵画表現にどんな視点で向かえばいいのかという軸がぶれてしまい、子どもたちを路頭に迷わせる結果になってしまった。

これについても参会者の意見をいただきながら、どう展開すれば子どもの想像力をくすぐり、夢のある絵を描く活動に向かえたのか再構築されることを期待する。

V お話の聞こえる絵

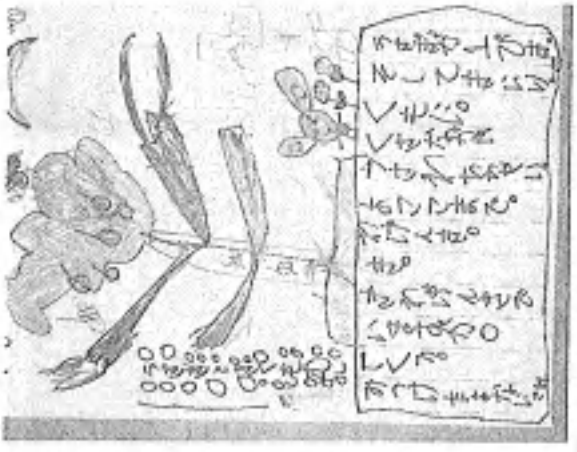
どういう切り口で発想していけばよいのかを子どもに十分落とせなかったため、多くの子は鑑賞作品と同じように木を描き、それを中心に話を考える傾向に向かった。中には自分の将来の夢で発想したり、こんなことしてみたいという思いで自分物語をふくらませる子もいたが、夢というよりは日常の生活場面の延長上から発想した子もいた。



きあたよ　さくらんぼのきもあったよ…

あのね、きがあってつぎにひとがきて…

Mステにでているところ、うたっています…



ウサギが１ぴきそしてきにりんご…

さやがきのみをとろうとしてる。いぬは…

ぼくがうみにいてたのしそうにあそ…

いぬがりんごとさくらんぼをたべたいと…

いぬが３びきあそんでいる。ぞんびと…

こうえんでみんなあそんでいる。ぶらんこ…

あるところに大きな木がありました…

ことりがひとをのせ、そしてそとにつれて…

うみはきれいで、きもちくてはいると…

まとめ

１校目で受けもった１年生も本州からの転勤族が多い地域で、今担任している１年生と同じような家庭環境であった。しかし、13年の間に変わった子どもたちに、驚かされる毎日である。価値観は変化しても、発達特性という本質は変わらないはずである。もっともっと児童理解を進め、子どもに寄り添った題材化を図り子どもにとっても指導する教師にとっても楽しい図工の時間を送りたいものである。それにしても子どもって不思議である。

提言：小学校　土橋直美

研究テーマ

子どもが表現にこだわるとき～「題材との出会い」の工夫～

提言の概要

教職について数年間は図工が嫌だった。何をどう教えてよいかわからなかった。でも、子どもの中に“表現したいこと”があふれてくると自然に表現の追求やこだわりが生まれてくることや、絵から子どもの姿を見ることができることを知ってからは、図工が楽しくて仕方ない。「自己表現」が「生きること」そのものであり、表現の追求やこだわりの中に子どもの心の中で育つ何かを見て取れるからこそ、表現を追求したくなるような、こだわりたくなるような、「題材との出会い」を考えていくことが大切だと考える。ここ数年は、ただ「楽しい」「おもしろい」だけでなく、「思いの質」や「育みたい力」を考えて題材設定したり、各教科との関連を図ったりしながら、**図工科を通して学級経営を考える**ことを自分の課題としてきた。本提言は、2年前に6年生を担任したとき、**学級の実態から、造形活動を通して「人とのつながり」や「生きること」を考えさせることを試みた**実践の発表である。

作品や制作過程から伺える子どもの姿について論議し、教育とは何か、図工で育むべき力とは何かを皆さんと一緒に考えていくことができれば幸いである。

Ⅰ　図工科から学級経営を考える

(1)　教科書題材のアレンジ

「人とのつながり」や「生きること」を考えさせたいと考え、教科書に載っている題材をアレンジしたり、教育課程を自主編成したりしながら題材を設定した。

題　材　名	内　容	関　連
「学級旗を作ろう」	共同制作　デザイン	学活(学級目標)
「自分を見つめて」(自画像)	絵画	
「～している人」	スケッチ	総合学習「人権・平和」
「ゲルニカ」「くずおれる男」他	鑑賞	
「感情を表す手」	スケッチ	
「平和を訴える絵『おこりじぞう』」	共同制作　絵画	
「オズの魔法使い」(劇大道具)	造形	学習発表会
「思い出の『オズの魔法使い』」	立体・紙粘土	
「心をいやす灯り」(ルームライト)	立体・デザイン	理科・総合学習
「楽器を演奏する友達」	木版画・絵画	音楽
「感謝の気持ちを」(教室表示プレート)	デザイン	家庭科
「思い出」「夢」(フォトフレーム)	デザイン・樹脂粘土	卒業アルバム

(2) 表現させるには、表現できる環境を

4月、この学級・児童を受け持つことになっての最初の印象は、「伸びやかさ、素直さのある伸の良い学級集団」だった。しかし、行事や毎日の授業を通して子どもたちを観ていると、思春期という不安定な時期であることも関係するのだろうが、いつも独りでいる子がいたり、普段仲良さそうに見えるが、いざというときに助け合えない関係の稀薄さが見えたり、思っていることを伝え合わず陰口を言い合っていたり・・・と、いろいろな問題が見えてきた。なんとかしなくてはと思った。そこで、総合学習のテーマの一つを「人権と戦争・平和について考える」とし、関連を図りながら、いろいろな場面で気持ちを伝え合い、個を認め合い、本気で人のことを考える時間をより多く持てるようにしようと考えた。

まずは、自分を表現できるように。それには、子どもたちそれぞれが自分のことを素直に表現したときに受け入れ合えるような支持的風土が学級になくてはならない。絆の強い学級を作っていきたいと思った。

Ⅲ 自分を見つめて（自画像）

(1) 育みたい力

まず、**自分を表現できるようにすること、友達の思いや表現を受け入れ認め合えるようにすること、そして、自分の表したいと思った内容を自由に豊かに表現できる力をつけさせること**が大切と考え、教科書では年度末に予定されていた自画像を描く題材を、あえて一番初めにもってきた。

(2) 題材との出会い

この題材にとりくむ前に、図工についての印象を子どもたちに聞いたところ、「うまく描いたりつくったりできないから嫌い。」という子が半数ほどいた。「上手か下手か」が大切なのではなく、見る側は作者の込めた思いやテーマを作品から感じ取ることが大切で、つくる側は自分の思いやテーマを表すことを考えることが大切であることを実感させたいと考え、いろいろな自画像や肖像画を**鑑賞する**ことを導入として行った。十数枚の自画像や肖像画を黒板に貼っていくと、子どもたちから「うわあ。」「すごい！」「おもしろい顔！」などの声が上がった。（有名な絵ばかりではなく、3年生児童の自画像「こんなときのわたし」も見せた。）

①絵を見ての印象の交流。（鑑賞・対話）

「何かを企んでいるみたい。」「意地悪そう。」「ものすごく怒っている。」「叫んでいるよう。」「友達に裏切られて悩んでいるのかも。」「バックのもやもやが、何かを考えていることを表しているみたい。」「静かな感じがする。」「いろんな気持ちが混ざり合っているみたい。」「冷静に自分をみている感じ。」・・・・。３年生の絵についても、「楽しそう！」「あ、わかる、そういう経験ある。」などなど・・・・。

子どもたちは、構図や色、表情やポーズ、バックによって作者の内面まで表せることを感じていく。そして、友達の絵の見方や感じ方を聞き、共感したり比較したりしながら、他の見方も探り始める。作品に込められたテーマを想像し、友達の感じ方を聞きながら、実は、子どもたちは自分自身を見つめているのである。

＜楽しむ・感じる・比べる・自己理解・他者理解＞

②どんな自分を表現するかを考え、構想を練る。

どんなときが自分らしいのか？普段何をしていることが多いのか？どんな自分が好きなのか？どんな自分が嫌いなのか？どんな自分を知ってもらいたいのか？表したい自分を表現するには、どんな構図で、どんな表情を描けばいいのか？大きさは？角度は？色の雰囲気は？‥‥***＜広げる・深める・追求する・選び、決める・見通す＞***

③自分の思いを表現する。

「こうしたい」という欲求が強ければ強いほど、子どもたちは表現方法をどんどん模索し、工夫してく。よく考える。そして、鏡の中の自分をよく見つめる。きっと、子どもたちは鏡を覗き込みながら、自分を描きながら、自分を見つめ、自分と対話している。写真じゃない。**見たままに書き写すことが目的ではなく、“様子”や“気持ち”“性格”を描く**のだ。「自画像を描かせるときバックはどうしたらいいのか？」「下書きまではよくても、彩色させると失敗する」などの話題が出ることがあるが、子どもたちに「伝えたいこと」「表したいこと」があると、何も言わなくても素敵に、雰囲気のあるものに仕上げるものだと実感している。

＜比べる・バランスをとる・追求する・つなげる・選び、決める・自己理解＞

「友情の証」

「くら～いときの自分」

「不安な自分」

④自分の思いを作品カードに綴る。互いの作品を鑑賞し合い、感じ取ったことを鑑賞カードに書き、交流したりする。

作品鑑賞会での子どもたちを見ていると、「上手か下手か」ということを見るのではなく、作品カードを読んで友達の心の中や意外な一面を知ることを楽しんでいるように感じた。また、友達に共感されたり、感想を言ってもらったりすることが嬉しそうだった。一言感想を言ってもらうことで、その相手に親しみも感じるようだった。「自分を表現する」「自分の思いを伝える」「友達を知る」ことの第1歩にできたのではないかと思った。

＜楽しむ・感じとる・自己理解・他者理解＞

(3)教師の受信

子どもたちが絵を描いているときには個々にできるだけ話しかけたり質問したりするようにしている。対話することで見えてくる子どもの姿があるからこの時間は大切にしたい。意外な一面を発見したり、課題を発見したり・・・。意欲的にどんどん描き進める子ばかりではない。自信なさそうに少しずつ描く子、適当に色を塗る子。「このパックはどんなことを表したかったの？」と聞いても、「いや、別に、何となく。」とか、「いろいろ。」などとごまかす感じで答える子もいる。「自画像」というのはこの時期の子どもたちにとっては重たい題材であるかもしれない。この学級担任になってまだ1ヶ月程度ということもあり、私に対して心を開けないのかもしれないし、友達に自分をさらけ出したくないのかもしれない。そういった描けない子、描きたがらない子、適当に描く子を自分から進んで描く子に変えるには次にどのような題材に出会わせようかと考えることが学級経営を考えることにもなる。

「もやもや」　　「手を振っている自分」

Ⅲ　平和を訴える絵「おこりじぞう」（共同制作）

(1)　育みたい力

６年生という学年であることと学級の実態から、「生きること」や「命」、「人とのつながり」を深く考えさせたいと思った。それには人権意識を高める必要がある。そこで、「戦争・平和・人権について考える」ことを総合学習の一つのテーマとして位置づけ、造形活動と関連させて行うことにした。しかし、戦争・平和・人権についての意識を高める題材をどう設定すればよいのか見えずにいた。原爆ドームや鳩を描くことが平和を考えることになるわけではない。何を描くかより、描くことにより何を考えさせるかが大切である。

戦争については、子どもたちは興味・関心があるものの、原爆についてさえも深く知らないという子がほとんどだった。まずは、戦争についての知識を深めさせることが必要であると感じた。書籍やビデオを活用したり、考えを話し合わせたりといったとりくみを重ねていった。

エンカウンターなどを取り入れながら、学級の実態を「人権」と結びつけて考える場も何度となく設定した。

漠然とではあるが、夏休み明けには題材を決定し、制作活動に入れるようにしようと計画を立てた。そのときに生かせるように、見る目を養うこととテーマの表現法を考えることを目的に、スケッチや鑑賞を行った。

①「～している人」（人物スケッチ）　　１ポーズ１０分、グループ内５～６人交替

「よろこんでる人」

「考えてる人」

「何も考えていない人」

②世界の作品鑑賞

・ピカソ作　「ゲルニカ」（絵画）

・レームブルック作　「くずおれる男」「座る青年」（彫刻）

③「感情を表す手」（手のスケッチ）

「いかり」

「もがき」

「叫び」

「にくしみ」

「自画像」→「人物スケッチ」→「作品鑑賞」→「手のスケッチ」と、ここまできて、子どもたちは、「表現すること」で大切なのは、「思いを込めること・思いを伝えること」なのだということをつかんできていると感じた。抽象的な感情も絵で表現できるということを感じてくれているように思った。

＜追求する・広げる・比べる・感じとる・自己理解・他者理解＞

本当は８月に平和を訴える絵の制作に入りたかったが、まだ早いと感じ時機をうかがっていた。学習発表会（創作劇）に向けてのとりくみを進める中で、もめ合い、話し合いを繰り返すうちに、学級がまた少し変わりつつあった。（「オズの魔法使い」を題材にしたのはそのため。）　**「わたしは友達の悪口ばっかり言っていて、悪口を言うことが楽しくて、一緒に悪口を言ってくれる友達を親友だと思っていた。でも、人権の勉強をするようになってから、自分を変えようと思い始めた。今まで悪口を言っていた人とも遊ぶようにしてみたら、その子は誰のことも悪く言わないことに気づいた。今は、その子を親友だと思えるまでになった。」**と涙ながらに語ってくれた子もでてきた。（１０月）

友達のことを真剣に考え、自分の心を素直に本音で語り合える雰囲気ができてきていた。友達のことを思いやる心は、家族や周りの人たちのこと、そして、命について考えることにもつながり、「戦争・平和」への考えや思いも深まっていくのを感じた。今なら平和を訴える絵の制作もできるかもしれない・・・という気がした。

⑵題材との出会い

私の頭の中で「こんな絵を」というものが決まったわけではなかったが、「今なら、子どもたちとともに題材を作っていける」と思った。絵本「おこりじぞう」（山口勇子・作）の読み聞かせの後、原作をもとに、言葉一つ一つを追ってイメージを膨らませるようにした。「先生に描かされた絵」にならないように、話し合いには十分時間をかけた。

① 個人で描く？グループで描く？全員で描く？

「グループに分かれて描くのがいい。」

「せっかくなら、学級全員で１つの絵を描いてみたい。」

②絵の大きさをどうする？

「ピカソのゲルニカと、縦横の比を同じにして描こう。」

「世界のピカソに対抗して、いっそのこと同じ大きさに

するっていうのは？」

「本当にそんなことができたらすごいね！」

③どの場面を誰がどう描く？

物語を４つの場面に分け、４つのグループで担当場面の構想を練った。

④大きな紙を作る。

体育館に出て、みんなでメジャーを使ってゲルニカと同じ大きさになるように全紙（和紙）を並べていった。（縦 3.5M　×　横 7.8M）

「でっかーい！本当にこんな大きな絵、自分たちにできるかなあ？」

⑤思いを表現する。表現を深める。思いを深める。

どんな人を描く？

被爆者はどんな気持ちだったのかな？

どんなことを伝えよう？

背景はどうする？　色はどうする？

「倒れている人や逃げている人を描こう」

「爆音で耳を塞いだ人もいると思う。」

「皮膚が垂れている人も。」

「苦しくて叫んでいる人も。」

互いにポーズを考え見合って全員が必ず一人は人間を描いた。

「黒って、こんなに色々できるんだ！」

「墨を飛ばしたら、『黒い雨』みたい！」

「やけどの跡はかすれさせると本物っぽくなる。」

「火や血は赤で、女の子の皮膚にくっついて残った青い服は青にしない？」

「でも、なんか、白黒のままでもいい感じがしてきた。この方が怖いよ！」

⑥ステージの上から完成作品を味わう。

「すげえ！」「こわっ！」

「なんか鳥肌たってきた。」

⑦作品カードにそれぞれの思いを綴る。

どんな気持ちで描いた？

絵を描きあげて、どんなことを感じた？

絵を見る人に何を伝えたい？

⑧多くの人に見せたい！

全校集会・参観日で発表

赤平駅舎に展示

深川アートホール東洲館に展示

＜追求・広げる・深める・決める・見通す・つなげる・バランス・比べる・使う（新しい素材との出会い）・感じとる・自己理解・他者理解・見せる＞

「闇」　　6年

戦争の勉強をするまで、「戦争はしてはいけない。」ぐらいにしか、深く考えませんでした。でも、総合で戦争の勉強をして、ビデオも見たし、本当の写真も見ました。自分が思っていたより被害がすごくて、ビックリしました。そして、自分が描いたのは、「皮膚が垂れ下がっている人です。」自分たちで表現できるか、悲しみが伝わるかなど、すごく心配しました。でも、いざ描き出すと、すらすらと描けました。1学期から、戦争について勉強したからこそ描けたんだと思います。色は、全て墨で、薄い色から濃い色までたくさん作りました。初め、表現できるか不安だった絵も、完成してみると、すごくいい絵です。みんなで勉強し、みんなで描いた絵だからこそ、素晴らしいんだと思います。戦争は、本当にしちゃいけないことです。広島や長崎に落とされた原爆は、1つで何十万人もの人々が亡くなりました。奇跡的に生きた人も、原爆症などで辛い思いをしなければいけません。今は、戦争を経験した人が減ってきているので、戦争の辛さ、悲しみ、怖さを知る人が少ないのです。戦争をしていない今だからこそ、辛さ、悲しみ、怖さを知ってほしいんです。知ってもらうことで、戦争をしたくないと思う人がたくさんいると思います。そして、世界の人々が戦争をしたくないと思ってくれればいいなと思っています。

戦争の勉強をしなければ、深く興味をもたなかったし、絵を描こうとも思わなかったし、辛さだってわからなかったと思います。勉強してよかったです。

(3)教師の受信

子どもたちはこの共同制作を通して、戦争を疑似体験し、「命」について真剣に考えたのではないだろうか。友達と話し合いをかさね、表現方法を模索し、影響し合いながら絆を深めることができた。みんなの思いを伝えようという強い欲求があったからこそ生まれた作品だと思う。この作品をつくりあげていく過程に、子どもたちの様々な成長と変化を見ることができた。

Ⅳ 楽器を演奏する友達

(1)育みたい力

卒業間近。自分の成長や変化を感じ、友達とのつながりをこれからも大切にしてほしいという思いで一年間題材設定をしてきた。６年間で最後の絵画では何を？と考えた。自分の思いを表現するとりくみはしてきたので、最後は、**友達の思いを自分なりの解釈で木版画に表す題材にした。**

(2)題材との出会い

① この１年間で（または、６年間の小学校生活の中で）一番心に残っている楽器演奏について、思いを各自で綴る。

・何の楽器演奏が心に残っているか。それはなぜか。

・どんな気持ち、どんな格好で演奏しているところか。

②くじ引きでパートナーを決め、互いの思いを知る。

③二人で相談し、互いの思いが表れるようなポーズや構図を考え、モデルになり合って下描きをする。

④白と黒のバランスを考え、彫る。

⑤試し刷りと修正彫りを繰り返し、完成させる。

⑥作品カードに、友達のどんな思いを表現したかったのかを綴る。

⑦互いの作品を見合い、モデルから作者への感想をカードに添える。

＜追求する・つなげる・広げる・深める・見通す・比べる・選び、決める・バランスをとる・使う・他者理解＞

(3)教師の受信

友達の気持ちを表現するために、お互いにすごく話をしたり、楽器の持ち方や向き、構図などを真剣に話し合ったりしていた。「版画で大切なのは下描き」、「下描きで作品のおおよその価値が決まる」などと聞くが、どの子も手抜きすることなく下描きにとりくみ、時間内で終わらない子は、休み時間や放課後に音楽室や体育館・教室に二人で残り、最後までこだわって仕上げていた。

彫る段階では、色々な児童作品を参考に見せて、彫りの効果や白黒のバランスをイメージに合わせて考えさせるようにした。私自身、木版画指導には自信がなかったが、子どもたちなりに試行錯誤している姿を見ているのが楽しかったし、相談されれば、一緒に考えもした。

子どもたちは、互いに作品（制作過程も含めて）を見合い、自分の思いを一生懸命表現しようとしてくれる友達にうれしさを伝え、その感謝の気持ちを自分もまた作品に込めて制作しようとしていた。面倒がらずに何度も試し刷りをする子が多かったのも、“友達のためによりよいものを”という気持ちの現れではないだろうか。印刷するときも、助け合ったり、アドバイスし合ったりという姿が多々見られた。子ども同士の距離がすごく縮まっているのを感じ、嬉しかった。

５月にとりくんだ自画像では、自己主張がなく、何となく作品を仕上げていた子も、友達の思いを表現すべく、**「～さんに聞いたら２つの気持ちがあった。楽しい気持ちも表したかったけど、ぼくから見てすごくがんばっていたから真剣な表情の方にする。だから、バックはこうしたい。」**と、作品作りに対する自己主張をし、最後まで手を抜かずに作品作りを進めていた。この何ヶ月かの間に、形についても、ずいぶんバランスがとれるようになっていたのには驚いた。１つの題材ではわからなくても、年間を通して見てみることで、その子その子の変化や成長が伺えるというのは本当に面白い。

「初めてのアコーディオン」

「真剣な有香さん」

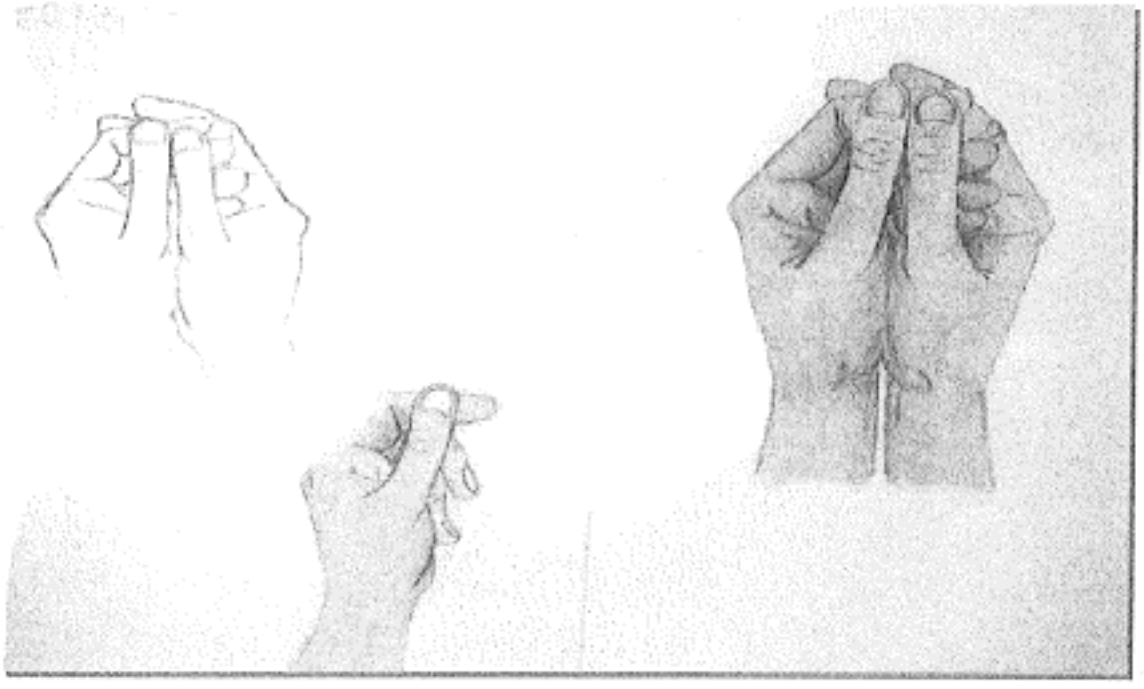
「リコーダーを演奏している赤緒美さん」

V まとめ

新しい題材を開発しなくても、難しいことを考えなくても、教科書に載っている題材を目の前の子どもたちに合わせてちょっとアレンジするだけでオリジナルの題材にすることができる。題材と出会った場面で「おもしろそう！」「やってみたい！」「やってみる価値がありそう。」と思えたなら、子どもたちは意欲的に活動する。「こうしてみたい！」「こんなことを表したい！」という強い意志と欲求が生まれたなら、子どもたちは自ら表現方法を模索し、こだわり始める。「描かせる（つくらせる）」ではなく、「子どもが自分から描き始める（つくり始める）」ようなアプローチや仕掛けを考えていく必要がある。子どもたちが進んで何かをつくり上げる、つくりながら自分自身と向き合い考える、友達と影響し合う、そういったプロセスを題材の中に忍ばせると、図工がとても価値のある教科に変わる。造形活動の中で頭と手と道具を駆使し自分の気持ちを表現していくことは、見えないものを見える形にしメッセージをつくり上げていくことであり、生きることに結びつく。子どもの心を解放し、思いを発出させられるような題材との出会わせ方や授業展開を考えていくこと、子どもに寄り添い子どもの心を受信することが学級経営を考えることとリンクする。題材と題材をどうつなげていくのか、どんな力を育んでいくのかを考え、長いスパンで子どもの変容を見るのも楽しいものである。題材設定は学級経営そのものだと感じている。

提言　中学校

免許外で美術の授業を担当。珍しいことではありません。
そのような先生の支援をさせていただくのも美術教育研究で大切なこと。
研究では、わかりやすさを大事にしました。
ですから教科書題材、あるいはごく普通の題材で考えることにしました。



「輝く瞬間」と言われた時、
やっぱりバレーボールをしている自分がすぐに思いついたので、
その姿を描いた。
レシーブを選んだのは、
バレーしているのを表すには一番わかりやすいかな、
描き応えがあるかなと思ったし、
強いスパイクとかとれた時に、うれしいし、
やっていて楽しいので この瞬間にしました。

限られた授業時間の中で、どんな心や力を育んでいくのか。
研究の中で大切にしてきた「心育てる題材」
そして「題材との出会い場面」教師の「受信」「育みたい力」
これらを授業づくりの大事なポイントとして考えています。

提言：中学校　川名義美

研究テーマ

よさを感じ合い，追求する喜びを実感できる授業づくり
～鑑賞と表現をつなげながら～

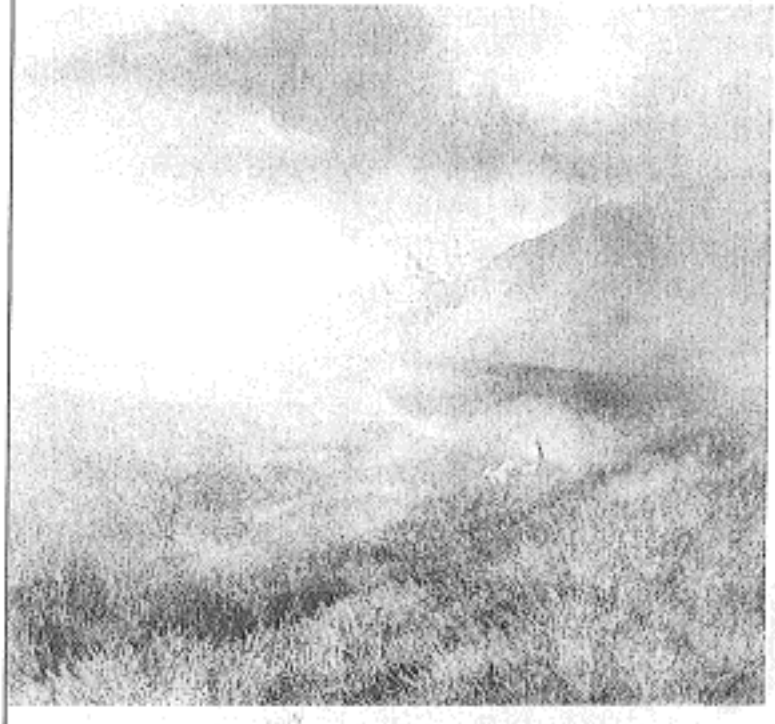
提言の概要

鑑賞は知識を得る学習ではないにしろ，必要な情報を獲得し，より深くその世界に浸りたいとは誰でも思うはずである。鑑賞の授業を通じて作者の心情を探ったり，表現の多様性を知ったりすることができるということは容易に想像できるが，鑑賞で育つ力はそればかりではなく，表現の分野に大きく影響を与えるものと思われる。

鑑賞を通じて子どもたちは，表現への自信や自由さ，絵画的主題の設定の仕方などを学ぶことができるのである。

本提言は，鑑賞題材３点とそれに繋がる表現題材１点の発表である。私自身，毎日が試行錯誤の連続であり，分からないことが多いという実態だが，この機会に，多くの人に様々な視点からご意見をいただき，ともに深めて行きたい。また，参加者の皆さんの明日からの授業実践に，少しでも参考になれば幸いと考える。

Ⅰ　絵を読む①・・・「競争」　キャット



「競争」　ロラン・キャット　１９８５年

これは，転勤して間もない２００７年４月当初にオリエンテーションと同時に扱った題材である。鑑賞の授業をそれまで経験したことがない生徒を相手に，どんな作品と出会わせたらよいかを考え，教科書（日文２・３上）に掲載されている上記作品を提示した。作品を眺めた後「何が描かれている？」と問うと，「カンガルー」「雪山」「枯れた草」「霧」などと答えが返ってきて，そのうち，「風」などという答えも出る。そこで，原稿用紙を配り，「感じたこと，考えたことを書きなさい。」と発問する。子どもたちの感想は様々で，

季節や時間，天気，草の色，雲の形，山の色など，色々と想像を巡らすが，結局，なぜ作品タイトルが「競争」なのかという疑問に行き着く。そこでの考えがまた様々でおもしろい。カンガルーは何故一匹なのか。一匹なのにどうして「競争」なのか。一匹で「競争」しているのなら，いったい何と「競争」しているのか…。

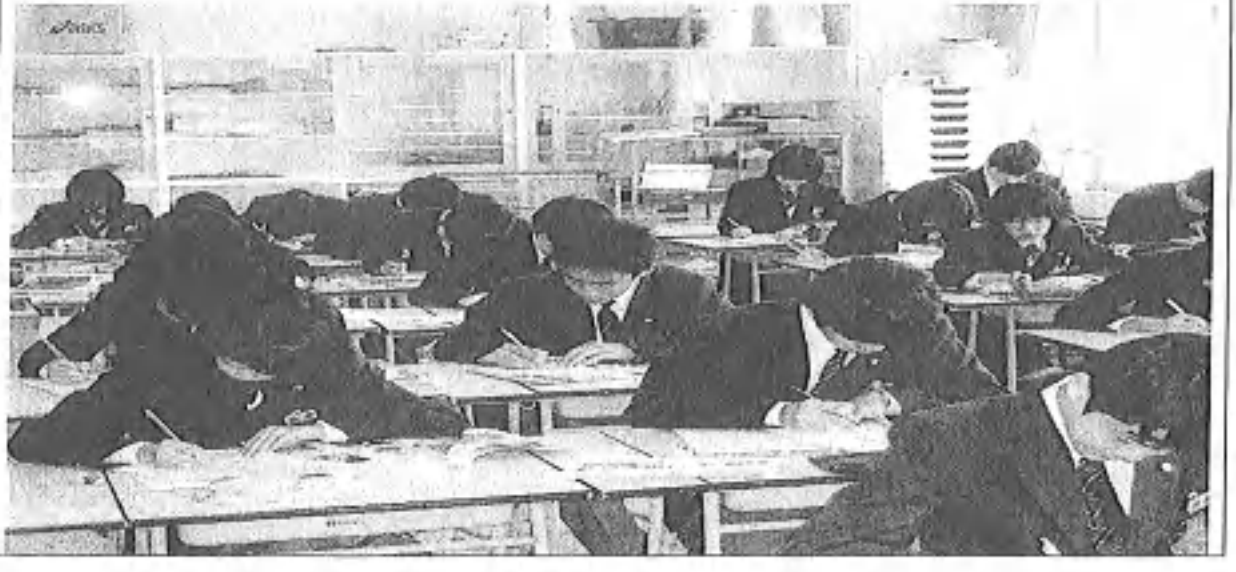
子どもたちの書いた文章を簡潔にまとめ，一覧にして次の時間に配布すると，熱心に読み，勝手に発言し出す。「○○がこんなこと書いてる。」「△△の感想，カッコいい！」しばらく自由にしておき，話題にのぼっていない何人かを選び，「××君はこんなことを書いていたよ。なかなか鋭いね。」とか「□□さんはこういう意見だよ。見方が深いね。」などの言葉の後に「みんなとてもよく書けているね。」「全員が正解だよ。」と言ってあげる。「今度は，それぞれの意見を全体で交流できるといいね。」といってこの題材はあっさり終わる。時期的なことも考え，「鑑賞って簡単なんだ。」とか「おもしろい。」とか「何でも正解なんだ。」「思ったことを自由に書いていいんだ。」という印象を子どもたちに残せたら大成功である。

この題材でもう一つの大切なねらいは，教師がしっかり受信しているということを子供たちに知らせることにある。子どもの行為をいいかげんにせず，一人の人格として大切に扱うというこちらの姿勢を示すことである。

私達は普段の生活の中で，子どもをややもすると「小さな大人」と見てしまったり，「半人前の大人」と見てしまったりしていないだろうか。子どもを一人のナイーブな人格として認めることは，私達の基本姿勢として忘れてはいけない。子どもは，安心して心を開ける環境にあれば，鑑賞ばかりでなく，表現にも心の余裕ができ，のびのびと制作することができるであろう。

感想を熱心に読む子どもたちの姿は，明らかに他の級友達に興味があることを示しているが，同時に彼らは，自分の感想との比較をしているはずである。鑑賞題材のおもしろいところはここであり，人を見ているようであるが，実はその眼差しが自分に返ってくるところにある。「育みたい１３の力」では「楽しむ」，「つなげる」，「広がる」，「深める」，「比べる」，「選び，決める」，「使う」，「自己理解」，「他者理解」「感じとる」にあたる。　何とか自分の考えを伝えようと，言葉を選び，文章を作る。知恵を絞り，推敲し，一生懸命考えることにより，彼らの言語能力や作文力は自ずと成長する。また，微妙なタッチの変化や色合いの違いを見つけることにより注意力も喚起される。情緒以外にも育つものが意外と多い。

過日，町の教科別の研究会があったので，他の２校に呼びかけて，同じ題材を扱ってもらい，共同研究という形を採った。題材の提示の仕方や対象学年は違うが，共通の題材ができたことは貴重なことであり，今後とも研究の余地がある分野である。



Ⅱ 彫刻を読む・・・「王妃」 川名義美

「王妃」　40×75×47　2004年

「王」　145×140×80　1982年

２００７年６月１９日の町内の教科部会研修会で行った実践である。子どもたちは私が彫刻を制作していることは知っていても，実際どのようなものを作っているか知らなかったので，自己紹介も含め良い機会かと思い，自身の作品を使い立体の鑑賞授業を実施した。

ここで私が子どもたちに伝えたかのは次の事柄である。

1，作品の関連づけ

・対を成す考え方があることを知らせ，作品を紹介する。
　正と負，陰と陽，表と裏…等。

ア，　当別神社の狛犬

イ，　風神雷神図屏風

2，連作のおもしろさ

・一つのテーマを繰り返し表現することにより，深く追求することができる。

・実際の授業での連作は難しいが，美術を生涯学習的に考えその意義を伝える。

ア，「ヘルガ」A・ワイエス

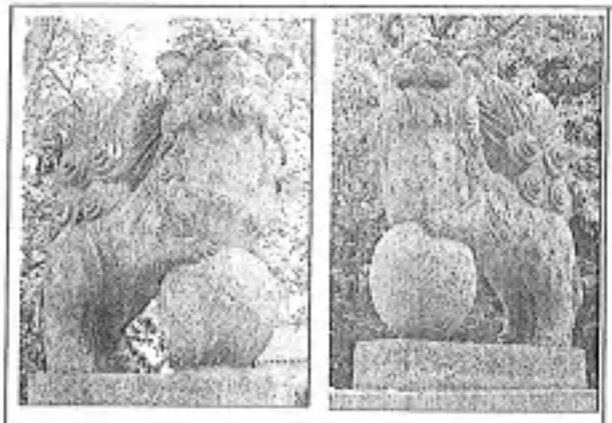
イ，「横臥像」H・ムーア

3，制作には状況が影響する

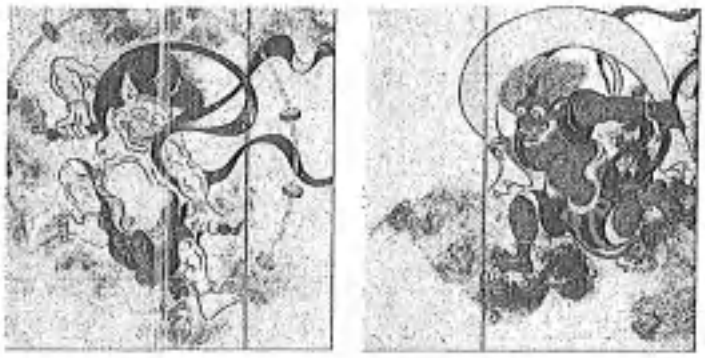
・自身の二点の作品からそのときの状況と形の違いを紹介する。

ア，「王妃」は数年前の作品で自宅のスタジオで制作したテラコッタである。結婚して家庭もあり，落ち着いた生活を送っている現在の状況が表されている。「王」の当時と比べると形になだらかな曲線が増えている。心なしか顔が妻に似ている。

イ，「王」は田舎から大学院に進んだ頃（1982年）の木彫で，当時の気負いが荒々しいノミ跡に認められる。いつも金がなく，アルバイトと制作とに追われていた。



当別人社のこま犬　作者不詳 1941

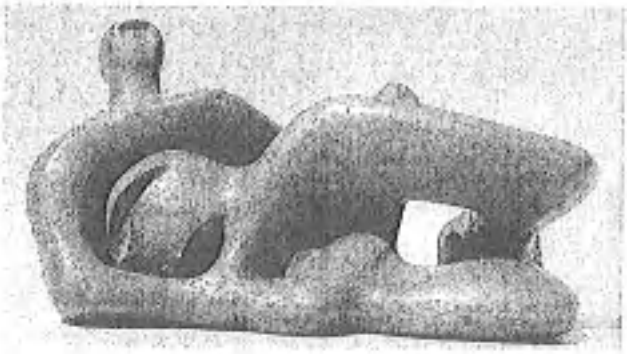


風神雷神図屏風　俵屋宗達　江戸時代

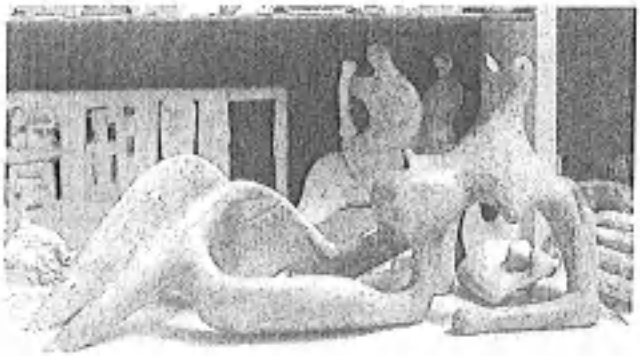
「プロシア人」1973

「シープスキン」1973

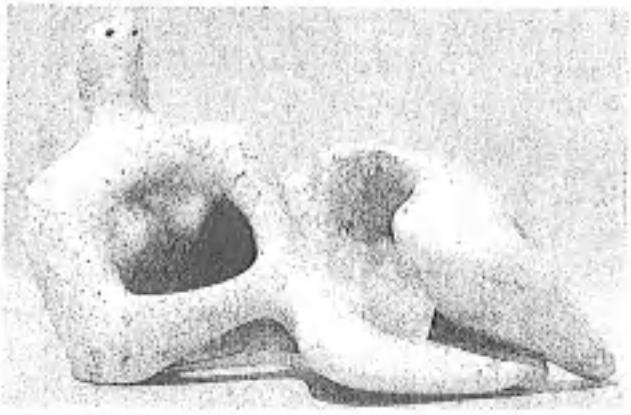
「花の冠」1974



「横臥像」1945



「横臥像」1951



「横臥像」1976

（１） 本時の目標

・彫刻作品を鑑賞し，テーマである作品タイトルを考え，そこから作者の制作意図を探ることができる。

・自分の考えや感想を積極的に班内で発表し交流することができる。

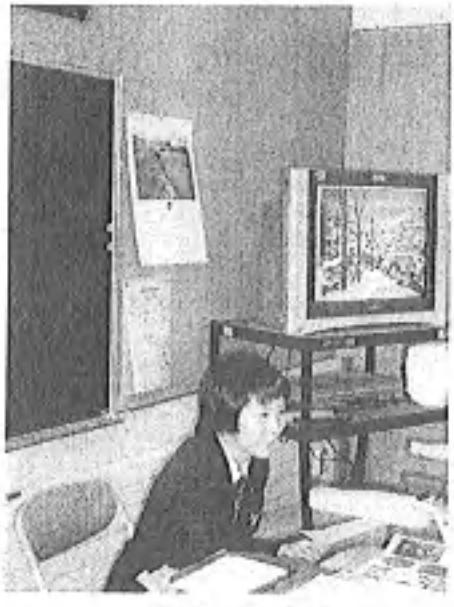
・作品制作の形式に「連作」や「対」を成す考え方があることを知り，そこからもう一点の作品タイトルを考えることができる。

（２）本時の展開

		学　習　内　容	教師の支援	評　　価
導入	3	・前回の復習をし，本時は鑑賞の第二回目を行うことを告げる ・彫刻作品①（「王妃」）を見る	ワークシートを配る	
展開	2	・第一感をワークシートに記入する	感じたままを記入するように促す	自分の考えを記入
	10	問１　この作品のタイトルは何でしょう	作品をよく見るよう助言	話し合いに積極的に参加
	105	・班ごとに発表・板書 ・問１の解答・解説を聞く		他の班の発表を聞く
	5	問２　このタイトルから連想する他の作品タイトルを考えなさい	部分の説明から問１のタイトルを解説	話し合いに積極的に参加できたか
	25	・班ごとに板書 （彫刻作品「王」を画像で確認）→　→ 当別神社の狛犬，風神雷神図屏風を確認 ・問２の解答	問１との関連づけで「王」を解説	
整理	5	・連作について知る（画像で確認）	ワイエス，ムーアなど	
	3	・今日の授業の感想をワークシートに記入		

Ⅲ 絵を読む②・・・「雪中の狩人」ブリューゲル

班での話し合い



班ごとの発表

班の発表を聞く

絵の内には個々の事物を通して，作者からのメッセージがたくさん入っている。その一つ一つを探りながら集めて行くと，ある事実に到達する。そこから絵画的主題に迫るという経験を子どもたちにさせたかった。また，作者が違う同じ構図，同じ季節の絵を見せ，テーマが違うと描き方が違ってくることを知り，絵画の雄弁さ（メッセージ性）なども経験し，表現についての可能性として理解させたかった。

題材との出会いでは実物大の白黒のコピーを提示し，生徒に原画のイメージをより近く感じてもらえるよう工夫をした。また，教科書の図版の他に，話し合いがスムーズに行くようにＡ４サイズのカラーコピーも用意した。

題材の配列としては，この後に後述の「１５歳の自画像」が来るのだが，表現に対するよい意欲づけになったと思う。授業後の感想からも「絵にも文章みたいに自分の考えを入れることができることが分かったとか。」とか「同じ題材を扱っても作者や訴えたいことが違うと全然違う絵になることが分かった。」等が見られた。「育みたい１３の力」では「楽しむ」，「つなげる」，「広がる」，「深める」，「比べる」，「選び，決める」，「使う」，「自己理解」，「他者理解」，「感じとる」等との関連が考えられる。また，班による話し合いを通じて，コミュニケーション能力が高まったと考えられるし，発表を行うことによってプレゼンテーション能力の向上も図られたと思う。

１．目　標

◎絵に描かれている事柄から推測し，時間帯を特定することができる。

○班の活動に意欲的に参加し，自分の意見を述べることができる。

○他の班の発表を聞き，自分たちとの共通点や相違点を理解することができる。

△二枚の絵の違いから絵画的主題を推測することができる。

2．展　開

	時	生徒の学習活動	教師の活動	評価の観点	形
導入	3	「雪中の狩人」を教科書で確認する	確認 （冬の絵である） （狩人と犬がいる）		全
課題設定	2	問　この絵は一日の内のいつ頃の時間を描いたものでしょうか。 ・課題の確認 ・シートに第一感とその理由を書く	・ワークシートを配る ・ワークシートに記入を指示	・自分なりの解釈を書く ・理由も書く	個
	10	・ワークシートに書かれた自分の第一感を基に班内で話し合う	・話し合いにより班ごとに課題を解決するよう班体型を指示 ・期間指導	・話し合いに意欲的に参加する	班
	15	・班でまとめる ・班ごとに発表	・班ごとに発表させる ・実物投影機で確認	・他の班の発表を聞く	
課題解決	5	・原画の大きさをコピーを見て知る ・解説を聞く	・実物大のコピーを提示 ・解説 ＊季節・天気・狩人の背中・犬の姿勢・レストラン前・氷上の人々等 ・班体型を元に戻すよう指示	・解説を理解することができたか	
	2	・資料集の「冬」加山又造を見る ・印象の違いをワークシートに書く ・発表	・資料集を開かせる ・数名を指名	・自分なりの考えを書く ・発表を聞く	個
	3		・発表を受けまとめる		全
まとめ	5		・テーマや描き方などの違いについてと作品のメッセージ性について述べる		
	5	・感想をワークシートに書く	・今日の授業で自分なりに学習できたことや感想を記入 ・次時の予告	・自分なりの感想を書く	

「雪中の狩人」　ブリューゲル　１５６５

「冬」　加山又造　１９５７

Ⅳ 「１５歳の自画像」

１．題材の目的

自画像を描くという題材は小学校の教科書にもあり，子どもたちにとって初めての経験ではない。しかし，中３年生の教科書にもまた載っている。私が中学校の教員になったときもあったし，もっと言えば私が中学生の時にもやっぱりあった。普遍的な価値がこの題材にはあると思う。

子どもたちは中学を卒業し，初めて仲間との別れを経験する。その岐路に際してのモニュメント的な意味が昔は強かったのだろうが，現在は以下の理由によるところが大きいと思う。

自分たちの進路に不安を抱えながら日々生活する子どもたちを見るにつけ，かわいそうに思う。共通の苦しみや痛みを通して仲良くなれる子どもたちの姿がある。また，共通の痛みを通してでしか解り合えない傷ついた心もなかにはある。ここに来てこどもたちは，不安な心を互いに支え合うことで何とか乗り越えようとする知恵を獲得する。へこたれてしまいそうな弱い気持ちを精一杯の笑顔でがんばっている姿は健気である。

そんな彼らに，今一度自分という対象を見つめさせ，表現へと集中させることによって，「今の自分」を冷静に客観的に捉える眼差しと判断力を身につけさせることができるのではないだろうか。

クラスの一員としての自分がいる。家族の一員としての自分がいる。部活や少年団でがんばってきた自分もいるし，生徒会やそのほかの係活動でがんばってきた自分もいる。校外の活動や塾でのなかでの自分というのもいる。その全体を，あるいは，とりわけ深い部分をじっくり思い返させることによって，こどもたちは自分以外の存在に気づき，孤独感から解放される。そ

して最後に，自分をとりまく環境すべてを肯定的に受け入れるようになり，感謝する気持ちが次第に育ってくるように思われる。「育みたい１３の力」に当てはめると「追求する」「つなげる」「広げる」「深める」「比べる」「選び決める」「バランスをとる」「使う」「自己理解」「他者理解」「価値を感じる」等の関連が考えられる。

２．卒業制作展

できあがった作品を卒業制作展として他の作品とともに校内掲示を行う。同時に「美術科通信」を通じて各家庭にも知らせる。おもしろいのは周りからの声かけである。教師や他のクラスの子たちからあるいは後輩たちからの声かけがあり，作品としての満足度は更に高まる。卒業制作展は卒業式の当日までが会期である。卒業式当日，卒業生の父母は必ず我が子の作品を探して，確かめるように見る。この眼差しが大切である。夕食時に話題に上ってくれることを願う。　作品の返却は合格発表の日に体育館で行われる。担任の先生方のご協力もあり，全員が持って帰ってくれたことは何よりも嬉しいことであった。

まとめ

私は子どもたちの絵に何が描かれているのかに興味がある。その作品の裏側に隠されているもの，想い，願い，葛藤等，そこで何が起こっているのかを知り，生徒の日常の中で何が変化しているのかを知りたいと思う。それを知り，側にいる大人として，教師として，美術教師として，その思いを共有したいと思う。私達には，今，子どもたちの想いや願いをくみ取る，読み取る力が必要とされているし，同時にその想いを表現へと導く指導力が求められている。

学校教育における美術科の活動はややもすると，個人の資質，能力として扱われる傾向にあった。自己完結し，他の教科や領域との接点が希薄だったように感じる。そのため「分かりにくい教科」「評価が曖昧な教科」としてのレッテルを貼られてしまい，信じられないほど時数を減らされてしまった。余りにも時間を削りすぎてしまい，表現に時間をかけられなくなった分，鑑賞を充実させようという考えもあったのかもしれない。ともあれ，私たちは失われた時数を取り戻すべく行動しなければならない。そのためには「表現し伝える力」「鑑賞し読む力」を「美術によって育まれた力」として明らかにし，もっと社会や文化，情報などと積極的に結びついていく必要がある。そうすることで美術科は今以上に独自性を発揮し，教科としての信頼を回復し，「生きる力」の一側面を支える能力として広く一般に認知されることとなると考える。

提言：中学校　大　高　雅　子

研究テーマ

小さな変化でいつもの題材をもっと確かなものに

提言の概要

学校で表現することの価値について真剣に考えるようになってからずいぶん経ちます。この価値が、子供同士や子供と先生の間に確かなものとして存在できるようにしたいと思ってきました。そして今、同じ学校の先生同士の中に、さらには子供たち一人一人とつながっている多くの人の間に広がるものであるようにと考えています。確かな学びを実感できること＝指導の成果は、子供の姿や表現で確かめることができます。しかし、その子供をとりまく人々、例えば保護者にとってはどうでしょうか。また、いしかり大会の研究の柱に据えられている、確かな心や確かな力を育てたいとき、知識としてではなく、感覚の習得をめざした指導のためには、どのような工夫すればよいのでしょうか。

純粋に美術の授業が楽しくなるように、また、「いま」の表現が、少し先やずっと後にも生きてはたらく力であるように、そしてそれが子供や子供と美術教師の間だけの確信にとどまらないために、今できる小さな工夫としての授業実践を、５つの視点で提案します。

Ⅰ　ほぐす　『うちとける・やわらぐ』－教師側からのアプローチ

ライフスキル教育において、エネジャイジャーという活動があります。授業の到達目標との関わりの有無にかかわらず、「ほぐす」、「かかわる」ための活動を、導入前に用いることです。中学生という発達の過程も考慮しての取組です。元気が無い学級、研究授業などで緊張している学級の授業で行うことがあり、私もそれを実践しています。

Ⅱ　つなぐ　『一続きにする』－子供同士、子供と教師、学校と家庭へ

私は特に、同じ学年の子供たちの声や、職員室の先生の声を好んで用います。特に鑑賞の授業では、子供たちの意識を高める効果があると感じています。また、教科外の先生にとっても美術教育の存在を意識する機会の一つとなっていることを感じます。後から、子供の感じたことを尋ねてくれる先生もいました。この「一続きにする」というイメージで、今ここにいる４０人ではなく、この学校中の人と美術の関係を自然な感覚で意識できるようにしたいと思っています。また、この時期の発達の過程として、満足感が自己完結し、それを家庭で表現しない子供たちの姿も見受けられます。そこで学校の授業を家庭と一続きにすることを考えてみました。小さな取組ですが、予想以上の響き合いを実感することができました。

鑑賞　中１対話型鑑賞　「みる・かんじる・はなす」の授業導入

①同じ学年で他学級の生徒の読みを紹介する。
②担任、担任ではないが同じ学年、同じ中学校の先生の読みを紹介する。

この絵の中で何が起きているでしょう。

雪　　小河原　脩

対話型の鑑賞授業です。
作品選びは、北海道立近代美術館の学芸員の方にお願いしました。
お願いした視点は、次の３点です。
①北海道ゆかりの作品
②自然と人をテーマにした作品
③可能ならば物語性のある作品
この他、国松登など近代美術館所蔵の作品を扱った。

これは…	登山した人です。登るのに時間がかかってしまい、夜中になってしまいました。	「もう山に登ったら危ないよ。」と、さびしく話れた木々が注意しています。	2/3 ○○ ○○ さん
これは…	大きな人が雪山で遭難してるんじゃない？		
これは…	木にからまって、もがいている登山家だな。もう夕方	だから、雪穴を掘って休んで、明日朝トライするぞ。	

PPの一部です。
学年の生徒３名と職員５名の読みを紹介しました。

前時で鑑賞した作品を、自分たちと同じように楽しく想像している仲間や先生の読み・姿に触れ、共感、驚き、歓びの声があがった。顔写真があることにも起因し、効果が高まったこともある。ちなみに、紹介した中には、登山を趣味としている先生もいて、その先生の持ち味あるいは新しい一面に触れるような話しにもなった。

この授業後、生徒の感想を見せてほしいという声をかけてくれる先生もいて、私たち教師の間にこの授業が広がったことを感じることができた。

表現　**中1「かたちをまるごと感じてみよう」自己評価・相互評価**

①目標設定の段階で、制作した野菜や果物を本物に見えるように工夫させる準備をする。

②あらかじめ、本物そっくりに制作し、いたずら作戦を考え、実行するところまでを制作の一続きとすることを伝える。

③自己評価のワークシートにどのようにいたずらをするかを記入させる。

④家庭から（保護者、兄弟など）のコメントをいただく。
＊直接記入していただいても、聞き取りでも可にする。

野菜袋　パックシーラー
スーパーなどで実際に使用されている袋やテープを準備しました。

「かたちをまるごと感じてみよう」 自己評価・相互評価

1年 3組 名前 ＿＿＿＿＿＿

◆作業途中で、自分が工夫を加えたり、こだわったことがあれば書きなさい。

成形	なすびのへたがペタッとならないようにふんわりとして、緑をうえつけた。
彩色	全体として色がうすくならないように、こく着色した。

◆今回の制作全体を通しての感想を書きなさい。

成形は、自分的にはうまくできたと思います。だけど、着色の時になかなか色がちょうどいいのがよく分からなかった。それで、なすが軍の保坂さんと吉田さんとアドバイスをしあいながら「どういう色がいいのかな」という事で協力しあいました。こく着色することでかわいた時にちょうど良く色がなっていればいいです。へたの色が強くて、時間がかかった。お母さんやお父さんをうまくだますようにうまいうそをついてマーボーなすにされないです。楽しく作れました。

作戦ー 冷蔵庫に入れておいて、「マーボーなす」が食べたいとモク。

母親 から

<いただいたコメント>

ゆいはう「マーボーなすが食べたい」と言ってゆいが冷蔵庫から一個のなすを出していました。「あれ、なすさんあったっけ？ 他も一個？！」「一個しかないから、明日買ってきてあげよう」と言ったものの、あれ、あれ？？ やっぱり良く出来ていたので、騙されてしまいました。
主婦の友達にも見せて同じ様に騙して笑いました。
上手に出来ていると思います。

自己評価のワークシート
いたずら作戦といただいたコメントを記入する欄を設ける。

子供のいたずらを嬉しく思う母親の愛情を感じます。「部活の先輩からもらった」という作戦が成功。妹の声も書かれているところに、広がりが感じられる。

母　から

<いただいたコメント>夕食の食卓で、「部活の先輩からいただいたもの」と言ってテーブルの上に置きましたが、みんな気が付きませんでした。私は、はじが少し緑色だったので、隣に「緑に無しでなかったら今日は食べてみようかなぁ」と言ってみました。食事をテーブルに出すので、主人がパクッとかじりとった時、果肉の重さに「なんだこのパプリカ」と初めて気が付きびっくりしました。妹の中めに「このパプリカ、オモチャにしては高くても、食べたい！買おいて」と言っていました。

まんまとだまされた　第一発見者　母　から

<いただいたコメント>野菜室に見覚えのない（買った記憶のない）このピーマンを見つけ、まず「誰かピーマンを入れた？」と聞くも誰からも応答なし。触ると妙に堅く、色は少し古臭い。何故それにしても1個だけの早紫ぽいピーマンが残っているのか不思議に思いながらも袋をあける気にはならず、ゴミの日に捨てようとしていたところ、種明かしをされ大笑い。こんなに器用に、形良く作れることにも驚き、袋はどうやって手に入れたか等しばらく会話続きました。なかなか楽しいサプライズでした。

まんまとだまされた同時に、自分に微笑ましかけあう様子。子供制作過程を自然に語っている様子。

自分自身の作品と並べて置きたいという言葉は、美術を愛好する心がひらかれ、価値の共有がなされている。

母　から

<いただいたコメント>

学校から持ち帰って来た時は、あまり見もしないで置いて良かったねと言った時、みかんの盛ってある籠に入っていたのでビニールを外そうと思って手に取ったら、重くてエーッと思い、まじまじと見たら、友達の作った作品だったのでビックリしました。みごとに騙されました。友達の作った作品のパプリカと私の調理したパプリカを並べて置きたいと思った。

保護者からのコメントが予想以上に寄せられた。また、取組後来校された保者の方から、感想やエピソードを多くいただくことができた。中学生になって子供との距離が広がり、学校の様子が見えにくく感じている保護者の方が多い子で、この取組を嬉しく感じてくれていた。小さい窓を開くことができたことを感じている。

III みちびく 『道案内をする』ー経験を与え、子供自身に選択させる

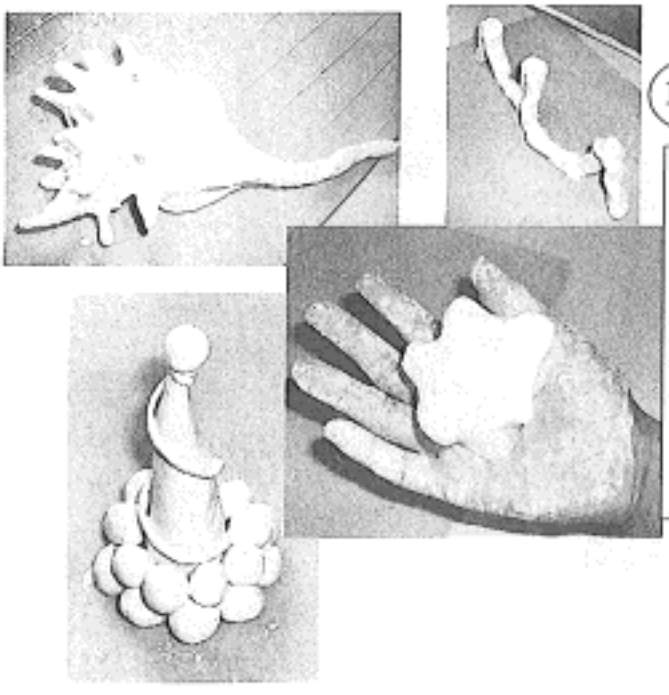
豊かに感じ表現するための基礎的な感覚を身に付けるためには、３年間を見通した効果的な題材配列が必要と考えています。しかし、時数は絶対的に少ない状況です。そこで、題材配列の系統化と合わせて、主題＝テーマにも系統性をもたせてみようと考えました。例えば「シュルレアリスムの鑑賞」から「心の中の世界を版画で表す」というようにつなげることを、３年間で考えてみようということです。まずは、人や社会生活や未来にかかわっていくことで、イメージを広げやすいという発想で、テーマを「自然」に設定しました。鑑賞題材としては、自然を意識させるために、各学年で次の題材を扱いました。

１学年　身近な地域の彫刻（サイトスペシフィック）
　　イサム・ノグチ
２学年　印象派
　　日本の美術　絵画・工芸
３学年　アントニ・ガウディ

また、各学年で抽象の概念を学習する内容を扱っています。１学年で塑造で表し、３学年では、彫造に取り組みます。抽象表現は一見難しそうに感じるかもしれませんが、思いを発信・受信する活動場面においては、広がりと深まりがあり、また、答えが一つではなく、その曖昧さを言葉や表現でつなごうとするところに面白さがあり、私は好んで扱っています。

表現　中３「抽象彫刻ー自然のイメージ」

①各学年で抽象のイメージを形にする題材を配列する。



1学年では・・・

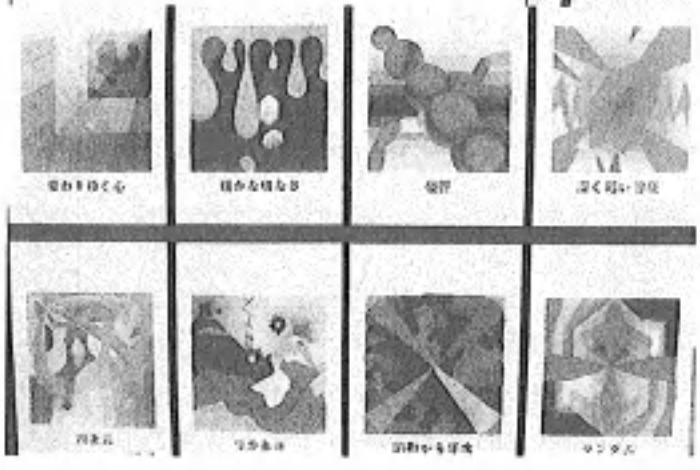
塑造
「音をかたちに」
カルミナブラーナ
もとは１０年ほど前に音楽科との横断的授業で実践した内容がきっかけとなっている。

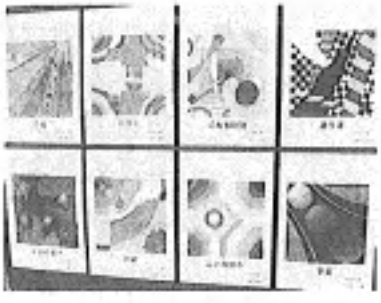
2学年では・・・

デザイン

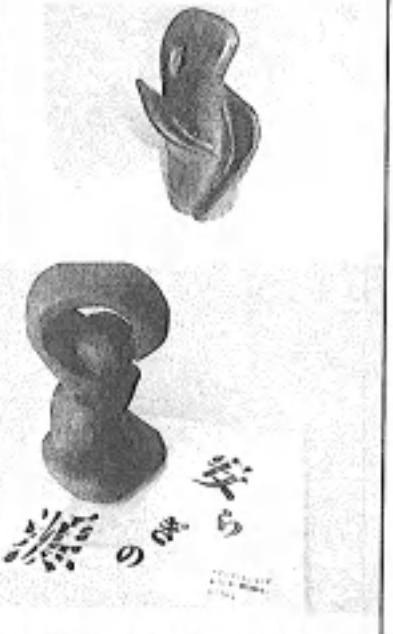
「言葉のイメージからのデザイン」

タイトルは自分に身近なことからイメージしながら、ウェビングマップの作成などで広げ、検討して決める。





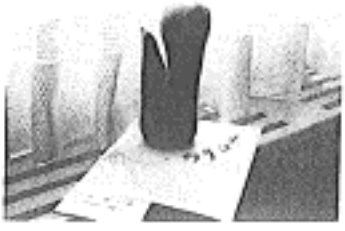
②人とかかわること、メッセージを発信する意識で表現することができるように、ワークシート等で導く。
また、表現の意図が明確になるようにタイトルカードを制作させる。



③家庭とつなぐワークシート作成のポイントを次のようにする。

◆スケッチや写真を撮る子供の姿そのものがメッセージとなること。

◆見せ方、見え方を工夫するように指導すること。



絵画　<自己評価>レポート

抽象彫刻～自然のイメージ～

①自分の彫刻作品を、家の中の最もふさわしい場所に展示する。
②展示したところと作品の全体を写真に撮り、家庭のプリンターで印刷して添付するか、絵画に注意してスケッチする。
③彫刻全体の形を鑑賞し、成果と課題を書く。
④「風」テーマで別な作品を制作するとしたら」をねらいとして、右のスペースに鉛筆のみのアイディアスケッチを描く。
⑤家族の一人に、彫刻の一行感想をもらいましょう。

展示したところ　廊下

タイトル

風源史

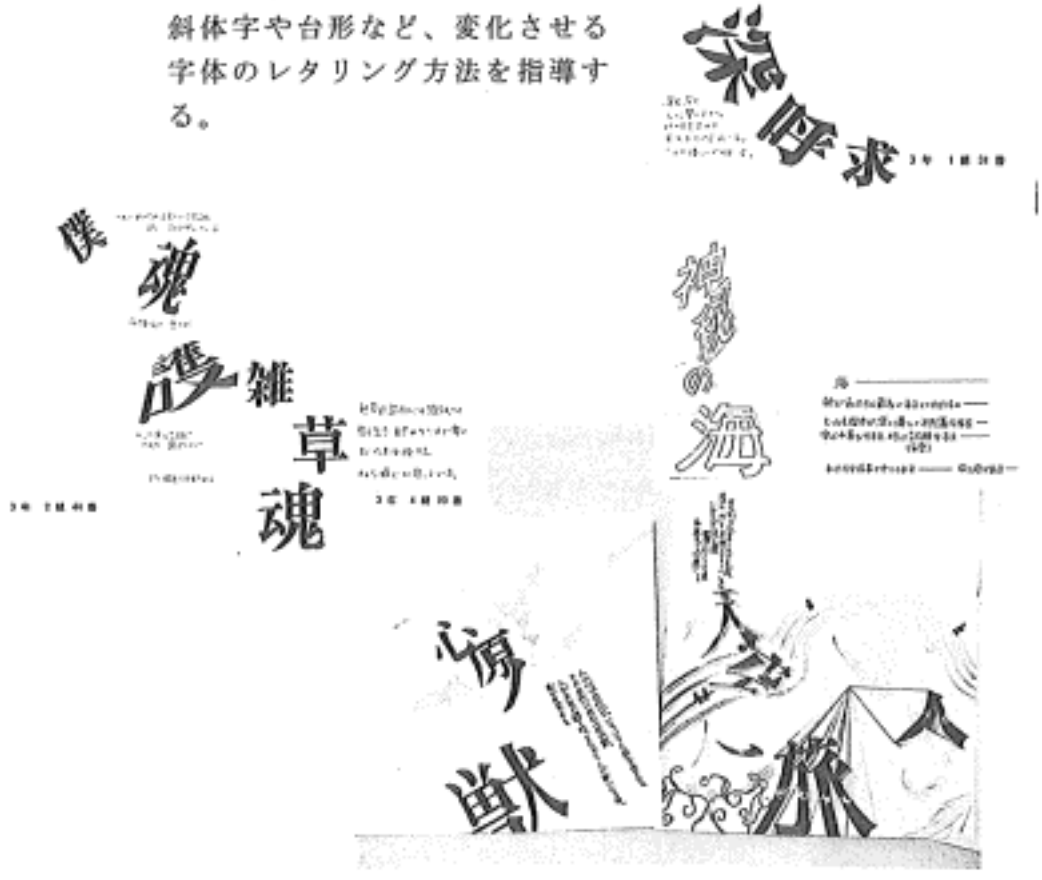
New idea

成績と課題　風源史というテマにして、風の一番の原点から風が次々さ広がってるイメージで彫刻した。練習に練習をしてみて、全体をみてみると、「風の源を」というイメージは分からなくなる形出せたかなと思った。でも、その原点から勢いよく風が次々でているイメージが少しちがったと思い、もう少し勢いのあるイメージにするのが課題になる…と思った。

母　から　風の原点というイメージは、むずかしいがこれから広がっていく感じが出ているかな…？と思います。

3年　2組　41番

３年間のレタリング学習の集大成も兼ね、カードを制作する。斜体字や台形など、変化させる字体のレタリング方法を指導する。



タイトル文字の他に、メッセージを入れるように指導する。
作品に込めた思いを、詩や散文で表すことにより、作品の存在感が強くなる。

子供たちが、家に何やら物体を持ち帰り、夢中になって置き場所を探している様子が見える、そこに自然に会話が生まれることもあれば、生まれないこともこともある。しかし、その姿で十分伝わるものがあったことは言うまでもない。
また、今回のレポートは、同じテーマで違う作品を制作したら・・・という課題も付加した。これで終わりではない、実際に制作することはできないが、課題をもたせ、広げて終わることも面白い。

Ⅳ ささえる

『粘りづよく取り組ませる』 － 時間を惜しまず親身になって援助する。

感じて表そうとするとき、子供は一人一人違うところで立ち止まり、考え悩みます。教師はその時、見守り、助言し、自ら答えを導き出せるように支援します。

表現 **中２「言葉のイメージによるデザイン」のレイアウト**

①動きや奥行きなど、レイアウトの技をポイントを絞って指導し、その要素を活用しながら描くように指導する。

②アイディアスケッチの途中経過を提出させ、アドバイスを書く。時間がかかる作業だが、B 規準に到達していない生徒の意欲喚起には効果大である。

アイディアスケッチ
途中経過を提出する。
全員に２回ずつコメントを書く。

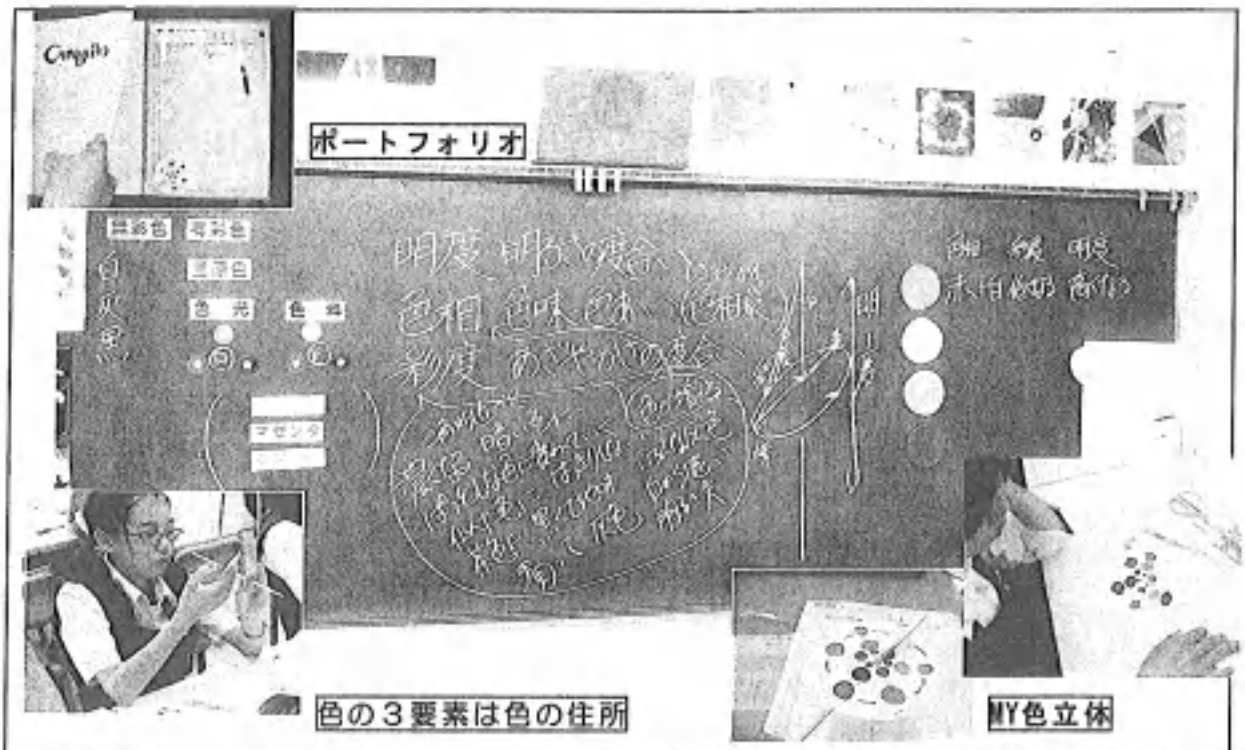
V はなす　『つないだものを解く　わたす』　－　見守る、気づかせる

「感性豊かに表現するための基礎的感覚を育てる指導の工夫」という研究主題を、教科の校内研究テーマとして設定しています。感覚を育てるという指導はどのようなものでしょうか。感覚は、知識とは違って、自ら体験的に得たこととして、忘れずに残るものではないかと考えます。中学校を卒業しても、知識ではなく感覚として覚えていれば、より強く生きてはたらく力につながるのではないでしょうか。そこで、これまで知識的な理解が中心となっていた「色の学習」で知識として指導する用語を最小限におさえ、感覚で色をとらえる学習ができないかと考えました。知識の暗記によって色の分類をするのでなく、明るい－暗い、鮮やか－鈍い、目立つ組み合わせ・・・といった感覚を体験し、そこに意味や名称を付加するという指導です。

表現　中１「色の整理」

①色の学習に際して、覚える言葉を「有彩色・無彩色」、３要素、３原色に絞る。

②色に関する学習内容を記入するプリントと、自分で制作した色立体をファイリング（ポートフォリオ化）させ、３年間の学習の中で、配色に関する検討場面などで書き足したり、使用したりできるようにする。



例えば色の三要素が明度、彩度、色相であるとか、鮮やかさの度合いが彩度であるというように、これまでは指導してきた。色に関する知識＝用語は子供にとって「覚えること」である。しかし、明度は明るさの度合いでつかめるが、彩度はどうだろうか。青と白の混色でできた水色は青より明度が高くなるが、彩度は低くなる。この彩度と明度の関係を別々に覚えることは難しい。そこで、「MY 色立体」の制作を考えた。「この色はどこにあるのだろうか。」という発問を基本に、３年間の学習であらゆる要素をつかめるように指導したい。この取組ははじめたばかりである。

まとめ

札幌市の教育研究推進事業の美術科の会議で出された資料の中に、市内の美術教員の年齢構成を示した表がありました。市内およそ１００校で、２０代３名、３０代は２０名でした。私は今年で勤続１９年目を迎えます。まだまだ知りたいことがたくさんあります。きちんと教える時も、新しい題材の窓を開く時も、詳細に分かっていることが大事だと思うのです。しかし、１校１名配置の時代。忙しさの中で、先輩の先生に聞きに行くこともままならない毎日です。

今回のいしかり大会は、“新しい美術”を求めてきたこの１０年を一区切りとして、次のステージへ向けて、もう一度“ちゃんと”を交流しましょうという大会で、それは素晴らしい視点だと感じています。新学習指導要領の共通事項からも、自ら広げたり、膨らませる力をつけることを大切にしていることが分かります。

本提言の最後の項目にあげた「はなす」が、私が３年間の指導で大切にしていることです。授業で出会った子供たちが、私の手を離れてからも、美しさに鋭く反応し、こだわって表現しようとする感性を発揮してくれることを願っています。

提言：中学校　佐　藤　博　行

研究テーマ

「自己表現の模索を通して」

提言の概要

「自分が何をつくりたいのか」そのことを真剣に考え、作品の表現に取り入れることは実は大変難しいことだと思う。自分という存在を再確認しながら、その模索(葛藤)の中で「新たな発見」や「自己の発達」があるのだと感じる。作品をつくるとき、スムーズにドンドン制作を進める生徒と、なかなか作業の進まない生徒がいる。スムーズに作品づくりが進むほうが良いように思われがちだが、どちらも「真剣に作品づくりと向き合っているならばよし」としたい。作品の完成は、生徒(作者)が決定するのであって、教師が決めるものではない。制作途中のように見える作品でも生徒の中で表現が完結しているならば、無理に続きを強要すべきではないと考える。

自分を語ることのできる「環境」(授業の雰囲気、教師と生徒との人間関係)も重要だと感じる。目の前にいる生身の生徒が一番大切。そのことを肝に銘じ、同じ教材であってもクラスによって適切に対応できる状況をつくっていきたい。

Ⅰ　プライベート・マーク(自分のシンボルマーク)

1　題材の中で育みたい力

評価の観点	育みたい力	具体的な場面
関心 意欲 態度	1 楽しむ	・制作から鑑賞までを通して楽しむ。
	2 追求する	・自分というものの表現を模索し、追求する。
	3 つなげる	・マークの特徴を知り、制作へとつなげる。
発想・構想の力	4 広げる	・単純化や強調などの発想から考えを広げる。
	5 深める	・特徴を考え、マークとするために考えを深める。
	6 見通す	・画用紙の特性も考え、見通しを持って制作する。
つくりあげる力	7 比べる	・色や形を比べ、自分の表現にする。
	8 選び、決める	・マークとして、自分らしい表現を決定する。
	9 バランスをとる	・全体としての統一感を考え、バランスをとる。
	10 使う	・カッターなどの特質を知り、使い方を覚える。
鑑賞の力	11 感じとる	・自分、他者の作品から新たな表現を感じとる。
	12 自己理解	・特徴をあげ、表現することで自己理解をする。
	13 他者理解	・他者の作品の工夫を含めた、他者理解をする。

2　題材との出会い①（題材設定の理由）

2年生のはじめに行っている題材である。クラス替えを行った直後の2年生のはじめなので、自己紹介を兼ねて、自分のマークをつくり、みんなで鑑賞しあう授業を行っている。作品は色画用紙を使い、切り貼りしてマークとして完成させる。作品説明を書いた台紙に作品をはり、展示もする。特別に鑑賞の時間を設定はしないが、生徒は進んで級友の作品を見ている。他人に見てもらうことが前提の自己表現なので、相手に伝わるデザインにすることが重要だと指導している。相手に伝わるにはどのようにしたらよいか。生徒は試行錯誤しながら、時には級友と相談しながら作品を完成させる。

3　題材との出会い②（導入）

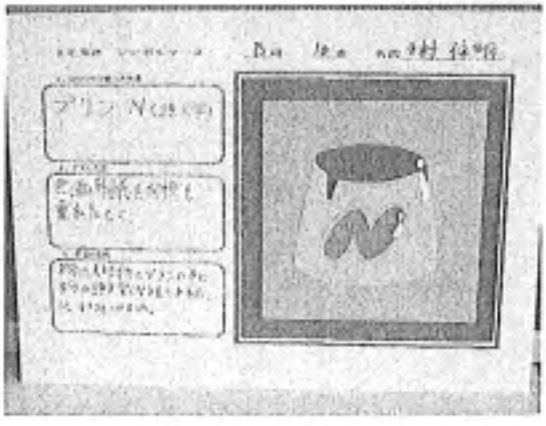
教師の第一声目：「2年生になってクラス替えがあって、同じクラスになった人でも今まであまり知らなかったメンバーも多いよなぁ～・・・知らない顔は無いけれど、性格とか細かいところは分からない、そんな人が多いはず。そこで・・・今回の作品は自己紹介も兼ねて自分専用のマークをつくって、みんなに見てもらいます。」このとき生徒からは「なんとなくどんなことをやるのかは分かったけど・・・どんな感じの作品になるのだろう？そもそもマークってどんなものだっけ？」といったような呟きが多く聞こえる。そこで「じゃー実際に使われているマークにはどのようなものがあるか、資料集で見てみよう」と続ける。世の中に出回っている多くのマークを見て「ああ～あれがマークか・・」という感じになる。生徒が実感をもてたところで「では、自分という人間がどういう人間か？まず、紙にドンドン特徴を書いていってみよう」と続ける。すぐに5個も6個も自分の特徴をあげることのできる生徒もいれば、1つもあげられずに考え込んでいる生徒も出てくる。そのような時には「好きな食べ物」「入っている部活」「背が高い」「えくぼができる」等々・・・とにかく、まずは自分の特徴を次々に挙げることを強調し伝える。ここで注意したい事は「長所ではなく、特徴である」ということ。生徒の中には「自分の良いところ」を一生懸命に考え悩んでしまう場合もある。「特徴だから何でもいいんだよ、例えば・・・赤い色が好き・・・とか。」などと、具体的な例を始めに教師側から提示することが重要だと思う。

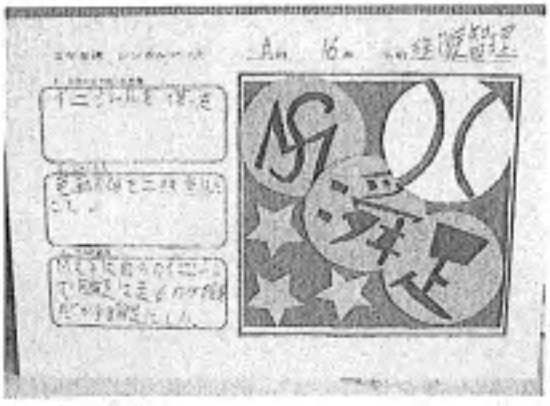
題材との出会いは生徒の興味関心をうまく引き、かつ十分に内容の分かるものにしなければならない。「具体的な内容を提示すること」「身近な内容であること」そして「興味関心を引けるような教師の演出」が重要であると感じている。

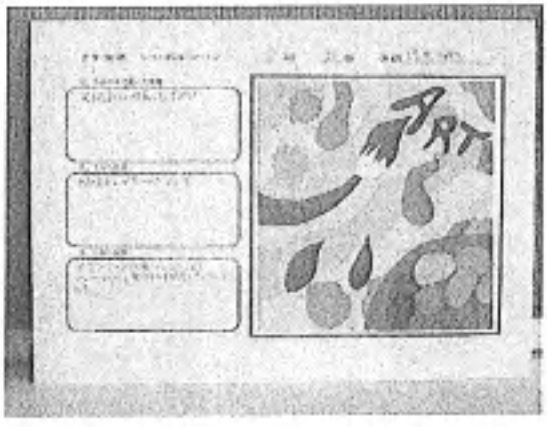
4　展　開

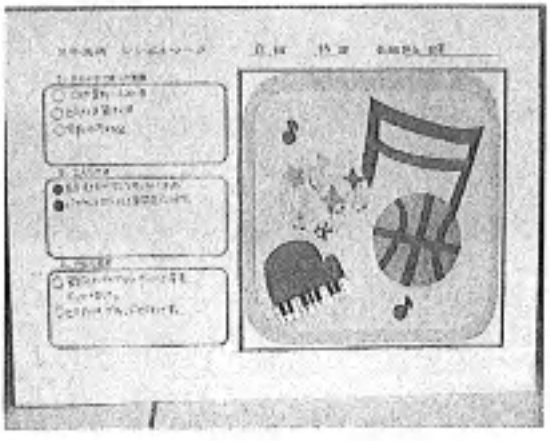
導入であげた自分の特徴の中から自分らしさが良く現れていると思うもの３～４個を組み合わせてマークとしての下がきを描く。このとき、マークとしての表現なので「強調」や「省略」・「単純化」・「リピテーション」・「文字を使ったデザイン」などの表現方法があることを伝える。同時に「マークを見た人が誰だか分かるマークにすることも重要だよ」と付け加える。ここは特に強調して伝えるようにしている。このとき生徒は自分に必要な表現を模索しながら、自分という人間をどのように相手に知らせるか真剣に考える。下書きを隣の生徒に見せて「どう？おれだって分かる？」と聞いたり「私ってどういう人間？」と尋ねたり・・・このような時間も制作と同等に、大切な時間である。生徒同士の会話の中から、新たな自分の発見や、思わぬ表現との出会いがあるからである。

下がきが決定したら、作品の完成へと作業を進めていく。作品は色画用紙で切り貼りしてシンボルマークとして完成させる。「単純化」や「色の強調」など、色画用紙の長所をうまく活用できるような指導を心がけている。作品の台紙には「自分の中で使った特徴」「工夫した点」「作品の説明」を書けるようにしている。









作品の展示のあとに面白いと感じることは、すでに名前が書かれているのに「この作品〇〇のでか？」とか「これ〇〇ちゃんかな？」などといいながら作品を見ていることである。「当たった」「はずれた」「え～なんであれが？？？」「なるほど～・・・」などと言いながら展示作品を見ている。特別に鑑賞の時間として設定した時間ではないが、よい鑑賞の時間になっていると感じている。この題材が生徒のコミュニケーションの向上にも役立っていることを、願ってやまない。

5　成果と課題

この題材のあと、クラス内での生徒との会話やコミュニケーションが活発になったと感じる。それはクラスメイトの意外な一面（ギターを使ったマークをつくった生徒に、え～○○君ってギター弾くの？・・・などである）を知ることができ、生徒同士の会話が増え、他者理解につながっているからであろう。授業での学級の様子も、以前より打ち解けた雰囲気がある。2 年生初めの自己紹介として、大きな意味を持っている題材だと感じている。カッターやカッター板、ハサミやのりなどの用具の使い方を再確認できる点も大きい。特にカッターなどは「危ない」という理由から小学校の時には使ったことがないという生徒も多くなっている。安全面を十分に考慮し、正しい使い方をしっかり指導したい。

課題としては「色画用紙の種類の制限」がある。可能な範囲で、色をそろえたつもりだったが「もう少し濃い青がほしい」とか「あと少し黒味がかった赤があればなぁ・・・」という生徒の声は数多くあった。生徒の表現欲求を十分に満たしてあげられなかったことはとても残念である。色の種類がそろっているという観点から「トーナルカラー」の使用なども考えたが、のり付けのとき丸まってしまったり、下地の色が透けてしまうような欠点もあり、画用紙を使うことにした。安価でより良い素材があれば、ぜひ教えていただきたい。

Ⅱ クラスみんなで街づくり（理想の家づくり）

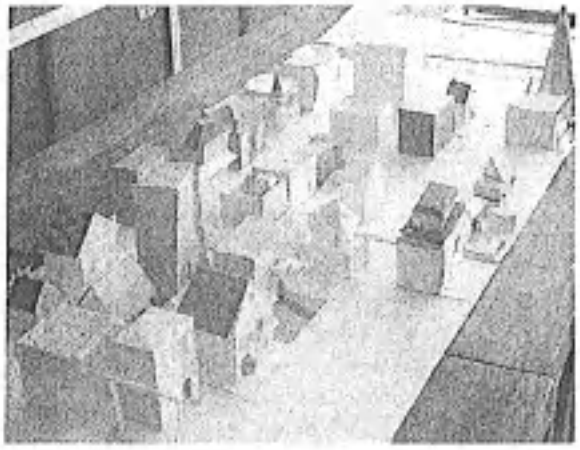
1　題材の中で育みたい力

評価の観点	育みたい力	具体的な場面
関心 意欲 態度	1 楽しむ	・制作から完成(鑑賞)までを通して楽しむ。
	2 追求する	・自分のしたい表現を模索し追求する。
	3 つなげる	・用具の使い方などを理解し、制作につなげる。
発想・構想の力	4 広げる	・新しい発想やアイデアを広げ、家づくりをする。
	5 深める	・自分の理想の家実現のために考えを深める。
	6 見通す	・用具の使い方や材質の特質も考え、見通しを持って制作する。
つくりあげる力	7 比べる	・自分の理想の家に近づけるように比較検討する。
	8 選び、決める	・色や形など、自分の家にあったデザインを決定する。
	9 バランスをとる	・全体としての統一感を考え、バランスをとる。
	10 使う	・用具の使い方や材質の特質も考え使う。
鑑賞の力	11 感じとる	・自分、他者の作品から新たな表現を感じとる。
	12 自己理解	・理想の家を考えることで、自己理解をする。
	13 他者理解	・他者の作品の工夫を含めた、他者理解をする。

2　題材との出会い①（題材設定の理由）

小学校、中学校の時代を問わず、誰しも一度は「こんな家に住んでみたい」とか「家を建てるとしたらこうしたい」などと考えるのではないだろうか。幼いときの「屋根裏部屋の地図づくり」や「森山の秘密基地づくり」のような、ドキドキわくわく感がこの題材にはある。「ああしてみたい」「こうしてみたい」という、自己実現を満たすためにはよい題材だと感じる。しかし、ただ単に「面白い」だけでは題材としての方向性が薄れてしまう。ここで大切にしたいことは生徒一人ひとりの「こだわり」である。「玄関に石段をつけ、開閉式のドアをつくったり」「庭に池をつくり、鯉を泳がせたり」・・・それぞれの表現の中で、他人の家にはない「こだわりの部分」（他の人に自慢できるような部分）を必ず入れるように指導している。このことが、表現の深まりにも通じ、生徒一人ひとりの表現の幅を広げることになる。本物と同じようにつくることに執着する生徒もいれば、実際にはありえない家の構造的工夫をする生徒もいる。楽しむばかりではなく、追求し発想を広げる題材となっていると感じている。無理なく自然な授業の流れの中で、楽しみを追求し、発想の広がりや深まりが生まれる授業を展開していきたい。

3　題材との出会い②（導入）

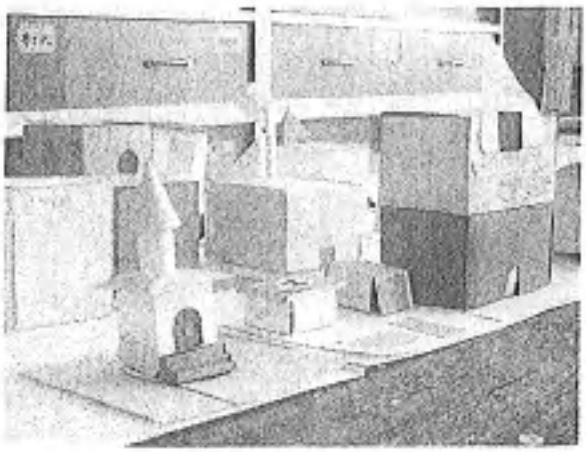


みんなの家を並べて「街」をつくりました

１年生の最後に行っている題材である。「1年の最後にクラスみんなで協力して１つのものをつくろう。」と呼びかけてこの題材を始めている。まず自分が街のどの場所に家を建てるか決める。このとき、街全体のバランスや隣近所の家の様子も考え、自分の家を決定するように話をしている。例えば「街が全部魚屋だったら変だよな？だってそれじゃー、客がいないもんな」などの呼びかけをしている。そのことも踏まえ、生徒は自分の家を決定していく、クラスみんなで話し合いながら、徐々に個々の家が決定していくのである。これによってそれぞれが役割を担い制作意欲が増しているように感じる。

4　展　開

「こだわり」を持って制作している



「協会」や「おにぎり屋」など個性的な家が並ぶ

導入のあと、自分の住んでみたい家を考える。（理想の家）作業はまずそこからスタートする。自分の住みたい家を考えるのだから「自分とはどういう人間か」を考える必要がある。本好きの生徒の家(作品)には本棚がいたるところにあり、車好きの生徒の家(作品)の庭には駐車場があり車が止まっている。そして、自分が好きなものや、どうしても家に取り入れたい部分には、生徒一人ひとりの「こだわり」がうまれてくる。「玄関に石段をつけ、開閉式のドアをつくったり」「庭に池をつくり、鯉を泳がせたり」する。実は、このことがもう一つの重要な部分だと考えている。作品に愛情を注ぎ、手間暇をかけて真剣に取り組んだ作品は決して捨てることはできない。他人の作品にはない「こだわり」の部分は自分の誇りのような意味合いを持っているのではないだろうか。この「こだわり」が生徒の「追求心」や「探究心」につながっている。完成した家はきちんと並べ、街として完成させて最後に写真撮影をする。一つ、また一つと家が並び、街並みが出来上がっていく様子を見ている生徒の目は、きらきら輝いて見える。

5　成果と課題

生徒が興味関心を持って意欲的に取り組む題材である。熱中して作業に取り組み「一日中この授業でもいい！！」と言う生徒が何人もいる。「給食時間が待ち遠しくないのは久しぶりだ。」と言っていた生徒もいた。

私がこの題材で大切にしたいのは生徒の「探究心」や「追求心」である。家づくりの最中に作品の表情は刻々と変化する。それは「周りの作品からの刺激」だったり「自分の制作活動中に出てくる新たな発想」によるものである。このような「新たな芽」を大切に育てていきたい。生徒の「小さなサイン」を見逃さないこと、そして「表現を実現させるための十分な用具の準備」が大切だと感じる。

生徒に対する謙虚な姿勢を忘れず、心を育てる授業を展開していきたい。そのためには、今目の前にいる生徒の実態を十分に理解することが必要ではないだろうか。生徒と教師の関係は学校事情や、その時の学年の雰囲気、毎日の人間関係などで大きく変化する。そしてそれによって、題材の指導方法や発言を大きく変える必要があると今回の提言をきっかけに改めて実感させられた。

Ⅲ　まとめ

自己表現とは「自分を表現する」という意味合いだけではなく「自分なりの表現をする」という意味も持っている。つまり「自己表現」とは「自己の表現したい部分（内容）」と「表現する方法」とを表している。この模索の中で、自分を見つめなおし、客観的に物事を見る目や、表現方法としての「美術的ひらめき（深める力）」や「つくりあげる力」が培われていく。

今回提案した題材は「自己表現の模索」の中から生まれてくる「気づき」や「発見」「成長」をテーマにした。つたない実践で新しい発想も感じられないかもしれないが、誰にでもできるシンプルな実践を提案したつもりである。先生たちの日常の実践見直しに、少しでも力になれれば幸いと考えている。

「作品は生徒の鏡」と言うような言葉を耳にしたことがある。自己表現という意味では確かにそのように捉えるのが一般的だ。「生徒たちの絵に何が描かれているのか」「その作品は何を表現したものなのか」・・・「内面に隠されているもの」つまり「想いや」「願い」「悩み」「葛藤」などが作品には表現されている。しかし、表現の方法は生徒によって大きく異なる。「描かないのもまた自己表現」と言う話も聞いたことがある。生徒の表現方法の仕方を、大きな目で見据えていくと「描かないのもまた自己表現」となるのだろうが、「描かない」と「描けない」とでは大きく意味が異なる。生徒が「描けない」と言っているとき、多くは「描かない」状態でいることが多い。もっと言うと「私は絵が下手だから、みんな(先生)の前では絵を描きたくない」という状態である。これを「表現」と捉えるか否かは大きな疑問であるが、そのような状況を作り出さないための「教材づくり」「授業の雰囲気」や「教師と生徒との人間関係」は重要ではないだろうか。（美術教育における「環境」の大切さ）「教師」として生徒の前に立つ前に「魅力ある人間」として生徒との関わりを大切にしていきたい。

≪今回の題材で使用したワークシート≫

２年美術　シンボルマーク　　＿＿組　＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

1、自分の中で使った特徴

2、工夫した点

3、作品の説明

1年生　美術　クラスみんなで町づくり

＿＿組　名前＿＿＿＿＿＿

1、自分の家はどこ？

1丁目			2丁目			3丁目		
1	2	3	1	2	3	1	2	3
4	5	6	4	5	6	4	5	6
7	8	9	7	8	9	7	8	9
10	11	12	10	11	12	10	11	12

① 左の図の自分の家に色をぬろう。

② 自分の家の住所を書こう。

＿＿年＿＿組＿＿丁目＿＿＿＿番地

2、あなたの家はどんな家ですか？（一戸の家・ハイツ・八百屋・本屋・・・など）

3、外観はどのような感じですか？（2階建て・屋根・窓・大小屋がある・・・など）

4、どんな家か絵に描いてみよう！！

提言:中学校　井上哲義

研究テーマ

自己実現に向けた、表現活動における指導の工夫
表現活動を支える鑑賞の工夫

提言の概要

子どもが絵に希望を託し、意欲を持って楽しく表現する力を身に付けさせることは、我々の永遠の課題である。どのようにしたら、自由で伸び伸びとした発想が生まれてくるのか、又生み出すことが出来るのか、常に暗中模索を繰り返しながら指導に当たっているところです。

本提言は、表現題材２点と美術部の共同制作のあり方について、作品展示のあり方、普段から美術教育に思うことを発表したいと思います。自分自身毎日が、新しい発見と反省の連続であり、悩み苦しみ迷いながら指導に当たっている所です。この機会に多くの方から意見をいただき、子供たちが自分らしく、生き生きと表現できる、成長できる、これからの美術教育のあり方を探っていきたいと考えています。

Ⅰ　表現活動・・・個人としての活動（積み上げの大切さ）

今日の日本において、アートの教育は学校のカリキュラムの末端へとおしやられ、大幅な授業時間の削減や表現力の低下など、美術教育そのものの存続が危ぶまれている。いまこそアートの教育的意義を再発見し、再確認することが緊急の課題であると思われる。日本各地で子どものためのアートが見直されてきている。教育の状況もめざましく変わりつつあり、学力向上をめざす反面、物を見る目、物を創造する力、根気強い制作力などが欠落してきているように思う。

子どもたちに、今必要なものはいったい何だろう。子どもを理解する最上の方法とは何だろう。情報が豊富にあり、言葉は知っているが中味を知らない。与えられた事は、難なくこなすが、自分から創造豊かに発想する力は益々貧困になりつつある。『脱描画』といわれ、じっくり物を見て、時間をかけて描く行為が少なくなり、「先生描けません。」という生徒も増えてきている昨今、美術の中で育てる人間としての原点を見直し、子どものためのアート教育を探っていきたいと思う。今回の大会でも、子どもが今何を考えているのか、心の中で何が起こっているのか、どんな発言やつぶやきがあるのか、教師はどのような立場で子供に目を向け、創造の目を開かせていくのか、私たちの受信力をどう付けていくのかが大きなキーワードとなっている。

子どもから学ぶこと→発想力・構想力・創造性

人生の真実→創造的精神

リアルな環境

子ども自らの手と心と想像力で行ったことは、その子どもの生活の唯一のリアリティである。人間は木であり、芸術は木の果実である。

アートとは、絵画に含まれる（遊び）と作業（WORK）と自己修養によって、子どもの魂をゆさぶり解放し、成長させることである。　　フローレンス・ケイン

日頃の実践の積み重ねの大切さ　美術による教育(Education Through Art)

一年生が入学すると、間もなく５分間クロッキーが開始される。(手・物・友達など)毎時間繰り返し行う。習慣化し、挨拶が終わると自然に手を動かし、頭と連動させながらスケッチブックに自分の考えを埋めていく。終わると毎時間感想を入れる。制作の元になる基礎基本の定着を図るため、どの学年も取り組んでいる。毎回課題をこちら側から与えているが、光を求める手・水をすくう手・バトンを渡す手などの『手』には光やみずやバトンを入れて描く生徒が多くなった。マンネリを防ぐために教師側で色々な工夫を凝らし実践している。最初は好きだったのかわからないが、ある時をきっかけに描写力が目覚ましく成長する生徒、少しずつ成長する生徒、最初と変わらない生徒、前より下手になったと感じる生徒と千差万別だが、様々な題材や課題の作品に、影響を与えているのは確かであると思う。描くことによって、続けて描くことが苦にならなくなる。描くことが楽しくなる。描くことが気持ちよくなる。そんな生徒の後押しをしていかなければならない。デッサン力が付くのは**毎日の積み重ね**によるところが大きい。子どもの気持ちを引き出すこと、励ますこと、教師の気持ちを伝えることが最も大切であろう。絵を描かせるとき、子どもの心からわき上がるやる気を引き出す力(元を動かす)が必要である。うまく描きたいなあと思える気持ちを大切(エネルギー)にさせ、それぞれの子供たちが持っている爆発的な力のお手伝いをする役割である。出来上がった作品を『いいよね・凄いね』と言ってほめてやれる指導者(受信者)としての、力を身に付けたいものである。

◎指導者としての役目

・いま生徒が**描きたいと思っていることを表現させてやること。**
・何を描きたいのか見極めてあげる。
・何をねらっているのか。
・何で困っているのか。
・未熟な制作力や色の重ね方などなど・・・技法指導
・自分の苦労話・・・幼少期～青年期などの自分を振り返り、今の生徒の心を揺さぶる。ただ描かせて出来た作品ではなく、積み重ねで絵は出来上がっていく。(成長していく)

教師自身が高まらない限り、子どもも生徒も動かない。

↓

未熟な絵でも、考えたように描けた絵は満足感がある。

小綺麗な絵は、旨くても満足感はなく、到達点に達したとはいえない。

↓

最後に作品が完成した時

『あっー』と、生徒が揺さぶられ**教師も生徒も満足したとき**(満足感・達成感)

『おおーここまでいけたのか』という精神的な高まり(到達感・カタルシス)

↓

描くことの原点は、自分を見つめること(描こうとする思い)

色々な題材の中で、作品を作らせていくということは、生徒達が何を描きたいか、作りたいかを見極めてやること。(やってみたい・こうしたい・価値を感じる)

↓

真摯に絵に向かっているか・・・・絵に表れる。

悩み・苦しみ・喜び・疑問・葛藤・失敗の積み重ねが作品をより深くする。

自画像を描く

『ありのままの自分を描く（自分のいる風景）・・・３年生』

美術には、制作者としてだけでなく、鑑賞者や理解者としての関わり方がある。

中学２年生頃から高等学校にかけては、心身ともに大きく大人の階段を駆け上る時期であり、自分との葛藤を迎えることになる。人生とは何か、真実とは何か、自分とは何か、自己の世界観や人生観を形成しながら、自立への意欲と希望を持つ時期でもある。久しぶりに自画像制作を３年生の始めに設定した。この時期に自己を見つめることの大切さと題材設定の意義を痛感したからである。美術教育は心の扉を開き、自分の世界にある可能性を大きく開花させるエキサイティングな手段であるべきある。しかし、多くの場合はそうではなく、埋もれたまま開花しないで放置されている。従って、学校で教えている美術科には特別な責任があると思わずにはいられない。ありのままの自分を素直に表現させたいし、今ある自分の姿や背景となる空間(自分の触れている世界)を自分の構想力で自由に表現することの大切さを感じここに設定した。今回は自分そっくりな肖像画を描くことではなく、肩の力を抜き、『今ここ』の自分に触れてほしいという思いを強く抱き設定した。自分にアタックする気持ち、自分にタッチする気持ちで、素直に描き上げていってほしいし、ありのままの自分（今ある自分）を知ることが、自己理解・他者理解にも繋がっていくと考えた。画用紙も自由に選ばせた。構成や人物の大きさ、背景に何を入れるかも自由選択とした。当然、モダンテクニックやコラージュ、フォトモンタージュなどもOKとした。自分を取り巻く世界をイマジネーションで埋めてほしかったからだ。４月当初、鏡を用意し、自画像を描くと言うことを生徒におろしたところ、予想通りの反応が返ってきた。『描きたくない。』『先生やめましょう。』『自分を描くなんてきもイ。』『先生、僕描けません。』『先生、私、自分を描くのが苦手です。』予想通りの答えに愕然としましたが、もっと気楽に自分と向き合うようにと指示を出し、旨く描こうとしなくてもいい、いまある自分の力で表現しなさいと言いました。そして、全員でスケッチブックに、眉毛、目、鼻、口をかき始めスタートした。途中、『先生、目がかけません。』『先生、口がかけません。』と生徒達が言ってくるので、今回は、『先生はノータッチでいこうと思っています。』と言った。いつもなら、どれどれといって描いてあげているのだが、『今回は、全員の絵が自分の思いで描かれた作品となってほしいこと、自分を見つめる葛藤の場面となってほしいこと、先生が意図した作品ではなく、自由に描いてほしいこと』を、生徒に話すと、描けない生徒も鏡と葛藤しながら、しかたなく何とか自分を描き上げている。可哀想だが自分に鞭を入れ、助言者に徹することを自分にも生徒にも誓った。今は好きな画用紙に下絵を終えた生徒が、着彩に入っているところ。『先生、背景に色画用紙を使ってもいいですか。』『先生、技法は何を使ってもいいですか。』『いいよ。自分の思ったようにやってごらん。』いいぞ、何か面白くなってきたぞ。がんばれ。頑張れ。なぜ今、自画像が必要だったのか。適時性はあるのか。こちらは思っていても生徒はちっとも思っちゃいないかもしれない。しかし、こんな時期だからなおさら必要だ。正しい。今が最も輝いている旬な時だからと自分に言い聞かせ進めている。

教師がやる気や達成感がなければ、生徒はついてこない。

・与えるべき適切な投げかけの言葉・・・いつ・どこで・どのような言葉を
・先の見通し・・・この絵はこのあとどうなっていくのか。(見通し)
・評価のあり方(自己評価・他者評価のあり方・感想文の大切さ)(ラベル作り)
見る人を意識して、自分の作品が旨く相手に届くように、努力したところ、工夫したところなどを配慮しながら、メッセージを相手に伝える気持ちで感想を書く。
・**ありのままの自分とは**・・・・・自分のいる風景(自分がまさにそこで生きている。)

この中学3年という時期に、真摯に自分と向き合う大切さを知ってほしい。自分を取り巻く世界の中で、『今ここ』をどんなものにテーマを絞っていくのか、背景となる後ろの風景・空間をどう構築していくのか、生徒との対話の中から深めていきたい。テーマを絞っても、生徒それぞれの感性は違うし、表現しようとする観点も多種多様な物となる。当然、それぞれの思いがあるからである。髪や肌の色に重点を置く生徒、目の眼球までも丁寧に描こうとする生徒、背景にウエイトを置いて描き始める生徒、骨の中まで描こうとする生徒、どれに絞って描き進めるかが大きなポイントを握っている。自画像を描かせる時、そんな一人ひとりの**自分を高めたい、こう表現したい**と言う気持ちを大切にして制作に向かわせていく方法論をとった。

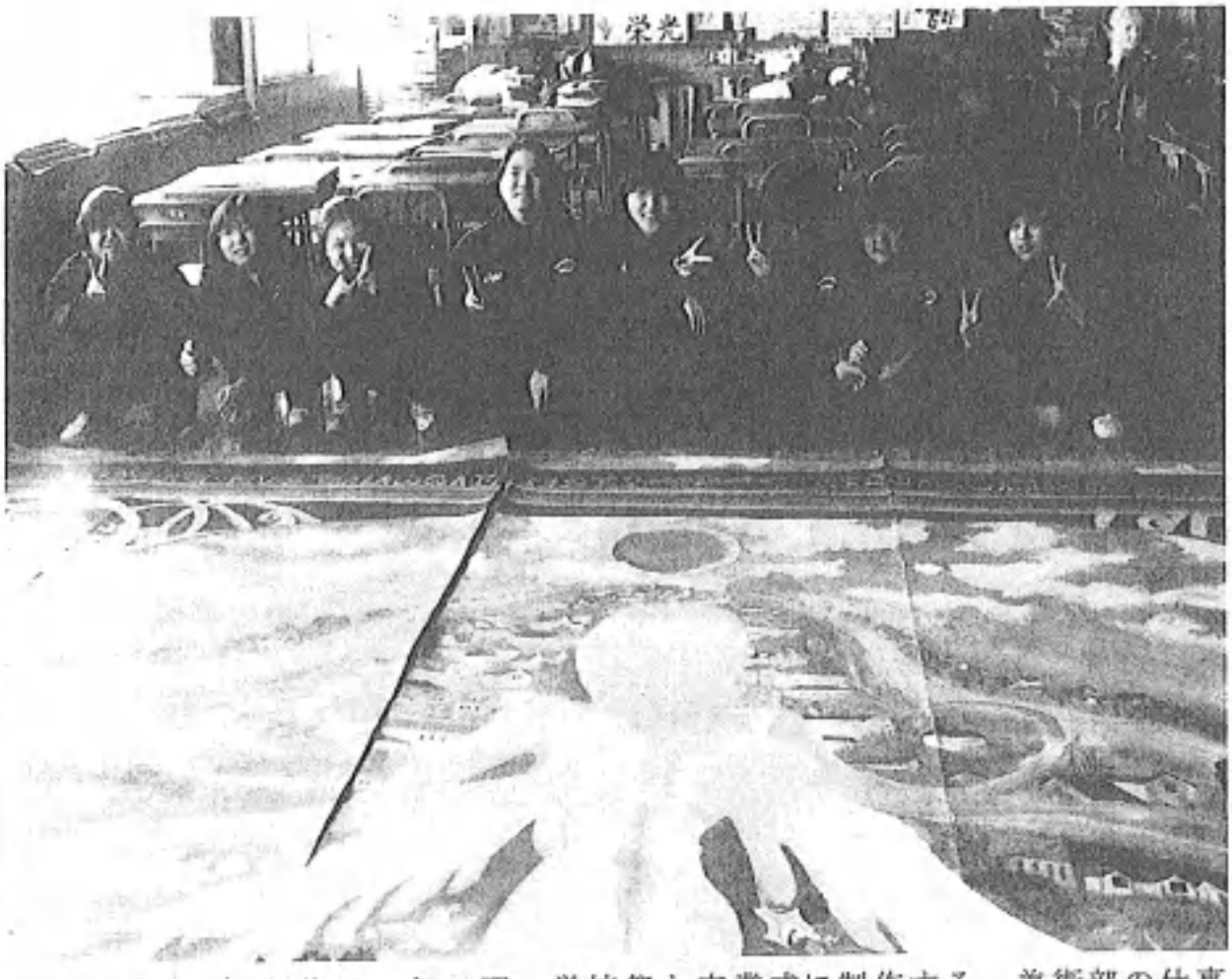
自分を描くということ・・・・・自分という存在を求めること
・自分のありかを探し描くと言うこと。・・・人との関わり・自分との関わりの中で
・自分のいる場所(今現在どうなっているのか)・・・世界・日本・地域・自然・家庭
・自分というものをもっと知っていく→自己変革・自己実現・自己理解・他者理解
・自分の内面に目を向ける→混沌としたものとのつきあい方を学び、そのつど新たな自己が創造されていく。(新たな自分を発見し、創造し進化していく。)
・描き方のアドバイスは、自分の『今ここ』を大切に、細部にこだわることなく大胆に表現しなさい。伸び伸びとした線で今の自分を描きなさい。背景は自分を表現する重要な要素となるので説得力のある表現を工夫しなさい。(方法も生徒に任せる。)

◎一人ひとりのラベルの題名や内容に注目し、作品理解に努める。

アートの目的は、子どもの創造性と想像力を形成し、「もう一つの自分」「もう一つの現実」と出会うことである。　　グリーン

Ⅲ美術部ステージバック共同制作について

・・・・・個の自分から集団の意識



ステージバック制作は、年二回、学校祭と卒業式に制作する。美術部の仕事としては、この時期は大忙しとなる。部員２９名が各パートに分かれて制作となる。完成までは、２週間から１ヶ月の日数を要する大変大がかりな作業となる。年間テーマや学校祭テーマにそって、アイディアスケッチを部員に何枚も描かせ、色鉛筆で緻密な下絵を完成させ制作開始となる。全判のホワイトコート紙を２０枚以上使いガムテープで裏張りし、最初に基調となる色を全体に塗り、木炭で下絵を描き着彩に入る。色の構成も、部員で充分ミーティングしてから着彩に入る。コムカラーを使っているが半端な量ではない＞白などは１０本ぐらい使う。大きな部分はローラーを使う。小筆・大筆・様々な刷毛・雑巾などを使い描き上げていく。各自が分担したところは責任を持って進めていかなければならない。部長にはあらかじめ毎日の作業の仕方を綿密に指導し、部員への指示は部長から連絡させる。ディテールを描くときもたくさんの資料や写真・画集を準備してから、丁寧に描かせていく。主役や脇役の配置についても何回もトリミングを繰り返し、計画的に進めて

いく。しかし、そうはいっても放課後の時間のない中でのこと、絵の具をカップごとまかす生徒がかならずいて、一大パニックに陥ったりする。絵の具の付いた足で絵の上を歩く生徒も出る。注意をしても毎回何かが起こっている。部長・副部長を中心に細心の注意をして進めている。背景や建物などは、雑巾に絵の具を付け進めていく。パートごとに作業をしているため、一人ひとりがパートから全体を見るよう習慣づけている。遠くから見ること。机や椅子を使って全体と部分を確認すること、その繰り返しで完成に向かわせていく。それまでの旅路は長く苦しい。毎日のかたづけも大変だ。意見のもつれやさぼりもある。そんな中で、部長を中心に個の自分から集団の意識が少しずつ芽生えてくる。自分と自分たちを高める事への意識である。自分が高まるとはどういうことなのか。少しずつみんなが高まっていく。締め切りぎりぎりにいつも作品は完成する。最後にエアーブラシを使い仕上げをして、体育館ステージの展示となる。全校生徒も出来映えには関心があり、前回より悪い作品は作れない。そんなプレッシャーと戦いながらの完成となる。完成したときの喜びもまた大きいものがある。展示は、先生方の協力を得てステージに梯子を使って、釘打ちをする。大変な作業である。

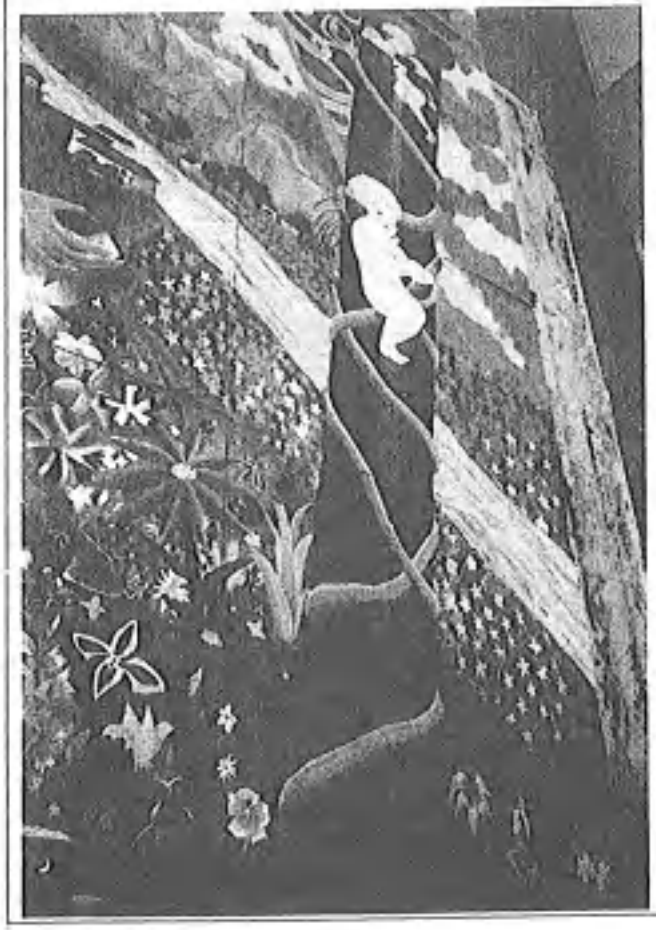
・みんなで協力して作り上げた時、どんな作品になったか。(共同制作の達成感)

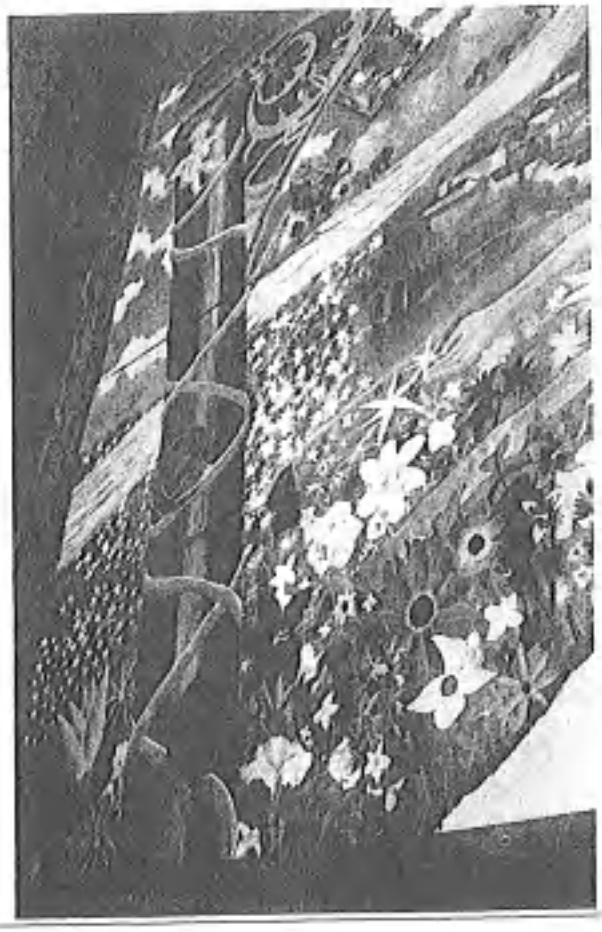
↓

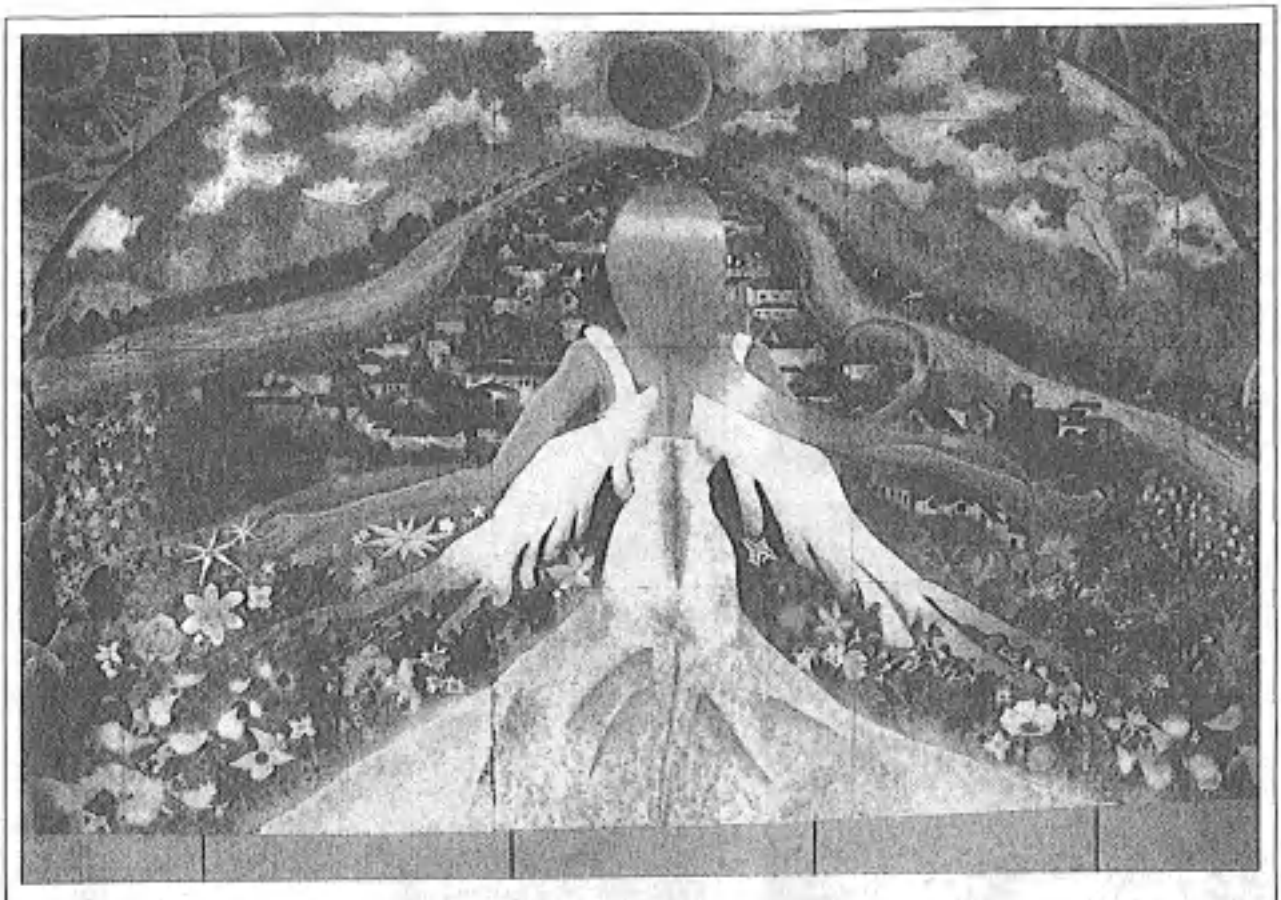
・一人で出来ないことが、みんなで出来た。(共同制作における自己・他者理解)

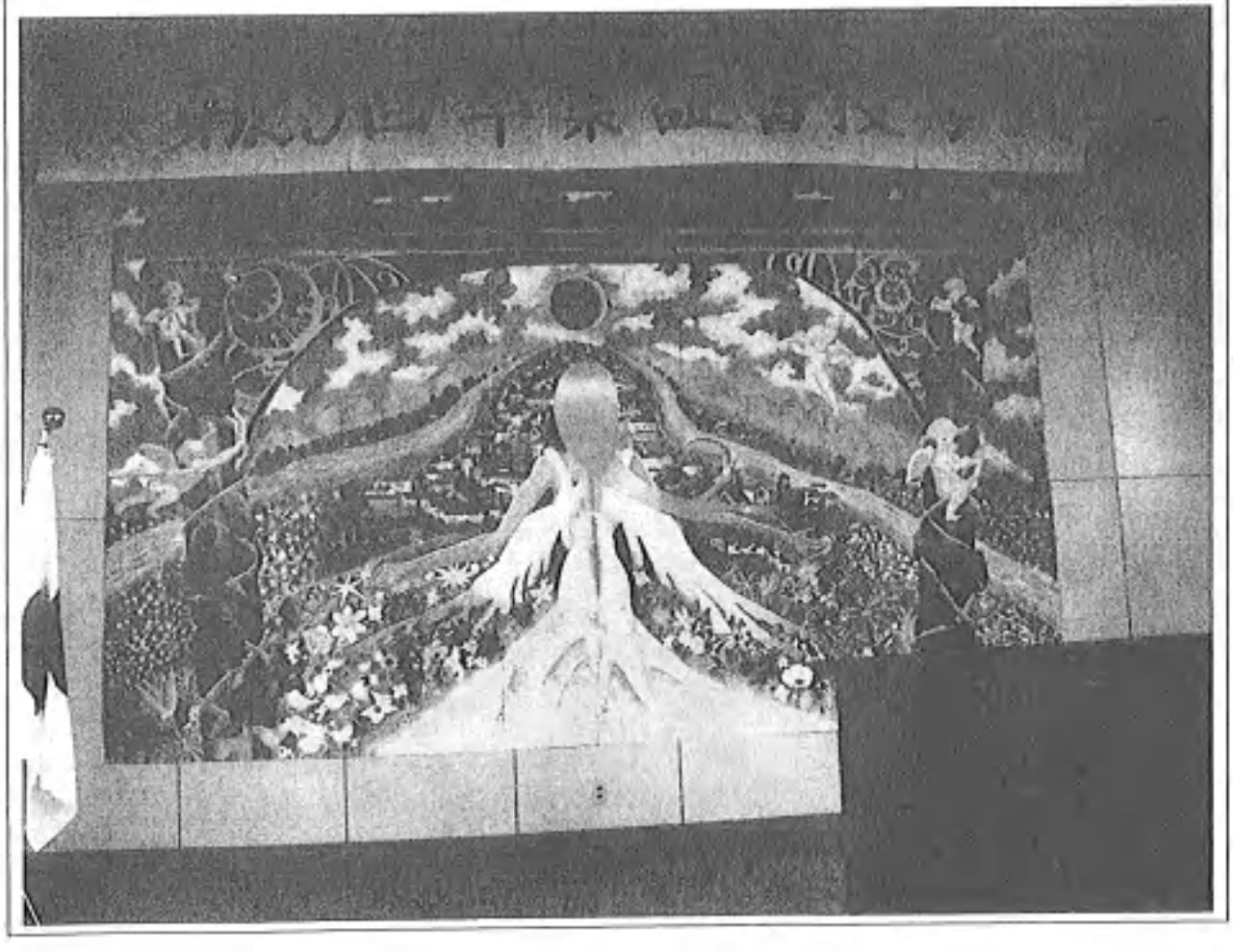
↓

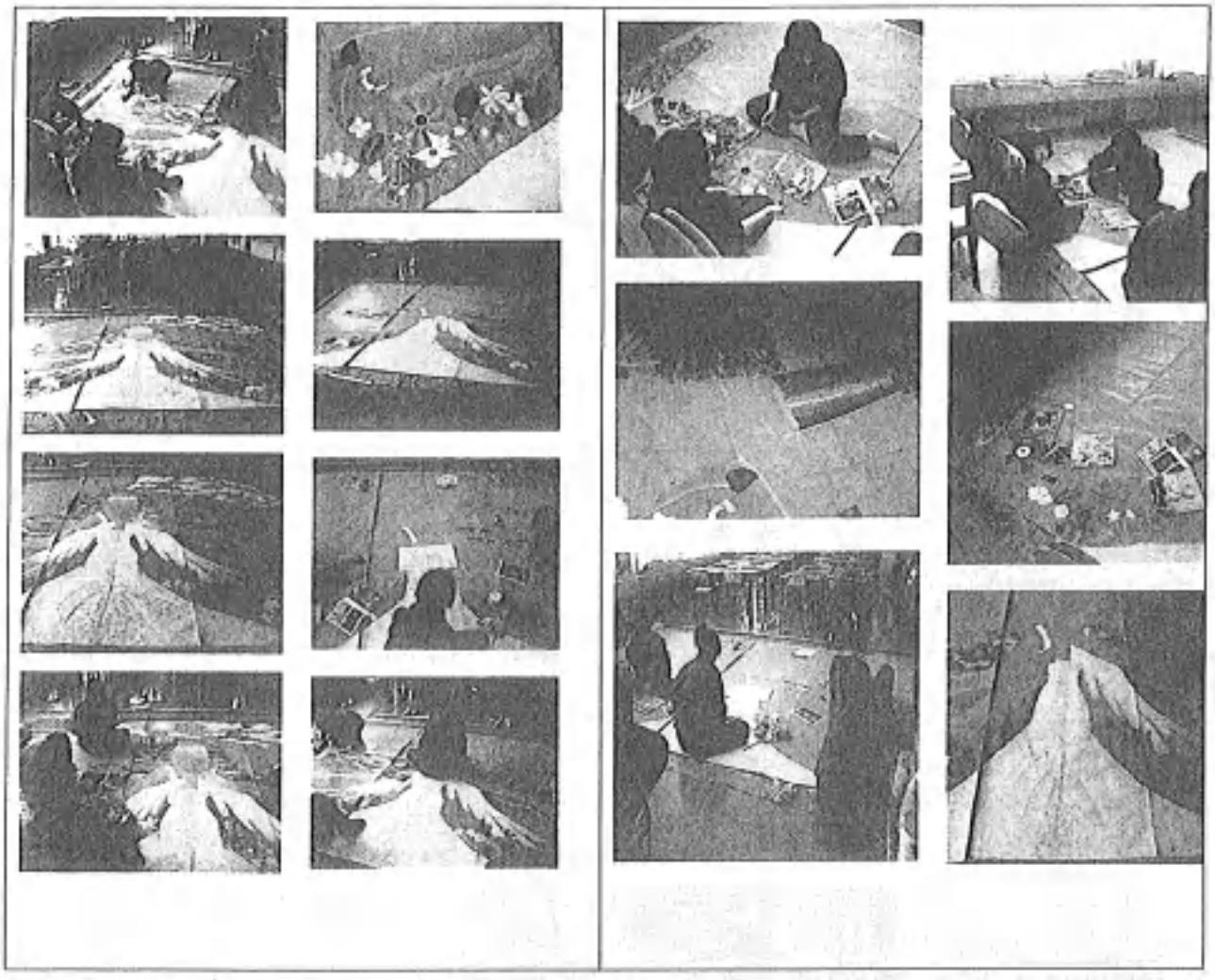
・自分も高まっていく・自分達も高まっていく。→他者を喜ばせる。(描くことの喜び)





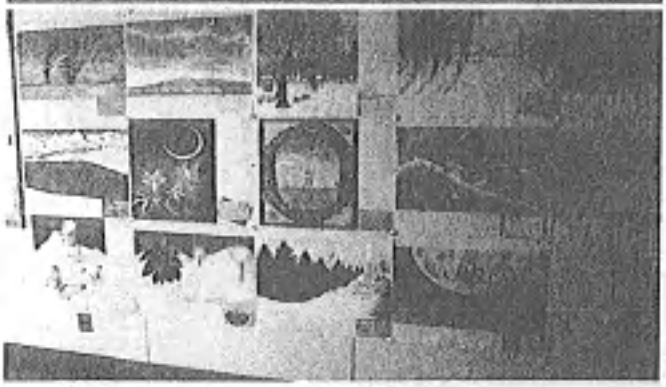


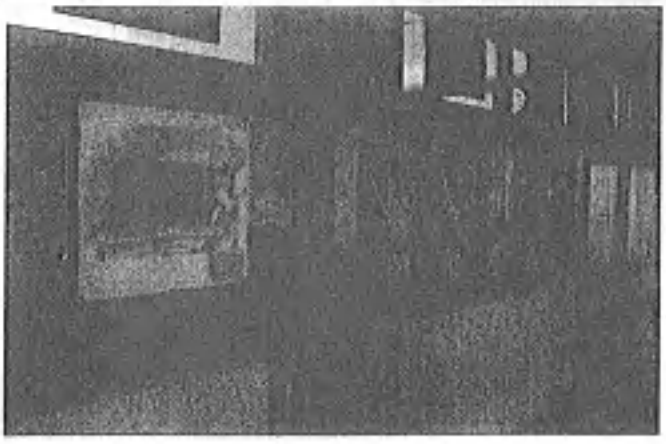




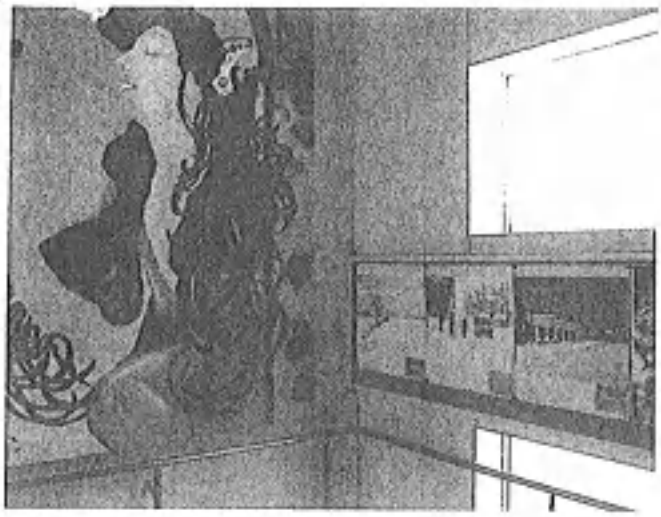
Ⅳ 作品を展示すると言うこと・・・展示空間

展示から美術が始まると感じる時がある。





作品を展示するということは日常生活の中にアートを創り出していく大切な行為だと思う。美術の展示というのは、美術の展示ではなく、展示の中に美術があると言うこと。美術室などの教室環境にも目を配っていくことが新しいアートの世界を切り開く大切な鍵を握っていると思われる。小綺麗で整備されていればいいというものでもなく、又、乱雑に散らかっているのがいいのではなく、そこが、子供たちの想像力を高める環境となっているかと言うことを、これから大いに語られ、研究され、実践されていく大切な場所であると思う。教師がどれだけこのことに重大性を見いだしているか、努力しているかということが、これからの美術教育の中で大切なこととなっていく気がする。学校の校舎内外に目を向け、そんな仕掛けがなされているか。そんな雰囲気づくりにもアートの世界を更に深めていく一因があると思われる。子どもが本当に自然に良いものと触れ合うことの出来る、見ることの出来る環境を教師側で作り上げていかなければならないと思う。こうすれば良いというのでは無くて、そのつど試行錯誤を繰り返しながら創意工夫をしていくことが大切な事のように思われます。それは小さな事から始まります。画鋲のとれている掲示物や絵画作品をそのまま放置しないだとか、小さな心遣いから始まる。子供たちの作品を大切にする気持ちや素敵な展示の仕方をもっと研究していくことが大切だと思う。何が展示されているか、どのように展示されているか。これは大切な問題である。ちょっとした壁の片隅に、教師の思い入れのある作品が、何気なく貼られてある。それを子どもは何気なく覗き込んでいる。その場所から、その子にアートの世界が広がっていく用に思える。そこから新しいアイディアが生まれたり、新しい創作の意欲が生まれてきたりする。学校の空間・スペースをいかして、貼るべき場所に絵画作品が効果的に展示されている



かどうか考えてみること。学校の空間の中で子どもの作品が生かされているのか、子どもの絵が語りかけてくるような、そんな状況をこちらから作っていくことが大切だと思う。展示はとても気軽に、楽しみながら出来るし、アートの世界を広げていく限りない可能性を秘めている。展示から美術が始まると感じることがある。こちらから仕掛ける何気ない優しさに満ちた行為だと思うし、ダイナミックな力強い展示行為もあると思う。子供たちの作品で、学校が美術館のようだと思える環境を創りたいものだ。

楽しい美術空間の創造

○校内外を美術館のように、ゆとりある絵画鑑賞空間に創り上げていく

・集合空間・移動空間・流通空間の利用・校内スペース(校庭利用)・ホールや廊下・教室・各掲示板への効果的配置を考え、生徒作品の鑑賞の場を創造していく。鑑賞空間が日常生活の中に溶け込んでいることが大切である。

○くつろいだ居心地のよい環境の中で作品を見る。(心の豊かさを育てる環境)

・くつろいだ環境下で生まれるコミュニケーションは自発的に学ぼうとする、そして学び続けようとする心を育てる。『おや？まあ！』という驚きや発見的要素が生徒同士の相互作用を生み、自己理解・他者理解につながっていく。(発信と受信)

提言：中学校　中　島　圭　介

研究テーマ

教科書題材での鑑賞授業の実践

提言の概要

今後，教科書題材をクローズアップする必要があると考える。道内には７００校程の中学校があるが，そのほとんどが小規模校である。美術専門の教師は時数の関係から大規模校に集まっている実態がある。つまり，大規模校以外の中学校では，免許外で美術の授業を担当している多くの先生方がいる事実を受け止める必要がある。美術を専門としない先生が授業づくりで頼りにするのは，“教科書”である。

それならば，美術専門の私たちの役割は，教科書題材について十分に教材研究をすることではないか。そして，美術科として育みたい力を明確にし，免許外の先生方にも実践可能な価値のある授業プランを提供していくことが求められているのではないか。また，教科書題材は全国各地の貴重な実践が凝縮され，多くの研究者，指導者，生徒の頭と手をくぐって出来上がってきた実践の縮図と捉えることができる。美術を専門とする私たちが研究をする価値があるものだと考える。

さらに，教科書題材を共同研究として取り組むことができれば，広く一般化を図ることができたり，美術教師の連携を深めたりすることもできる。研究する意識を共有することによりお互いの資質向上にも役立つのは言うまでもない。

本提言は，教科書（日本文教出版）の鑑賞題材を基にした教育課程の編成と１９年度の授業実践の事例紹介である。

１　なぜ，今，教科書題材なのか？

（１）上川管内・旭川市の美術科教員の現状

	上川管内学校数	美術科教員数	旭川市内学校数	美術科教員数
２００４年	４４校	１９名（１）	３５校	２７名（２）
２００５年	４１校	１８名（２）	３５校	２５名（１）
２００６年	４１校	２０名（５）	３４校	２２名
２００７年	４１校	１７名（６）	３２校	２２名
２００８年	４１校	１６名（３）	３１校	２３名

（平成２０年６月末現在）

※美術科教員数には管理職は含まない
※旭川市内は附属中学校の数を含む
※（　）は美術科教員の特別支援兼任数

（２）教科書題材に取り組む意義

①教科書題材は共同研究や一般化を図ることができる

②教科書題材は全国各地の実践例の凝縮版である

③教科書題材は学習指導要領との関連がある

日本文教出版（上川管内・旭川市採用教科書）

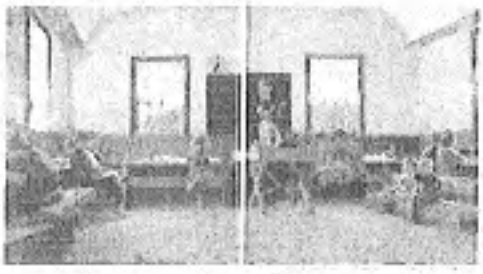
2　鑑賞題材における教育課程の編成の工夫

（１９年度 旭川市立東光中学校　美術科　鑑賞の教育課程）

	第１学年	第２学年	第３学年
学習テーマ	自然や身近なものに学ぶ	日本の文化に学ぶ	人間や社会に学ぶ
一学期	題材名：澄んだ目と心で 作　品：『カントリースクール』 （１時間）	題材名：自然の恵みと造形 作　品：『紅白梅図屏風』 （２時間）	題材名：時代を映す美術 作　品：『ゲルニカ』 （２時間）
夏季休業		題材名：展示に託されたメッセージ 木との対話 ※美術館との連携授業	
二学期	題材名：生活とデザイン 作　品：『身近な文房具』 （２時間）	題材名：色彩の輝き 作　品：『ラ・ジャポネーズ』と『見返り美人』 （２時間）	題材名：人間と自然への賛歌 作　品：『アルノルフィーニ夫妻の肖像』（２時間）
三学期	題材名：見ることと描くこと 作　品：『教科書の参考作品』 （１時間）	題材名：北斎と遠近法 作　品：『神奈川沖浪裏』 （２時間）	題材名：イメージを届けるデザイン 作　品：『お菓子のパッケージ』 （２時間）

3 鑑賞授業の実践紹介　第１学年

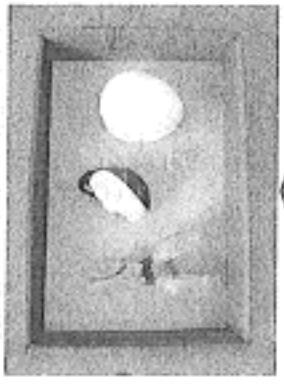
1 学期	題材名（時数）	澄んだ目と心で（１）
作　品	カントリースクール	



（１）ねらい：鑑賞の面白さを味わう
（２）育みたい力　関意態…楽しむ
　　鑑　賞…感じとる
（３）指導の手立て
　①学習形態の工夫（全体で対話）
　②学習環境の工夫（教室内の配置）

学　習　活　動	生徒の思考（学び）
Q.何が見えますか？	子どもがたくさんいるな。 本を読んでいる子共がたくさんいるから，図書館かな？ それとも貧しい人達が学校へ行くことができなくて教会のようなところで勉強しているのかな？全体的に温かみがある絵だな。
Q.話を聞かせてください	ここは学校だと思います。なぜなら、壁に黒っぽい黒板があるからです。下の方に白いチョークが置かれています。 貧しい子供と裕福な子供がいます。服に穴が空いていたり，裸足の子と靴を履いている子がいるからです。 この教室では、いじめがあると思います。
Q.自分の考えをまとめてください	いろんな話があったけど，私は貧しい人とお金持ちの人が教室内で別れていて，平等じゃない感じがした。だから，差別なく平等に暮らしてほしいという願いがこの絵には込められているのだと思う。

2学期	題材名（時数）	生活とデザイン（2）
作　品	身近な文房具	



（1）ねらい：文房具の機能美を考える
（2）育みたい力　関意態…追求する
　　鑑　賞…感じとる
（3）指導の手立て
　①教材・教具の工夫（文房具の収集）
　②学習形態の工夫（グループで対話）
　③学習プリントの工夫

学習活動	生徒の思考（学び）

Q.これは何ですか？どうしてこんな形をしているのでしょうか？

これはホッチキスだけど，横から見ると口の形に似ているし，上から見ると卵の形をしているな。何でこんな形なんだろう？

Q.文房具の工夫点を考えよう

底が平らになっているから置いて使うんじゃない。

ただいて紙をとめることができるよ。

口が大きく開かないから，手をはさむ心配がいらないね。

Q.自分の筆箱の中にある文房具の工夫点を見つけてみよう

この定規は長さが倍になる折りたたみ式の優れものなんだ。小さくなるから持ち歩くのにとても便利だよ。

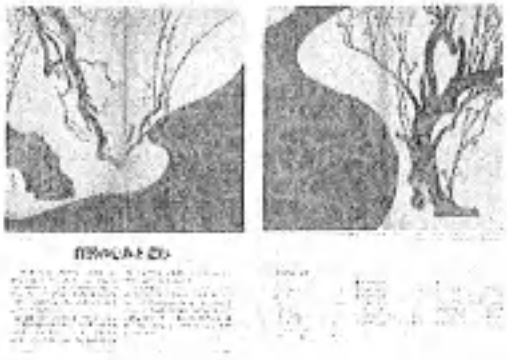
3学期	題材名（時数）	見ることと描くこと（1）
作　品	教科書の掲載参考作品（5点）	

（1）ねらい：作品の共通点を探しだす
（2）育みたい力　関意態…つなげる
　　鑑　賞…感じとる
（3）指導の手立て
　①学習形態の工夫（グループ）
　②学習プリントの工夫

学習活動	生徒の思考（学び）
Q.作品の共通点は何ですか？	
	何が共通しているんだろう？ 色が白くて，とても写真のようにリアルに描かれている。
Q.グループ内で見つけたことを発表してください	
	化石やコーヒーポット，スプーンなど種類は違うけど，硬さの感じがとてもリアルに表現されている。 想の作品とコーヒーポットの作品からは音が感じられない，静けさがある。
Q.自分の考えをまとめてください	
	化石やコーヒーポット，スプーンなど種類は違うけど，硬さの感じがとてもリアルに表現されている。 化石やコーヒーポット，スプーンなど種類は違うけど，硬さの感じがとてもリアルに表現されている。

鑑賞授業の実践紹介　第２学年

1 学期	題材名（時数）	自然の恵みと造形（２）
作　品	校白梅図屏風	

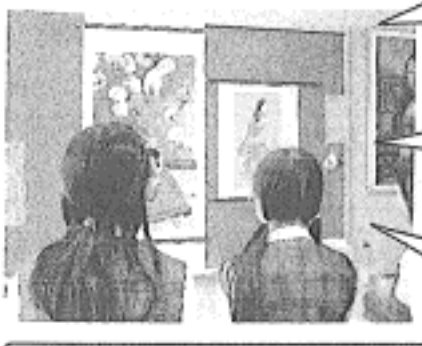


（１）ねらい：日本人の自然観を捉える
（２）育みたい力　関意態…追求する
　　鑑　賞…感じとる
（３）指導の手立て
　①教材・教具の工夫（実物大屏風）
　②学習形態の工夫（全体で対話）
　③学習環境の工夫（教室内の配置）

学　習　活　動	生徒の思考（学び）
Q.何が見えますか？	真ん中にあるのは川？うずの模様がきれいなんだけど黒くて不気味！ 白い梅の木と紅い梅の木が，花を咲かせるのを競っている？ 川と梅の木しか描かれてなくて，とってもシンプルだけど，金色に輝いていて豪華！
Q.話を聞かせてください	白と赤の花が咲いていてめでたい感じがします。背景も金色だし…。黒い川は何だろう？ 川の水面に描かれている模様が揺らめいているので，静かで穏やかに川が流れている感じがします。 とっても壮大で神様が通るような川？
Q.自分の考えをまとめてください	真ん中を堂々と流れる大きな川と，力強く立っている２本の梅の木があり，自然のたくましさを感じた。 春の訪れを豊かな自然を描いて表現している。

2学期	題材名（時数）	色彩の輝き（2）
作　品	ラ・ジャポネーズと見返り美人	

（1）ねらい：表現の相違点に気付く
（2）育みたい力　開意態…つなげる
　　鑑　賞…他者理解
（3）指導の手立て
　①教材・教具の工夫（実物大作品）
　②学習形態の工夫（全体で対話）
　③学習プリントの工夫

学習活動	生徒の思考（学び）
Q. 2つの作品を見て，どう思いますか？	
	2つの作品，何か似てるね！ 左の絵の外国の人は肌が白くてヨーロッパの人っぽい。 どちらかの絵が，影響を与えている感じがするけど…どっちかな？
Q. 話を聞かせてください	
	きっと，右の作品が日本の作品で，この作品がヨーロッパへ渡り，左の作品に影響を与えたんだと思う。 外国人に着物をプレゼントすると喜んでいる姿をテレビで見たことがある。 背景に日本らしい絵が描かれているうちわが飾られているよ。
Q. 自分の考えをまとめてください	
	日本の浮世絵は平面的に描かれているけれど，左の作品は描き方が立体的に見える。奥行き感もある。 浮世絵は版画で，左の作品は油絵？という表現方法の違いがある。浮世絵には輪郭線が描かれている。

3学期	題材名（時数）	北斎と遠近法（２）
作　品	神奈川沖浪裏	

（１）ねらい：作品の魅力を考える
（２）育みたい力　関意態…追求する
　　鑑　賞…感じとる
（３）指導の手立て
　①教材・教具の工夫（実物大作品）
　②学習形態の工夫（一斉）
　③学習プリントの工夫

学習活動	生徒の思考（学び）
Q.何が見えますか？	
	この作品見たことある。 実物は小さいんだな。もっと大きいかと思っていたよ。 波の表現がリアルだな！
Q.話を聞かせてください	
	空の様子を見ると，天気はそんなに悪そうじゃないのに，どうして海が荒れているのか不思議に思いました。 富士山に雪がたくさん降り積もっているので，季節は冬だと思います。 絵を描いている人はどこから見ているの？
Q.自分の考えをまとめてください	
	冬の明け方，漁に出かけていたら，突然天候が悪くなり，必死に船に捕まりながら港に帰ろうとしている場面を描いている。 小さな作品だけど，大波の表現に迫力があり力強さを感じます。船と富士山をのみ込む勢いがあります。手前の大波と奥にある小さな富士山を描くことで奥行きが感じられます。

鑑賞授業の実践紹介　第３学年

１学期	題材名（時数）	時代を映す美術（２）
作　品	ゲルニカ	

（１）ねらい：ピカソのメッセージを読み取る

（２）育みたい力　関意態…追求する
　　鑑　賞…自己理解

（３）指導の手立て
①教材・教具の工夫（特大の作品）
②学習形態の工夫（全体での対話）
③学習プリントの工夫

学習活動	生徒の思考（学び）
Q.何が見えますか？	
	何か色々なものがごちゃごちゃと描かれていて気持ちが悪い。不気味！ 何で白黒なんだろう？ 何か色々なものがごちゃごちゃと描かれていて気持ちが悪い。不気味！
Q.話を聞かせてください	
	何かから逃げようとしているみたい。「たすけて！」という叫び声がしそう。 家畜が脱走して，大暴れしている。人々が逃げ惑う様子が描かれている？ もっと激しいことが起きていると思う。腕が切れていたり，火事になったりしているよ！
Q.自分の考えをまとめてください	
	戦争などの争いがなくなってほしい，苦しみから解放されたい。家族と幸せに暮らしたい。世界が平和になってほしい。という思いを，折れている剣や一輪の花から感じました。 動物に追いかけられて，家から逃げ出している絵だと思う。家の中にいる人は，もう食べられてしまう恐怖の姿が描かれている。

2学期	題材名（時数）	人間と自然への賛歌（2）
作　品	アルノルフィーニ夫妻の肖像	

（1）ねらい：どんな場面なのか探る
（2）育みたい力　関意態…追求する
　　鑑　賞…自己理解
（3）指導の手立て
　①教材・教具の工夫（絵のパズル，実物大作品）
　②学習形態の工夫（グループ）

学習活動	生徒の思考（学び）
Q.絵の一部分に何が見えますか？	
	お金持ちっぽい女の人がいる。頭に角がある？衣装や背景から古い時代の絵だと思う。 細かなところまで，とてもリアルに描かれている。
Q.各自の絵の一部分を組み合わせてみると、何が見えますか？	
	パズルだったんだ！どんな絵だろう。 オレの犬は，こんなところに入るのか！やっと様子が分かってきたぞ！ やっぱり，全体が分からないと絵の意味は分からないよ。
Q.グループ毎に、考えたお話を聞かせてください	
	左のあやしい男は呪い師で，左の女性の「手相を占ってあげましょう」と言っている場面だと思う。 右の女の人のお腹が膨らんでいるから，たぶん，妊娠していて，無事に生まれてくるように神父さんにお祈りをしてもらっている場面だと思う。

3 学期	題材名（時数）	イメージを届けるデザイン（2）
作　品	お菓子のパッケージ	

（1）ねらい：グラフィックデザインの魅力と意義を考える

（2）育みたい力　関意態…つなげる
　　鑑　賞…他者理解

（3）指導の手立て
①教材・教具の工夫（パッケージ収集）
②学習形態の工夫（グループ）
③学習環境の工夫（パッケージ紹介）

学　習　活　動	生徒の思考（学び）

Q. どのパッケージが気になりますか？理由も教えてください

一番右の「こんがりベーコン」です。美味しそうだし，とても目立っているからです。

左の「うめわさびチップス」です。写真で商品の様子がよく分かるから，食べてみたいと思いました。

Q. デザインの工夫は何ですか？グループで話し合ってください

かっぱえびせんは，エビの赤い色をつかったり，波の模様が描かれたりしている。和風の感じを表すのに，レタリングを毛筆のような書体で書いている。

「カール」という商品名のレタリングがカールしている。原材料のトウモロコシをイメージして，黄色と緑をつかっている。

Q. 最後に，このデザインの工夫について自分の考えをまとめてください

さつまいものイメージから背景の色に紫色をつかっている。和風な感じを紫と茶で表現している。文字のレタリングも毛筆の書体で書かれ，しかも，ひらがなをつかっている。

焼き芋の写真を載せて，ホカホカの作りたてのイメージと甘さのイメージを伝えようとしていると思います。

4 教科書題材の実践をするポイント

1　学習指導要領と指導書をよく読んで，授業のねらいを明確化する

・題材によっては，ねらいが複数あるものが存在するが，１つに絞る。

2　題材で育みたい力を重点化する

・１題材につき，評価の観点である「関心・意欲・態度」「鑑賞の能力」で各１つに絞り，見取る場面や方法を考える。

※現実の授業の中では，生徒の発表・交流場面の発言からの見取りと学習プリントの記述内容による見取りが分かりやすい。

3，生徒の実態把握をする

・鑑賞に対する生徒の実態（鑑賞に対する意識や美術館等への参加状況，作品への知識など）について把握する。

4，１～３を踏まえて，教材研究をする

・一番大事なのは扱う作品である。作品を扱う理由や価値について考えを持ち，授業のねらいに合っているかを検討することが大切である。

5，具体的な指導の手立てを工夫する。

・題材に合わせて学習形態や学習環境，教材・教具など工夫し，効果的に授業展開ができるようにする。鑑賞の時間は１時間が勝負なので，事前の準備は周到にする必要がある。

5 終わりに

鑑賞の授業を研究し始めて４年目になる。鑑賞の学習の重要性が叫ばれる中，なかなか鑑賞の授業づくりに気持ちが向かなかったのは，鑑賞の授業イメージが持てなかったからである。旭川市図工美術部の鑑賞部会で対話による鑑賞の研究授業を見てから，未知なる鑑賞の授業づくりを勉強したいと鑑賞部会で学習をし，授業実践を積み重ねてきた。

対話による鑑賞での教師の役割は，様々な生徒の考えをつなげたり，理由を引き出したりするコーディネーターである。授業のねらいに向かっていけるように，生徒の考えを結びつけたり，軌道修正をする舵取りが難しい。生徒の反応は毎回違うので，臨機応変な対応が求められる。常に綱渡り的な要素があるのだが，このスリルが授業をしていての面白さでもある。教師の予想を遙かに超える生徒の発想に驚かされるときもたびたびあって，授業の面白さを私自身も実感している。

最近は，鑑賞の授業が定着し，各学期の最初の授業で鑑賞を行っている。表現よりも鑑賞の授業を楽しみにしている生徒も多くなってきている。教育課程の中に独立した鑑賞の授業を位置付けたことで，生徒の学習の幅を広げることにつながり，美術科のねらいにより近づくことができたと考えている。

学習指導要領が改訂され，鑑賞の学習がさらに重要視されている。今回の提言が鑑賞の授業づくりで困っている人やこれから鑑賞の授業づくりを考えようとしている方々の参考になることができれば幸いである。

提言：中学校　工　藤　由　香

研究テーマ

自己理解・他者理解を深める授業づくり
～輝く瞬間の手の表現活動を通して～

提言の概要

私は、生徒にいつも「見せる」ではなく「魅せる」作品作りを！と語っている。作品は、自分の分身そのもの、その時の考えや感情が作品に表れる。心をこめればこめるほど作品は輝きを増し、人を魅了するものだ・・・と熱く語っていながら、毎回題材設定に頭を悩ませているのが現状である。

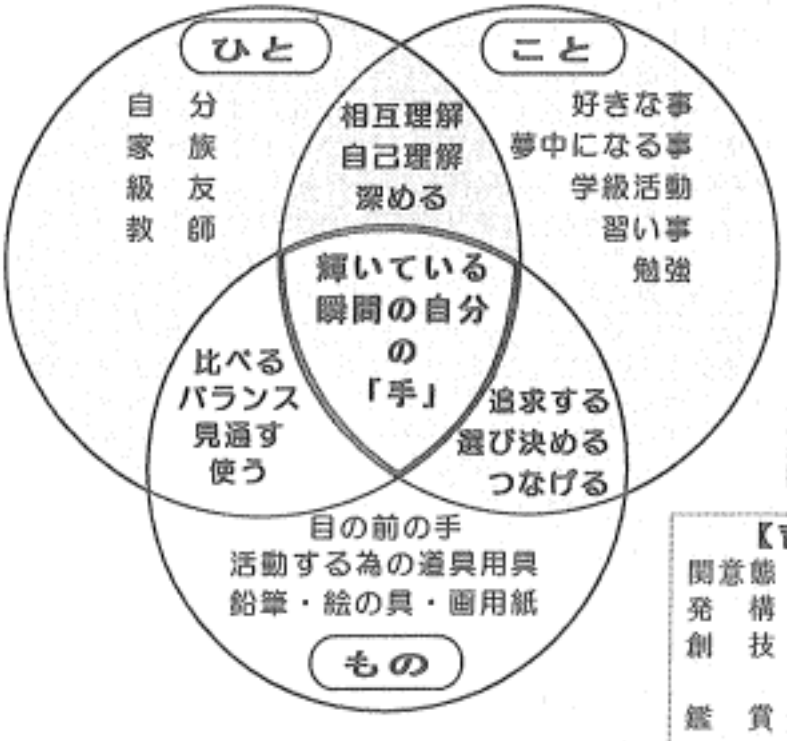
本提言は、生徒の取り組みに多くの変化が見られた題材の発表である。しかし、まだまだ改善の余地はあるように感じる。多くの方からご意見をいただき、さらにこの題材に磨きをかけるとともに、他の題材への見直しのきっかけにしたいと考えている。

Ⅰ　心を育てる題材　育みたい力

「ひと」「こと」「もの」との「出会い」を大切に

この題材を選んだ一番の理由は、１年生の締めくくりとして、よりデッサン力をつけたいという思いだった。そこで選んだ対象が「手」であるが、ただ描くのでは面白くない。

学生の頃、私もよく手を“描かされた”が、“描かせる手”ではなく“描きたい手”にしたい。日常生活の中で、「手」は大活躍である。実に様々な表情を持っている。しかし、普段そんなことは意識すらせず、当たり前のように私たちは生活している。そんな大活躍の手に、目を向け、夢中になるためには・・・「出会い」である。



【教師の願い】

自分をじっくり見つめてもらいたい、自分のいい所（輝いている所）を見つけてほしい・・・

また、周囲の人たちのいい所にも興味を持ってほしい・・・そんな願いから⇒「輝いている瞬間の手」という題材に決定した。

【育みたい力】

関意態；追求する・つなげる
発　構；見通す・深める
創　技；比べる・選び決める
　　バランス・使う
鑑　賞；自己理解・他者理解

Ⅱ 導　入

「やってみたい」「こうしてみたい」「やる価値ありそうだ」

「やってみたい」「こうしてみたい」と、生徒が感じられる導入はとても難しい。今回の題材は、デッサン力の向上も図りたいが、自分の輝いている所を発見し自分に自信を持ってもらいたいという願いもある。この部分を強調する形で始めてみた。

次の題材は、自分がキラキラと輝く瞬間の手を描きたいと思います。

え～！！輝いてる時なんかないよー！！

そうかい？私は結構みんながキラキラしている場面見るよ。学級活動に取り組んでいる時とか、授業で集中している時とか、部活の練習に励んでいる時とか・・・

そういうのでいいんだ～。という雰囲気が流れる。

日本人って自分をほめたり、アピールするのが苦手だよね。そして、ついつい自分も他人も嫌な所ばかり目についてしまう。でも、本当に嫌な所ばかりだろうか？

う～ん。そんなこともないとは思うけど。

人には必ず輝いている瞬間があると思う。今回はそこをぜひ自分で発見してほしい。お互いの輝いている所を認め合えたら、最高に素敵だと私は思う。

やるならその輝いている瞬間の手をよりかっこよく描きたい。そこで、まずは基礎練習をしたい。これは、今後の作品制作にも生きてくるよ・・・

Ⅲ 展　開

意欲を持続させる教師の声かけ

内　容	説　明	教師の声かけ
基礎練習『手の習作』 1 h	手のつくりがどうなっているのかを学習。特徴をつかんで、よりリアルに手が描けるように練習する。＊ワークシート・画用紙	画家さんも最初からめちゃくちゃ上手なわけではありません。そこのページにもあるように、制作にあたって、練習したりしています。みなさんも画家になったつもりで、手の習作に取り組もう。
イメージ 1 h	自分が輝いている時はいつかを、しっかりと見つめ直して、イメージを膨らませていく。＊ワークシート活用	「私が見ていて感じるあなたの輝いている瞬間は、これに取り組んでいるところかな～」と、いろいろな生徒に声かけをしていく。生徒同士のやりとりも自由にさせる。ついでに私の輝いている瞬間も聞いてみる。みんな褒めるのに必死である・・・。
下書き 2 h	画用紙に鉛筆で、自分の手をじっくり観察しながら、下書きをしていく。全体のバランスに注意。	「先生、ラケット（その他の物）を持った状態を描きたいんですけど、次の授業で持ってきていいですか？」「勿論！！不要物はだめだけど、実物を持ちながら、見ながら描いた方が絶対にいいですよ。」
着色作業 4 h	どのように着色すれば、より立体的で、より命があるように描けるのか考える。	「肌の色も人それぞれ。自分の手にはどんな色がありますか？場所によっても変化しますよ。じっくり手に穴があくくらい観察しよう。」
まとめ 2 h	作品に込めた思いなどをレポートにまとめる。学級で作品発表会を行い、互いに評価しあう。	「自分アピールです。ここが輝いているぞと主張しよう。みんなの輝きポイントにも注目しよう。」

←この生徒は、自分から習作に色を塗って確かめる方法を見つけた。
「いいアイデアだね。」と一言かけると、周囲もそれを真似て確認をし始めた。自分の手に直接塗って確認する生徒もいた。

「先生、白いタオルありますか？」
「何に使うんだい？」
「生クリームのしぼり袋に見立てようかと。」
「それはいい考えだ！あるよ、タオル。」
「毎回借りていいですか。」
「いいよー。」

→

どこまでやるか？技術指導・・・のびのびと放置は違う

どこまで教えるのか、アドバイスするのか・・・いつも悩むところ。言いすぎや押し付けもダメ、のびのびを理由に、ただただ生徒と雑談をしながら作品を見て回るのも違うと思う。どこまで？悩みながらも、今回はデッサン力もつけたいため、手の習作段階で、細かな技術指導をした。やはり制作のコツは教えるべきと感じている。そこから何かをつかみ、自分の力にしていってほしい・・・。

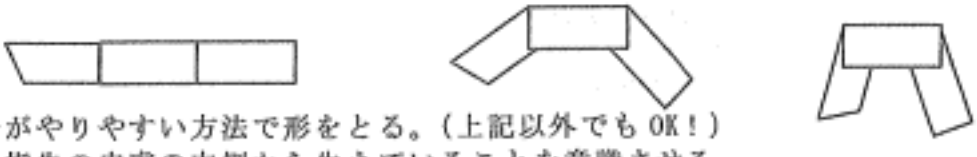
パターン①～骨と関節を透視する

自分の手を置いて、なぞる。 → 骨と関節の位置を定める。 → 気づいたことや特徴をまとめる。 → 爪をいろいろな方向から見て描く。 → 黒板で形の取り方を実演しながら説明。

・親指は他の指と比べると関節が１つ少ない。
・関節の所にしわがある。
・親指のついている位置が他と違う。

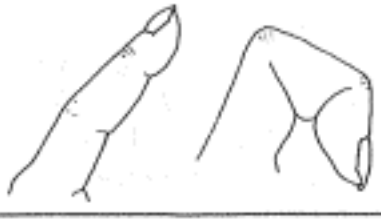
パターン②～指を直方体（単純な立体）として見る・巨大指立体参照

自作の巨大指立体（曲げ伸ばし可能）を見せながら、指のつくりについて説明 → 黒板でいろいろな方向から見た指の形の取り方を実演しながら説明。



＊自分がやりやすい方法で形をとる。（上記以外でもOK！）
＊爪は指先の皮膚の内側から生えていることを意識させる。
＊伸ばしているとき・曲げているときの肉の動きに注目させる。

←爪は指先の皮膚の中から生えている。のりを貼っているようにならないように気をつけよう。



←曲げると内側に肉が集まって、もこっとするよ。

Ⅳ 教師の受信

絵は「心の窓」～作品を通してコミュニケーション **最高の生徒理解**

【導入段階～発想の手助け】

今回は、生徒個人が輝いている瞬間を描くので、いかに教師側が授業以外の活動状況を観察しているかも問われる。

この題材だけに限らないが、私は日常生活から、学級活動・部活動・委員会・行事活動などなど多くの場面で活動している生徒を観察するように心がけている。普段から観察していると、それがいい意味で授業の中で生きることが多い。

例えば、今回であれば・・・

「先生、俺の輝いている所どこだと思いますか？ないんだけど。」
『あるある！文化祭の制作の時なんか、いつ見に行ってもすごい真剣に作業していたよ。感心してたんだ。かっこよかったよ。』
「先生、私はー？」
『当番活動かな。いつも自分の仕事以外のことも見つけて進んでやるよね。それは、すごい素敵なことだよ。』
「俺は、俺は？」
『まあ、いつもは落ち着きないけどね～、体育祭の練習のとき声を出してクラスを盛り上げてたよね。選手としても大活躍だったし。』
「私は？」
『こないだ、部活の練習チラッと見たけど、一生懸命練習してたね。いいサーブ打ってたよ。』
『じゃあ、逆に先生のいいところは？』
「う～ん、面白いところ。おこったらすごい恐いけど、意外に優しいところ。」

といったやりとりである。

美術教師は、ほぼ１校に１人の配置であるということは、全校生徒の顔と名前がわかるということである。生徒指導上こんなにラッキーなことはないと日々感じているのと同時に、これを利用しない手はないと思う。

【制作の中で～納得できる作品作りのためのアドバイス】

多くの生徒は、だいたいできたら私に聞いてくる。修正したほうがいいところがあっても、すぐには答えないようにしている。

＊聞いてくる生徒には・・・自分で考え、答えさせる問いかけを

「先生、どうですか？」
『どう思う？納得の出来かい？』
「どうしても、ここがうまくいかないんですけど、どうやって直したらいいですか？」
『どこがどう変だと思う？』
「・・・・・親指の曲がり具合が変。」
『そうだね。関節の位置もう一回見比べてごらん。』

＊聞いてこない生徒には・・・こちらから質問して、考えるきっかけをつくる

『どうだい？納得の出来かい？』
「う～ん、いいような気もするんですが・・・。」
『ちょっと遠ざけて見てごらん。どう？』
「あー、ここのバランスがおかしい。」
『よし、じゃあちょっと修正してみようか？』

Ⅴ 成　果

生徒の自己評価表からも想いを感じ取る

生徒の作品説明文や、自己評価から成果を感じ取ることができる。基本的に生徒たちはたくさん記述してくれるので、読み取りやすい。

・自力でとにかく頑張った。
・満足のいく作品になった。
・進めていくうちに楽しくなってきたし、練習したことによって上手になったと思う。影の出来具合がいいです。
・絵を描くことも結構楽しいと感じられました。
・手の習作はすごくはまって、周りの音が聞こえなくなるぐらい集中できた。
・いつも色で失敗してたけど、今回はすごい観察して色を作ったのでよくできた。
・瞬間をイメージしてすごい心をこめて作りました。
・小学生の時は、絵というものはとても苦手で「手」を描くにしても指が６本になっていたことすらありました。しかし中学生になって先生に教わってから見違えるほど上手になりました。美術が楽しい時間に変わりました。

全体的に、あきらめずに納得いくまで何回も手直しした生徒が多く見られた。

着色の際に、習作に塗って色を確認したり、自分の手に塗って確認したりする姿も見られた。そのような姿を見て、周囲の生徒も真似てそれぞれが色の確認を何度も行って制作に励んでいた。

想いをこめる、デッサン力向上は完璧ではないが、達成されたように感じる。

Ⅵ 課　題

生徒の反省から、授業の改善点を見つける

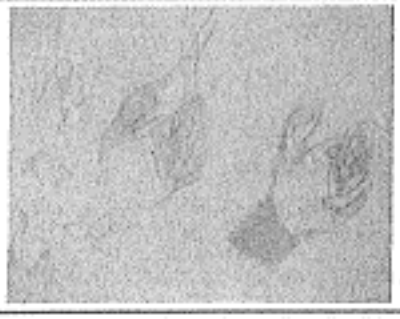
生徒の反省点は、教師の反省点でもあると思う。

・色の塗りが雑だったと思う。前よりはうまくなったけどもう少し見通しを持って、着色時間がたくさんとれるようにすべきだった。
・下書きすら全然決まらなくて、大変だった。かげや爪の色も難しかった。
・明暗があまりうまくいかなかった。
・手のしわや立体感を出すのがすごく難しかった。ちょっと失敗したので悔しいです。
・形が難しくてなかなか思うようにできなかった。
・始めは頑張っていたけれど、後半集中力がきれて、雑になったところがあったが、色塗りは頑張った。
・絵が苦手なので、原画もうまくゆかず、着色も中指が変な色になってしまいました。
・最後はいそいで描いたので雑になってしまった。

丁寧さが足りなかった、納得がいく色が作れなかった、形がうまくとれなかった、なかなか手の形が決まらなかった、集中が途中できれた、時間が足りなかったなどの反省点が多いので、見通しを持たせる工夫、もっともっと個人へのアドバイスをできるように、目を配る必要がある。しかし、頑張ったから満足しているという生徒がほとんどだった。この経験を次につなげたい。

また、発想の段階では、学級内でそれぞれの輝く瞬間を交流していたが、最後の交流ができなかったので、次回は絶対に行いたい。

この生徒は、形を取るのに苦労していた。画用紙がぼろぼろになるほど何度も描き直していた。

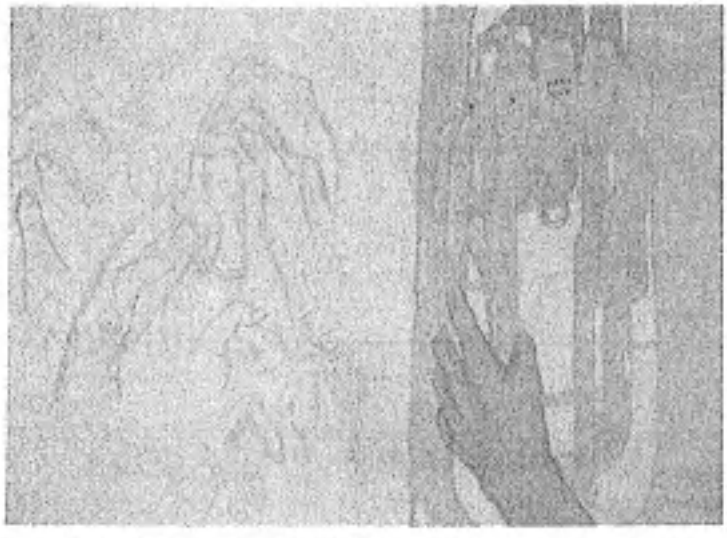


Ⅶ 見直し・改善

次につなげるために・・・題材の進化

今回の題材は、正直生徒たちがのってくれるか・・・という不安があった。「デッサン」という響きだけで、「いやだ」「ぜったいうまくできない」といった印象が強いからだ。しかし、取り組んでみて意外に自分は描けるという自信をもってもらいたいし、頑張ればうまくなるという感覚もつかんでほしかった。勿論、渋いている自分を描くのだからきっと思いもこもるだろうと予想して。

常にクロッキーブックと鉛筆を片手に見て周り、形を取るのに苦労している生徒には、こんなやり方も・・・と、実際に描いて見せたりもした。吸収が早いので、コツをつかむと自分なりに工夫して描くようになる姿が見られた。実際に、「やっていくうちに上達した。」「デッサンは意外にはまった。」「知らないうちに夢中になっていた。」などの感想が多い。



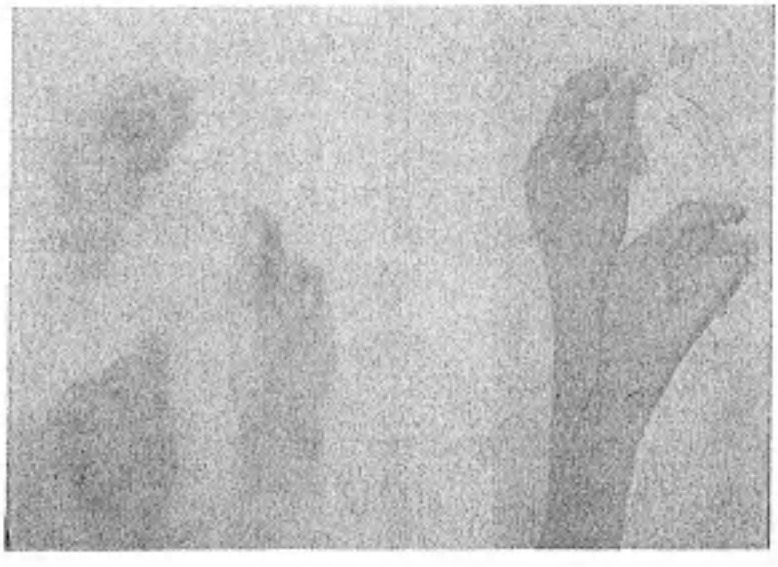
この生徒は、習作にはまったのか、指の形・動きをよく観察して、いろいろな方向から見た手を何個も描いて練習していた。

もしかしたら、言い過ぎた部分もあるかもしれない。

実際に何回も行われた提言者会議の中で、**「教えすぎると、生徒自身が発見すべきことを先に教えてしまうことになる。」「この経験をもとに、次のデッサン（違うモチーフ）にもつながる技術指導であればいいのでは。」**という貴重なご意見もいただいた。

アドバイスはしても、絶対に生徒の作品には手を加えなかった（当たり前のことだが）が、**「生徒自身が気づいて自ら考え、工夫して進化していく」**声かけ、対話ができるように心がけることが今後の課題である。

「先生、どうしても動きを出したいので、左手２本入れてもいいですか？」
「もちろん！」



【使用したワークシートなど】

1年図工

✧✧✧ 自分が輝いている瞬間の手 ✧✧✧

皆さんは、何をしているときに一番輝いていますか？部活・勉強・学校活動・委員会・習い事・趣味・・・・・
何かに一生懸命になっているときの人の表情は、本当に美しく輝いていますよね。人の心を動かし、涙を誘うことも多々あります。個人でその表情の多少はあるかもしれませんが、必ず、その人が輝く瞬間というものがあります。
今回は、みなさんが輝いている瞬間の手の表情を描いていきたいと思います。

【課題A】自分を見つめ、輝いている瞬間のイメージをふくらませ、その手の表情を表現できる。
【課題B】手を生き生きと表現するための工夫・造色作業ができる。

1．材　料～画用紙（四つ切り）

2．道　具～クロッキーブック、ポスターカラーセット、平筆道具、鉛筆（自分たちで用意）

3．作業手順　　制作予定時数～10時間

内　容	説　明	時間
①課題説明	説明をよく聞き、どのような作品作りをするのか、作業手順を確認する。	0.5
②観察練習	まずは、手のつくりがどうなっているのかを学習。骨盤・筋肉・・・指先をつかんで、よりリアルに手が描けるように練習する。	1
③イメージ	自分が輝いている時はいつかを、今までの生活を振り返ったり、自分の好きなものなどをしっかりと見つめ直して、イメージを膨らませていく。	1
④下書き	画用紙に鉛筆で、自分の手をじっくり観察しながら、下書きをしていく。（自分の手よりやや大きめに）	2
⑤彩色作業	水彩画・油彩画・・・塗り方は任せます！どのように色をすればより効果的に、よりのが見るように描けるのか考える。	4
⑥まとめ	作品に込めた思いなどをレポートにまとめる。学級で作品発表会を行い、互いに評価しあう。	2

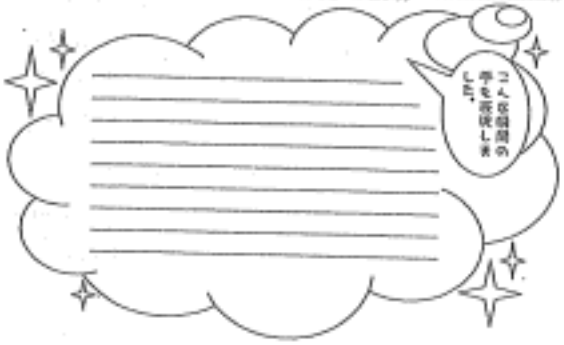
★思いや考えが入ると、その分作品にも反映される。自分の「輝く瞬間」を作品を通して、みんなにアピールしよう！
自分が輝いているときのイメージ、そのときの手の形をじっくり観察することが必要。
自分の世界に入り込もう！

1年図工

✧✧✧ 自分が輝いている瞬間の手 ✧✧✧
～制作を終えて～

タイトル：

自分の「輝く瞬間」の説明



作品制作を終えての感想・反省

中学校　1年　　組：

1年図工ワークシート

✧✧✧ 自分が輝いている瞬間の手 ✧✧✧

1年　　組　名前：

1．まずは、自分の手を知ろう！

①手を左の枠の中に置き、周囲をなぞろう。

②鉛筆と骨を意識して描いてみよう。

③気づいたことを書いてみよう。

④絵をクローズアップして見ていこう。

よく見て描こう

部分から見た様子

2．さてさて、ここからが本番！
①自分が輝いている時はどをしている時だろうか？自分の今までの行動や生活の様子を振り返りながら、たくさん「輝き瞬間」を挙げてみよう。
例）○○部の練習に励んでいるとき
○○に取り組んでいるとき

①から2・3個
厳選しましょう

②厳選した「輝き瞬間」をもっと具体的に書いていこう。
例）竹を持っているときの指を持つ手、シュートするときのボールを投げた瞬間の手、習字をしているときの墨を含めの手、ピアノを弾いている時間の手などなど・・・

③④を一つに絞り込み、画用紙の左側にいろんな方向から見た手を描いていきましょう。
例）

Ⅷ 日常のこんなことからも美術教育につながる

日常のふとした一言に共感し、広げる

きれいなものをきれいと感じる心が、だんだんと減ってきているような気がしていたが、生徒と話していると、本当にびっくりする発言をする時がある。その時、教師が「そーねー。」程度の返答で終わってしまったら、そこで終了である。ふとした驚き発言をどのように広げるかも、教師のセンスにかかっているような気がする。

自分が美術教師だということもあるのか、哲学的なことを話し出したりする生徒もいる。それが、意外と普段はそんなことを言いそうにない生徒がそういった発言をするので、こちらとしては相当な勢いで驚くのと同時に、感動を覚えるのである。

ちょっとした一言に共感して、人間関係を深めていくと、授業の中でも生きてくるし、少しずつ考えを表に出して作品に表現していくことにつながっていくのではないかと、感じている。そのようなことがあってから、常にアンテナを張り巡らし、素敵な発言を聞き流さないように心がけるようになった。

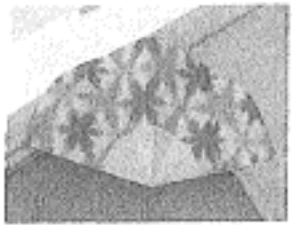
教師も生徒と共に感受性を高めていくことが大切であると改めて感じた。

＊次ページ参照

美術室以外の環境も・・・

教室の掲示物、行事時の装飾、総合的な学習や旅行的行事のまとめ・・・美術に関することは身の回りに多く存在する。

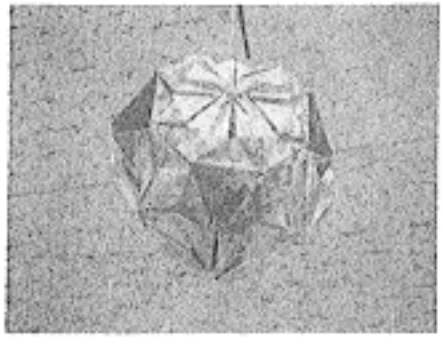
教室の掲示物やまとめ模造紙作成の際には、目を引くレイアウトの例などを見せると、自分たちで工夫し始める。そのうち新たなアイデアが浮かんできて、よりきれいな物に仕上げようとするようになる。彩のある教室や廊下の空間で過ごすことは、感性を高めるきっかけにもなるように感じる。

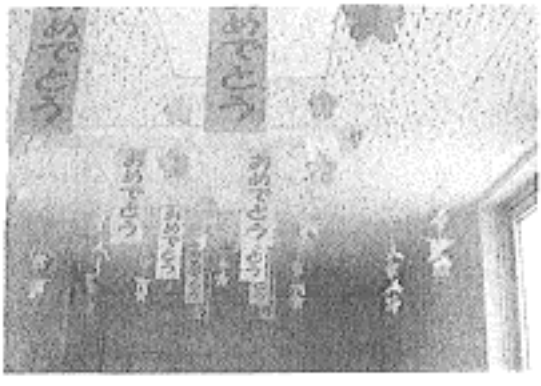


卒業式や入学式の装飾も同じである。前任校では、ステージバック・体育館入口・廊下吹き抜けホール・玄関入り口と装飾する場所が多くあったが、生徒会を中心に毎年一大テーマを決めて、まとまりのある装飾活動を行った。

例えば「花鳥風月～新緑の大樹～」「大地の息吹～春～」といったテーマである。展示作業は、公立入試で３年生が登校しない日に行う。入試明けの登校日、多くの生徒がその装飾を見てうれしそうに歓声をあげる。それを見て、制作に関わった生徒たちもうれしそうである。制作に関わっていない生徒も展示作業を見に来たり、体が空いている時は手伝ったりと、関心は高いほうではないかと思う。

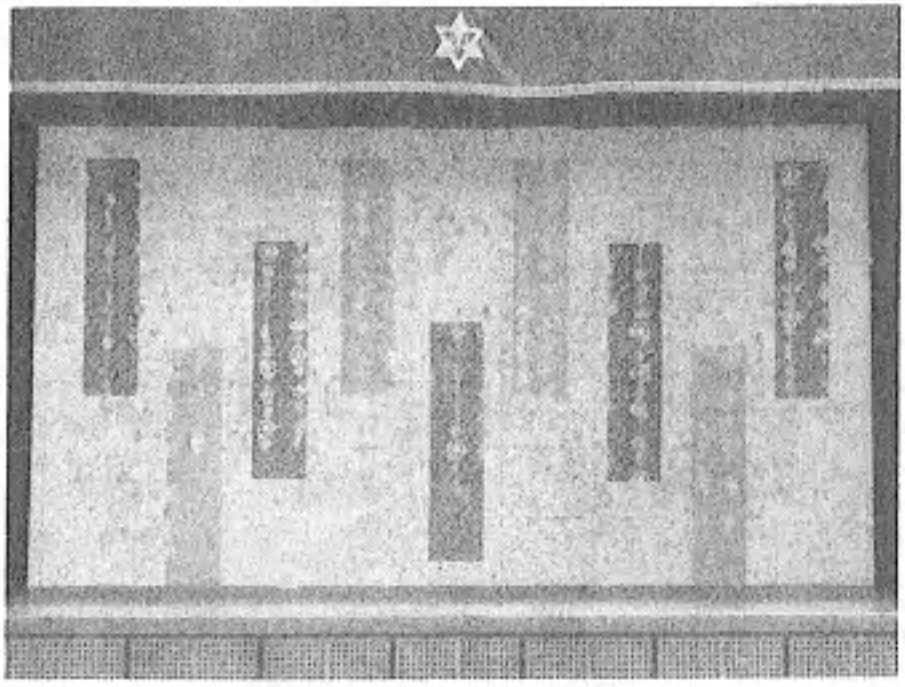
生活の中の美術・・・大切にしていきたい。



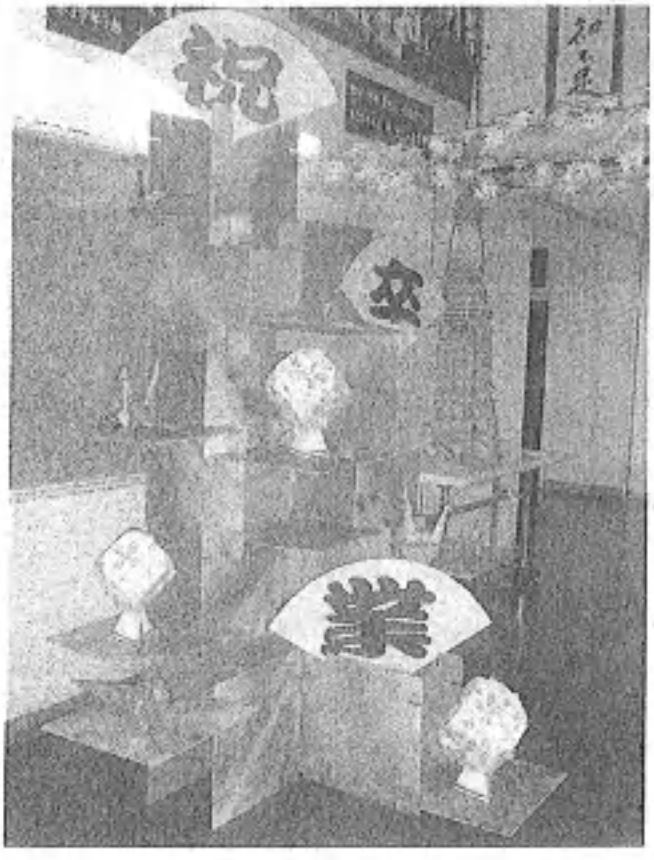


東京電力福島第一原子力発電所
東京電力福島第一原子力発電所
東京電力福島第一原子力発電所

【卒業装飾写真】テーマ：花鳥風月～新緑の大地～



【ステージバック】
背景に長方形の和紙を貼り、切り紙で桜を作り、紐でつなげる。
バーにバランスよくつりさげた。



【さくらだま】
ケント紙で６面体を作り、桜の花びらを接着。
三角形の土台をつけて完成。

【ぼかし扇子】
扇形に切ったダンボールに、桜や葉の形の色画用紙を貼り、薄い和紙をかぶせる。
切り抜いた文字を貼って完成。

【玄関ホール】
ダンボールでユニットを作成。スプレーで着色。和紙で大中小の折鶴をのせる。
高さ２ｍ５０ｃｍぐらいになる。組み換え可能なので、様々な形に組み立てられる。持ち運びにも便利。

【３年廊下掲示板】
色画用紙で個人へのメッセージ入り扇子を作成。バランスよく展示する。

提言　高等学校

幼稚園から高等学校まで
このスパンで教育を考えてきました。
さらに特別支援も含めて

これだけ幅広いのに
考え方がつながる
抽象論ではなくて

日常的には難しいかもしれませんが
各校種の教師がつながることで
美術教育の本質が見えてくると実感できます。

提言：高校　松　井　茂　樹

研究テーマ

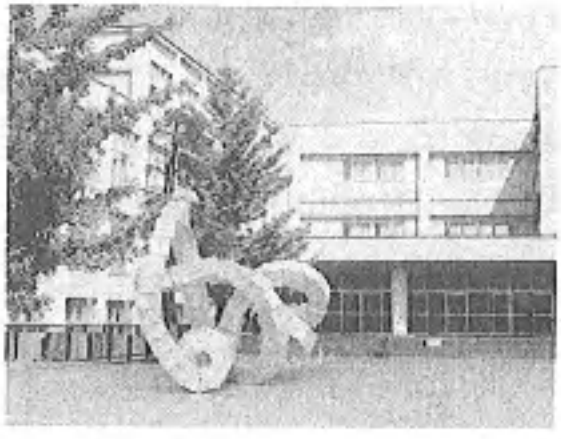
手で学び・手で考える
感性を高める授業の実践

提言の概要

造形教育の中では，教えることも多くあるが教えられない部分というのが非常に多くあり，この教えられない部分を，生徒たち自らが主体的に獲得していってくれることに，多くの期待を持っている。そして、この教えられないことの大部分が研究の「育みたい力」で示される。

本提言は、木を素材とした頭と心と手の諸能力を統合させた造形活動である。自然素材である「檜の棒」を、切断する角度や長さを変えたり、接着面をずらしたり試行錯誤をしながら意図をもって構成する課題である。せまい専門領域としてではなく、木のよさや持ち味、特長を捉えて、技法や技術だけでなく、手の特性をもった発見があったか。また、やり直しがきき、一生懸命取り組んだことが報われる題材として設定した。

Ⅰ　ヒノキの棒材を切って繋ぐ



【写真1】生徒作品

主として屋外へ設置する立体造形のマケット制作として生徒へ提案する。立体造形が、周囲の環境を美的に潤す価値あるものとして、身近な環境を意識させながら課題設定を促したい。「こんなものが公園にあったらいいな」とか「こんなものが駅前にあったらいいな」とか、あるいは「こんなものが学校にあったらいいな」などのように、自分の思いを具体的な形としてイメージすることから始める。

しかし、木を使って三次元の形の変化や構造は、漠然とした空想から浮かべることは困難である。むしろイメージが広がりやすいように、具体的にテーマを与えた。材料を手に取らせ、角度をつけて切断し、ずらしたり、反転させて接合したり、組み合わせたり試行錯誤しながら考えながら取り組ませることである。頭の中でさまざまなイメージをひろげ、自分なりの秩序を導くことができる。こうした材料体験を通して、創意と工夫によって自分ならではの表現を追究させたい。

Ⅱ 導入・展開

題材について

ネクタイ、靴のヒモ、リボン、ロープ、新年の締め縄や、お祝いごとの水引など「結び」は日常生活の中で切り離せないものである。一本の紐を手で結び、花や蝶・紋などを表現する伝統技法も古くからある。結びの方法は数多く、その形は美しく有機的である。

一つのイメージを手に入れる手順、そのアプローチはまさに多様であり、生徒一人一人に任せるべきものでなければならないが、一つの形としてイメージ化させるための発想や構想段階は柔軟に対応する必要がある。ここではイメージが広がりやすい「結び」の形をテーマにして課題を設定した。身近な自然素材である木の棒材を切断してイメージした結びの形を構築する。制作の過程で木の特長や道具の正しい使い方を学び、形の変化を考える。制作を通して野外にある造形作品について関心を持たせ、自然や環境について学ぶ機会としたい。

1　題材の中で育みたい力

評価の観点	育みたい力	具体的な場面
関心 意欲 態度	1 楽しむ	・身近にある立体造形について関心を持つ。
	2 追求する	・試行錯誤をしながらねばり強く課題に取り組む。
	3 つなげる	・イメージした形を制作につなげる。
芸術的な感受や表現の工夫	4 広げる	・材料の特長を理解しイメージを広げる。
	5 深める	・材料の長さや角度、形の変化を考えながら表現を深める。
	6 見通す	・表現課題の達成までの手順を見通して取りむ。
創造的な表現の技能	7 比べる	・発想した形を比べながら制作をする。
	8 選び、決める	・アイデアの中から気に入った形をきめる。
	9 バランスをとる	・よりよい形を探しながら自分なりの秩序をつくる。
	10 使う	・安全に道具の使用方法に留意しながら丁寧に制作をすすめる。
鑑賞の能力	11 感じとる	・作品の置き方を考え、動きや形の変化から生み出すリズムや存在感などを感じ取る。
	12 自己理解	・作品を見ながら題名をつけ、制作をふり返り感想をまとめる。
	13 他者理解	・他者の作品のよさを感じ取る。

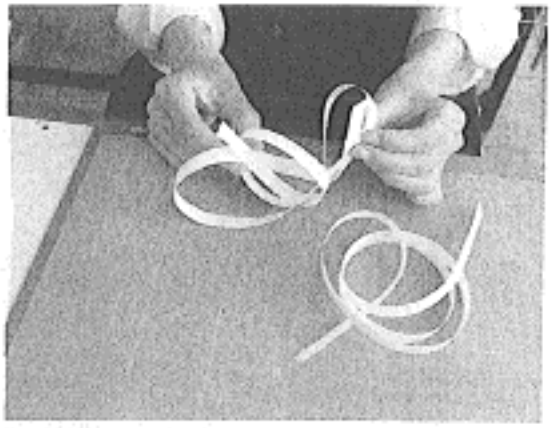
2　授業の展開

(1) 題材との出会い

「結び」の形

① 紙の帯（12㎜幅、長さ900㎜）で回転させて結びのかたちをつくりながらイメージを広げる。

② 設置場所の写真を用意し、作品が実際の大きさになった場面を想定しながら構想を明確にする。



アイデアの中から気に入った形をきめる

(2) 制　作　（7～9時間）

条件を設定することで試行錯誤による工夫がうまれる。自然素材である檜の棒材（12㎜角）は比較的手にはいりやすく、構成後の量感や材質感を失わないぎりぎりの大きさである。１本は練習用とジグの制作用とする。

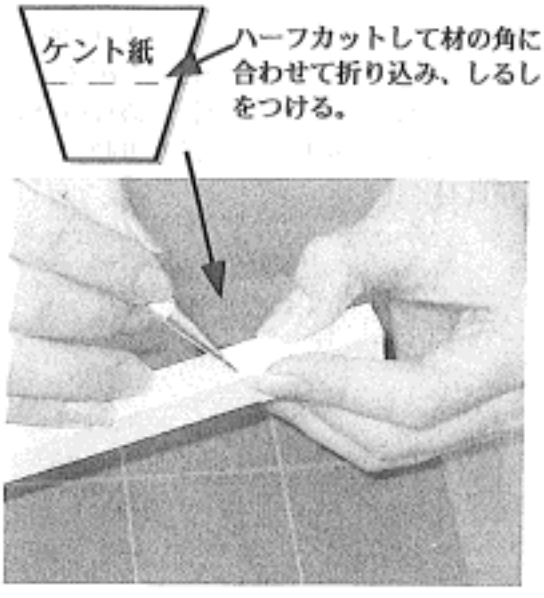
① 制作の条件
与えられた材料のよさを生かして無駄なく使う。

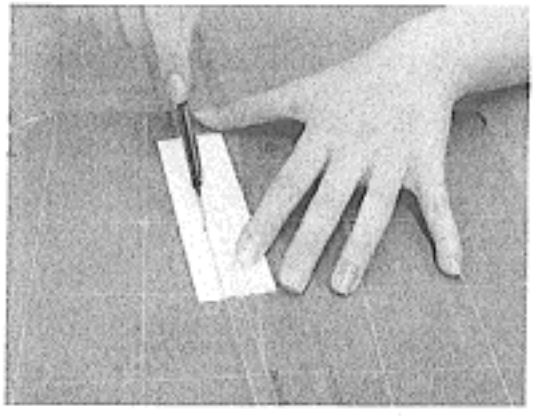
② 材料・道具
檜の棒材（12㎜角、長さ900㎜）２本、ケント紙(切断の角度をつけるための定規)、糸鋸機械、紙ヤスリ、接着剤（酢酸ビニル接着剤）、背景用のジオラマ。

■手で学び・手で考える

木のよさを生かして①道具をつくる②切断③木地を整える④接着⑤構成する。この一連の工程の中で材料と道具と手の間に密接な関わりが必要となる。道具は，ただそれをもちさえすれば，すぐに使いこなせるものではない。習慣化されることによって、手は道具との協調が得られる。道具を使う経験が豊富であればあるだけ、技能は高まる。

(1)棒材の切断角度や長さのしるしをつける道具【写真1】をつくり、切断角度や長さをきめる。【写真2】

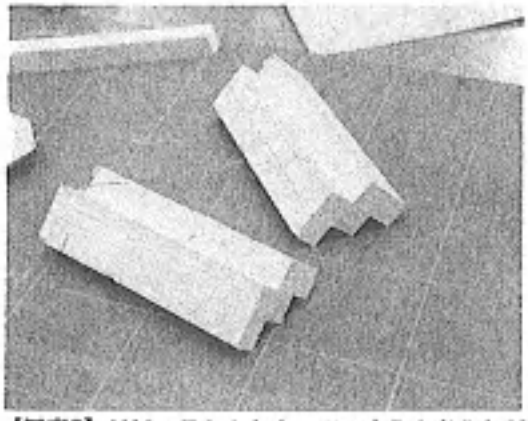


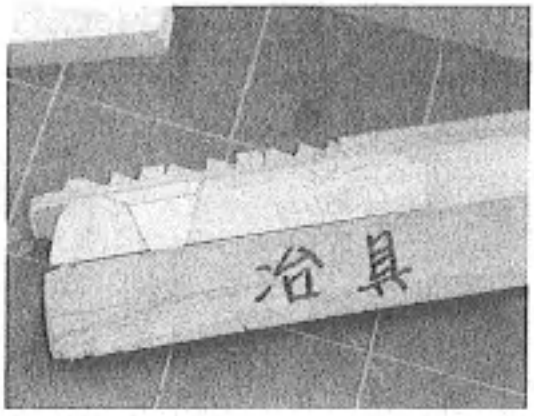


【写真1】表現課題の達成までの手順を見通して取りくむ。

【写真2】材料の特長を理解しイメージを広げる。

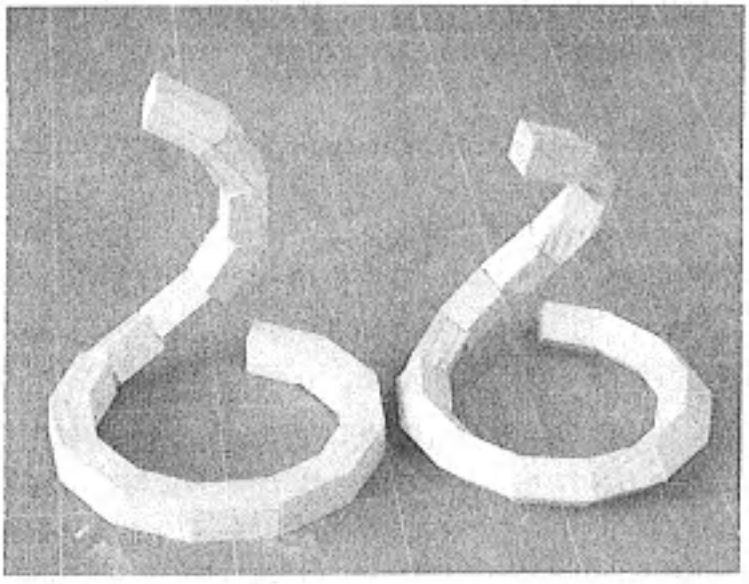
(2) 材料の切断する角度を固定するジグをつくる。【写真3】ジグも一緒に切断すると部品の先が欠けるのが防げる。





【写真3】材料の長さや角度、形の変化を考えながら表現を深める

材料の切断角度の違いによる形の変化

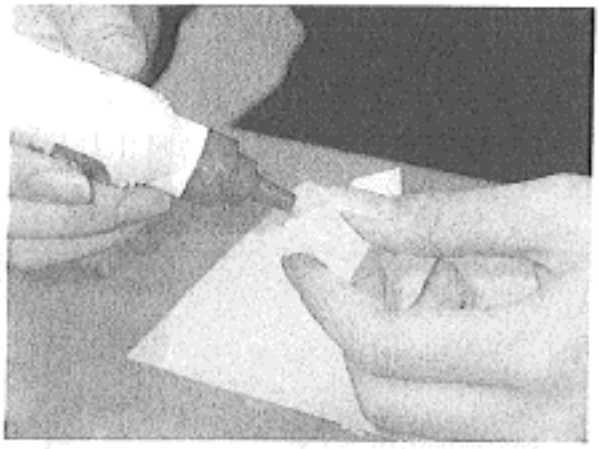


(3) 材料の手のささえ加減と糸ノコの回転速度に合わせた送り加減は練習が必要。木の素材は切断することにためらいがあるために練習をしてから取り組む。
【写真4】

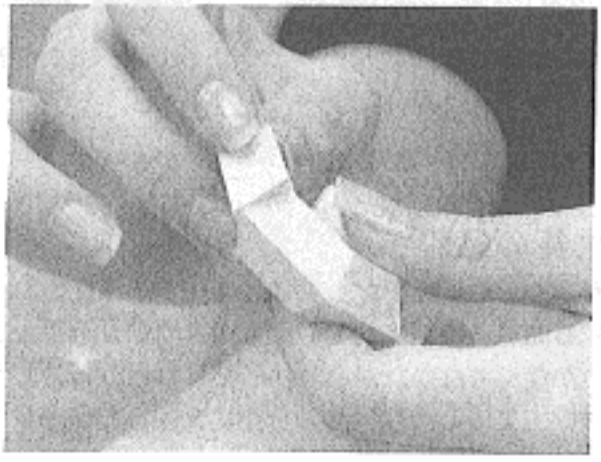
(4) 木の繊維方向を考えながら力の加減に注意し紙ヤスリでケバをとる。接着面を整えるときは力の加減に注意が必要。
【写真5】

【写真4】【写真5】安全に道具の使用方法に留意しながら丁寧に制作をすすめる

(5) 接着剤はあらかじめ木口の両面に薄く塗ると接着力が増す。接着剤がはみ出さないように気をつける。【写真5】

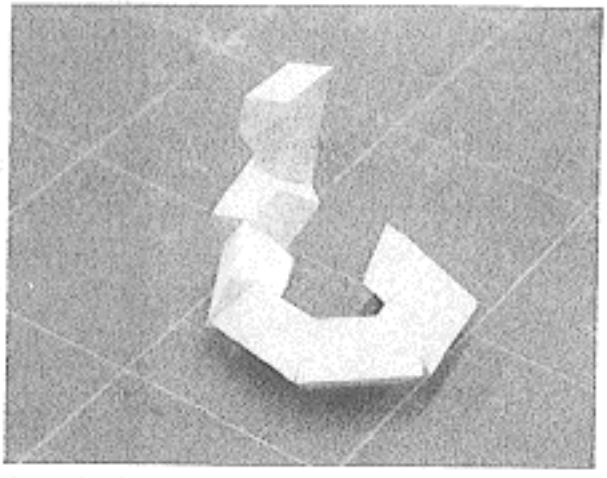


【写真5】イメージした形を制作につなげる



【写真6】よりよい形を追求する

(6) 材料の長さや角度、形の変化を考えながら表現を深める。形の変化を見通しながら数分間手で固定する。【写真6】切削角度により形は変化し、材の長さやずらし方によって多様な形態が生まれる。予測と違った展開が生じることがある。【写真7】【写真8】



【写真8】ずらしや回転による形の変化

Ⅲ まとめ

作品の題名を考えたり、置き方や見せ方を工夫することにより表現の意図がより効果的になるように設置する。

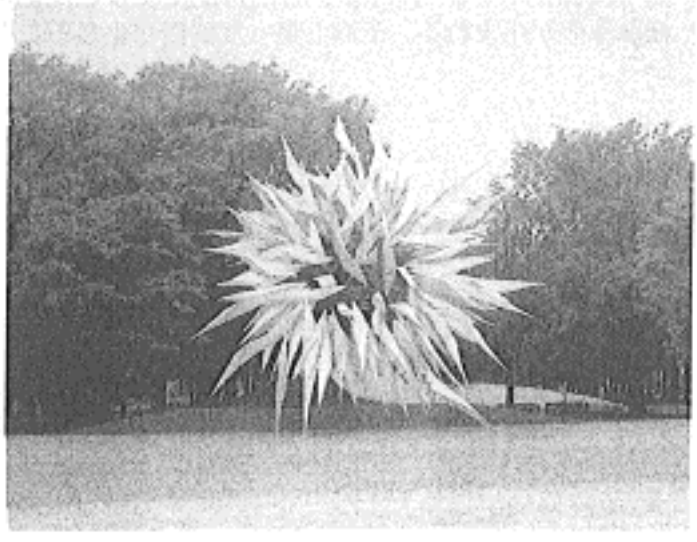
ジオラマ（札幌大通り公園と札幌駅前広場、校舎の玄関前の３ヶ所）を選び、各自が作品の一番気に入った角度で設置して撮影する。

【写真8】作品の置き方を考え、動きや形の変化から生み出すリズムや存在感などを感じ取る。

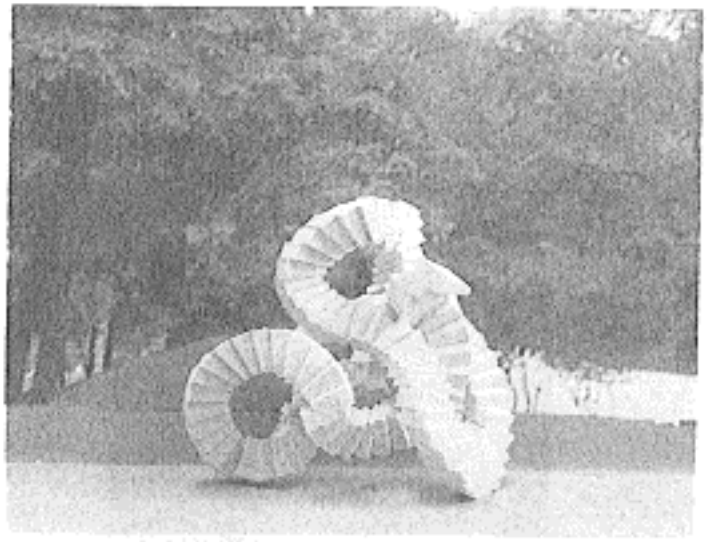
生徒の感想

■「くるくると下から上に届きそうな螺旋のねじれと、対比された階段の段差。二つを構成する曲線と直線すべての要素がコラボレーションして「結び」が完成。結びはうまい具合にいかなくてなかなか難しかったけれど、苦労したところの結びは美しい形になった。段差をつけてまげるより、なめらかにまげる方がキレイにできあがったかもしれない。」

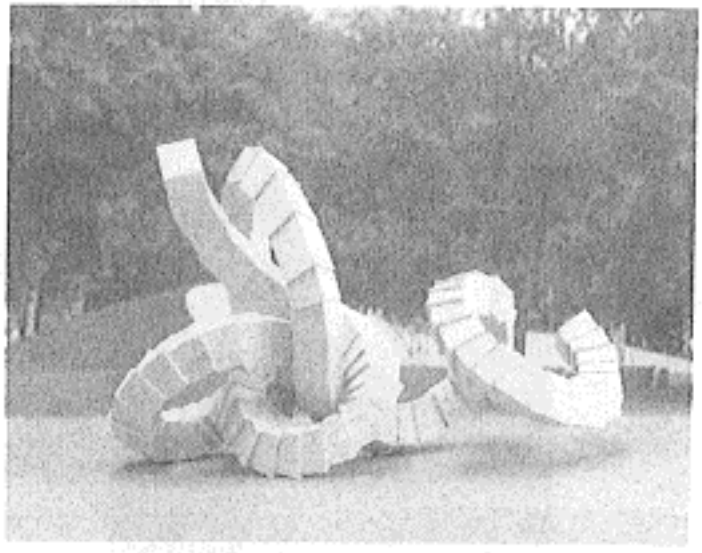
■「「結び」というテーマを意識して、だけど玉結びとかは誰もが思いつくものじゃない。できるだけ細かいパーツにして、思いつくままにつくった。できるだけ同じ形をつかって、それで表現できる。単調だけど複雑な形をめざした。最初から決まった形をつくるのではなく、最初とは違ったイメージとかに変化していく面白さがある。」



【写真9】太陽



【写真10】人間関係

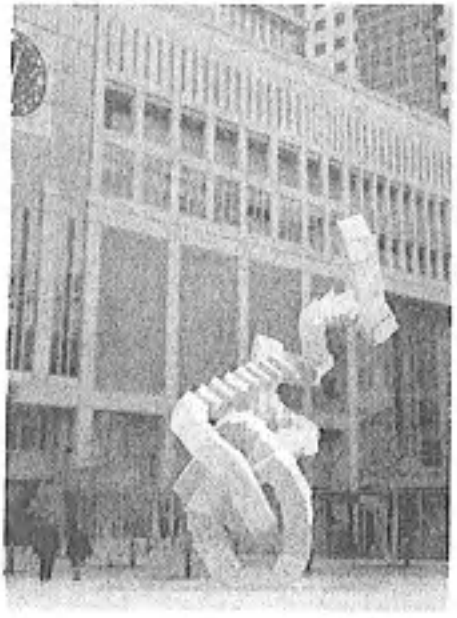


【写真11】結

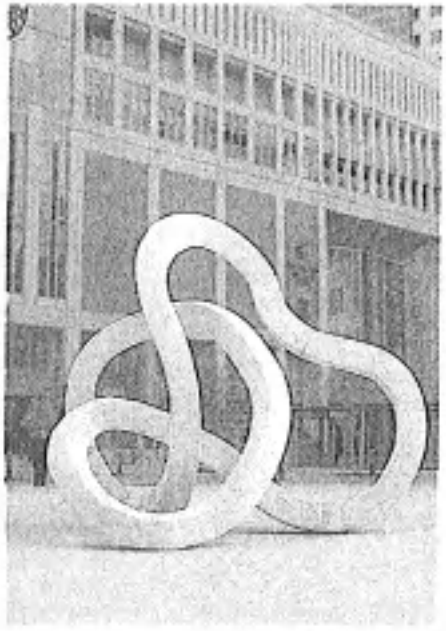
【写真12】S二乗

【写真13】平和

【写真14】旋律



【写真15】誕生



【写真16】螺

おわりに

工業化に影響された生活や環境破壊の中でヨーロッパの近代教育においてすでに、日本においても同様に、人間疎外の克服と人間性の回復が叫ばれ、その背後には必ず人間の「手」と「モノ」が関わってきた。その回復は学校教育の美術教育においてのみ為しうるものである。

この題材は線材の構成である。檜材一本に、無限の可能性がある。接合の方法により面材・塊材の構成も考えられる。

どんな材料であっても、何かをやれば何かが身に付くものではない。楽しければそれでよいというものでもない。教師の「働きかけ」や「問いかけ」が大切と考える。感じ取り方や経験もさまざまにある生徒個々が、発想・構想・制作の過程の中で自らの感覚や想像力、判断力を働かせたり、よりよい方法を模索し、創意工夫したりそれを鍛え高めていくことができるように教材の開発と指導の工夫が求められる。